



Title	近世における俵物・諸色の研究：北奥・蝦夷地を事例に
Author(s)	菅原，慶郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11625号
Issue Date	2015-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11625
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58716
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiro_Sugawara.pdf



平成二十六年 度 博士論文

近世における俵物・諸色の研究
（北奥・蝦夷地を事例に）

所属

文学研究科

歴史地域文化学専攻

日本史学専修

博士後期課程

指導教員

谷本 晃久

学生番号

〇五一五〇〇九

氏名

菅原 慶郎

目次

凡例

序章

- 一、本稿の視角と目的・・・・・・・・・・六頁
- 二、輸出海産物の研究史と課題設定・・・・・・・・九頁
- 三、使用する史料について・・・・・・・・一三頁

第一章 松前・蝦夷地における煎海鼠・干鮑の集荷

- はじめに・・・・・・・・・・二三頁
- 一、松前・蝦夷地と長崎貿易・・・・・・・・二四頁
- 二、煎海鼠・干鮑の生産地と集荷地・・・・・・・・三一頁
- 三、煎海鼠・干鮑の集荷過程と商品の特性・・・・三六頁
- おわりに・・・・・・・・・・四二頁

第二章 タカシマ・オシヨロにおける煎海鼠・干鮑の生産

- はじめに・・・・・・・・・・四七頁
- 一、煎海鼠・干鮑の商品としての登場・・・・・・・・四八頁
- 二、煎海鼠・干鮑の生産活動・・・・・・・・四九頁
- 三、煎海鼠・干鮑の流通過程・・・・・・・・五二頁
- おわりに・・・・・・・・・・五七頁

第三章 松前・蝦夷地における長崎向け昆布の集荷

はじめに	六四頁
一、松前昆布の生産地と生産量	六五頁
二、松前昆布の商品分類	六八頁
三、輸出商品の出荷	七一頁
おわりに	七六頁

第四章 トカチにおける昆布の生産過程

はじめに	八二頁
一、トカチにおける昆布	八二頁
二、トカチの昆布生産	八六頁
三、トカチにおける海産物	九〇頁
おわりに	九三頁

第五章 ラッコ皮の集荷

はじめに	九七頁
一、ラッコ皮の商品としての特徴	九七頁
二、長崎貿易向けのラッコ皮	一〇一頁
おわりに	一〇五頁

第六章 南部藩における長崎向け昆布の集荷

はじめに	一一〇頁
一、南部昆布の生産	一一一頁
二、南部昆布の集荷	一一五頁
三、南部昆布の出荷	一二〇頁

四、南部昆布の歴史的意義・	一二三頁
おわりに・	一三〇頁

第七章 俵物・昆布比較考

―松前・蝦夷地と南部藩を事例に―

一、俵物・昆布と長崎貿易・	一三七頁
二、松前・蝦夷地の俵物・昆布・	一三八頁
三、南部藩領の俵物・昆布・	一四〇頁
四、「ミツイシ昆布」考・	一四二頁
総括・	一四四頁

終章

一、本稿の要点・	一四七頁
二、各輸出海産物の特質・	一四九頁
三、輸出海産物に示す昆布の意義・	一五〇頁

初出一覧

主要参考文献

参考資料（地図編）

凡例

- (1) 史料名は、原則として所蔵機関で用いられているものに従う。
- (2) 注は、各章ごと章末に付す。
- (3) 蝦夷地の地名については、必ずしも同一記載ではなく、史料中の記載を優先し必要に応じて説明を付す。それに加えて、参考資料(地図編)も参照されたい。
- (4) 引用にあたり以下の処理をする。
 - ・引用史料に句読点、および中黒(・)を適宜付す。
 - ・引用文中の筆者による註記は、()内に示した。(欠)は、欠字を示す。
 - ・判読不明な文字は□で示す。また、右傍に小字で(ママ)としたものは、原文のままとした文字を示す。
 - ・変体仮名は現在一般的な平仮名に改めたが、「ㇿ」「より」の合字、「江」
「之」、「者」、「茂」などは、そのままとする。

序章

本稿は、一八世紀後半を中心とした長崎向け商品（唐人向けの輸出商品）として、北奥・蝦夷地¹で生産される俵物（煎海鼠²・干鮑³）・諸色（昆布・ラッコ皮）について、その長崎への流通過程を考察する中で、とりわけ長崎貿易に占める昆布の位置づけを検討するものである。

なぜ昆布に着目するのかといえば、輸出海産物の中でも最も重要な位置にあると思われるからである。輸出海産物の流通史を体系化した荒居英次氏によれば、「中国向け海産物貿易といえば、従来は俵物貿易に重きをおいて考えられていたが、実際には昆布をはじめとする海藻類や、乾物類からなる諸色海産物が輸出され、常に俵物を凌駕する輸出高であることが判明した」⁴と指摘されているにもかかわらず、実はこれまでの輸出海産物の研究史では、昆布の詳細な集荷システムが明らかにされていない。

また、主に時期を一八世紀後半にしぼる理由は、天明五（一七八五）年に長崎向け商品の集荷をとりしきる主体が、特権商人である長崎俵物一手請方問屋⁵。（以下本稿では、請方問屋と表記する）から、幕府の下部組織である長崎会所⁶へと変化するためであり、その画期における集荷方法の変容過程に注目したいからである。そこで、北奥・蝦夷地産の各輸出海産物の特質が明らかになると目されるためである。

一、本稿の視角と目的

最初に、長崎貿易をめぐる唐人向けの輸出商品の中で占める俵物や昆布などが注目される歴史的経緯をまとめておきたい。江戸幕府は、近世初期より直轄地長崎で外国貿易を独占する。これが、いわゆる「長崎貿易」で近世を通じて継続される。これは、輸出品と輸入品のバーター（求償）取引で行われたもので、中でも輸出商品は、国内各地で生産された様々な商品が充当する。それは当然、国内各地における長崎向けの

商品流通によって調達される。当初、主な輸出品は、金や銀を中心とした貴金属類であった。ところが、国内の鉱山における相次ぐ資源の枯渇は、貿易自体の存続に関わるほどの大きな問題となる。そこで、元禄十一（一六九八）年から、「俵物諸色替」⁷が実施される。この制度により輸出品は、これまでの貴金属類から再生産可能な海産物、酒や醤油、小間物や道具類に至るまで幅広い商品へと代替可能となる。これは、あくまで御定高（一年間の貿易限度額）の外に設定されたもので、幕府への運上金上納を条件として認められる。この時期、長崎会所が設立され、長崎に関わる金銭勘定と、貿易の取引関係などの諸業務を行うようになる。

正徳五（一七一五）年に新井白石らにより正徳新例（海舶互市新例）が出され、海外への貴金属類の輸出縮小を目論んだ大幅な改革が断行される。さらに、俵物の集荷を商人に任せるべく、延享元（一七四四）年、本格的に請方問屋による独占集荷が始まる。そこで、大坂と下関に俵物役所が設けられ、国内各地に指定問屋が設定されるようになる。

次に俵物・諸色の集荷で大きな画期となるのが、一八世紀も後半にさしかかった宝暦十三（一七六三）年であろう。この年から、外国金銀の輸入が開始され、それに対して俵物や昆布が輸出品として充当されるのである。そのため、より一層輸出品としてこれら商品が重要になる。

さて、本稿で注目したい一八世紀後半の近世社会は、大きな変革の時を迎えていたとされる。宝暦・天明期（一七五一～一七八八）は、幕藩制社会の崩壊に至る一つの画期とされており⁸、商品流通史の側面からも、幕藩制市場構造の解体へ向かう起点と捉えられている⁹。具体的には、流通勢力の台頭と伝統的流通市場の動揺によって、幕藩制社会の各分野で旧来の仕組みが大きく動揺し、その矛盾が一举に表面化した時代であったとされる¹⁰。例えば、本稿で主に扱う松前・蝦夷地では、それまで産物を扱っていた近江商人に替わり、新興商人が台頭し、「北前船」も登場してきたとされる頃である¹¹。

そのような時代背景は、俵物の集荷においても、「個別領主権との対立をみながらも、全幕藩的な規模での諸政策の展開¹²」の一例として、あるいは、「銅・俵物に対する官設会所への強制買入等、いずれも大名経済の規制という共通の側面をもっている¹³」とされている。

こうした事態は、田沼意次政権による財政立て直しのための一連の経済政策が大きく影響するといわれる。長崎貿易の拡大策もその大きな柱の一つであり、具体化された政策が、天明五年の長崎会所による直仕入なのである。それにより、輸出品の生産地における集荷の強化がされ、とりわけ生産量の多い松前・蝦夷地や北奥諸藩が注目されるようになる¹⁴。

さらに、俵物・諸色が輸出品の主要品目になった後、同様に輸出品の筆頭であり続けた銅の大幅な減産も拍車をかける。そのため、貿易を維持するために俵物・諸色が更なる重要度を増すことになる。ついに寛政三（二七九一）年には、「半減商売令」がだされ、長崎貿易は危機に陥る。具体的には、唐船来航数が元禄期には、七〇艘あったものが徐々に減らされ、約一〇〇年後の寛政期には一〇艘にまで減らされた。それに唐人が大きく反発したこともあり、番外船（規定の一〇艘以外の船）が認められるなど緩和措置もとられる。

以上より一八世紀後半は、俵物・諸色が長崎貿易を維持するために必要不可欠な商品として存在したことがわかる。また北奥・蝦夷地は、俵物・諸色（中でも昆布・ラッコ皮）の最有力生産地として注目されるようになるため、本稿で検討対象とする。

これまで近世における輸出品の流通過程に特化した研究としては、銅¹⁵と俵物に関するものがあげられる。中でも後で詳述するが、俵物は流通・貿易統制の観点から、全国的に詳細な生産・集荷体制が明らかにされつつあり、天明五年の直仕入の画期にも着目されている。しかし、それ以外の昆布やラッコ皮などの諸色といわれる商品の集荷過程の実態について、俵物と比すれば研究が大きく立ち遅れているといわざるをえない。中でも昆布は、俵物を遥かに凌ぐ輸出量と貿易利益を生み出していた¹⁶にも関わらず、

これまでの俵物研究と切り離されている。そのため昆布は、本稿において最も注目した商品なのである。

二、輸出海産物の研究史と課題設定

ここでは、北奥・蝦夷地産の輸出海産物ごとに先行研究を整理し、その中で課題設定を行いたい。一でも述べたように、本稿最大の課題は、これまでの輸出海産物に関する研究史における昆布の位置づけを検討することにある。結論から端的に述べると、輸出海産物の中では、俵物研究が大きく進展しており、諸色である昆布やラッコ皮研究との接続ができていないのが実情である。

(1) 俵物

俵物とは、煎海鼠・干鮑・鱧鰭のいわゆる「俵物三品」で構成され、長崎貿易において唐人向けの輸出商品として重宝される。これらの商品は、中国で高級食料や薬品としての需要が大きい。前者二品のうちナマコは、日本のみならず東南アジアや、南太平洋島嶼部から中国へ輸出されていた¹⁷。アワビ¹⁸も加えて日本では全国的に生産されることが、とりわけ北方地域が良質かつ主要生産地にあたる。

これまでの俵物に関する研究は、まことに豊富である。古くは、戦前から注目されており、中でも沼田次郎氏¹⁹がその嚆矢であろう。沼田氏は、長崎会所による俵物貿易の実態と生産地の分布を明らかにした。その頃から、石井孝²⁰・宮本又次²¹各氏により、長崎会所による俵物の輸出貿易のシステムについて、森嘉兵衛²²・近松文三郎²³・白山友正²⁴・鎌田永吉²⁵各氏らにより、俵物生産地の実態、とりわけ北海道や東北地方が検討対象とされてきた。

その後、俵物を最も追求したのは、荒居英次²⁶・小川国治²⁷両氏である。荒居氏は、日本各地の俵物生産の状況を漁業史の視点から詳細に追った点が注目される。小川氏は、

それまでの俵物研究を体系的にまとめ、幕府による経済政策の中での位置づけを明確に示した。

さらに近年、若松正志氏²⁸は、長崎における集荷量などの数値的分析により俵物貿易の実態を明らかにする中で、俵物に使用されるナマコやアワビの国内における潜在的な需要にも注目した。

他にも現在に至るまで、着実に日本各地で個別の俵物の生産現場における状況を中心に明らかにされつつある²⁹。

これらの数多ある先行研究を大枠でまとめると、幕府による流通統制の視点からの貿易システムの解明と、国内各地の俵物生産という二つの視点に関心が集中しているようである。そこで、本稿で俵物については、「各商品としての特質」という視点を加えて捉えなおすこととしたい。なぜなら、そこから見える集荷における商品としての特質に集荷側の意図が看取されると目されるのみならず、俵物とひとくくりにされがちなナマコとアワビという各商品の特質を描くことも可能であると考えられるためである。

そうした問題関心に基づき、第一章では、まず先行研究でほとんど触れられていない史料を用いて、一八世紀後半の松前・蝦夷地における俵物集荷の実態を再検討する。中でも各商品の特質を正確におさえることを目的とする。具体的には、天明五年の集荷体制の画期に注目し、松前藩と長崎貿易は、俵物昆布の生産を通して、どのような関係性があり、そこに介在する集荷問屋の動向も含めた流通の構造的な問題を明らかにする。その中で、長崎向けにのみ絞られないナマコとアワビの商品としての特質を洗い出した。

第二章では、これまで俵物研究が松前・蝦夷地全体を対象に語られてきた実態を踏まえ、一人の場所請負人が経営する「場所」社会において、俵物生産がどのように展開されたのかを考察する。さらに先行研究では、主に俵物生産の中でも集荷過程に注目されてきた。そこで各「場所」でどのような人々が、どのようにナマコやアワビを煎海鼠や干鮑に加工していたのかという視点を入れたい。これらを鑑み、史料的制約により幕末

の事例になってしまうものの詳細に検討する。

(2) 昆布

昆布は、本稿で最も重点的にとりあげたい輸出商品である。昆布の流通を検討する意義を確認したい。

先述したように輸出品の中でも俵物に関する研究は、非常に蓄積があるのに対し、昆布に関する研究に目を向けると、ほとんどが学際的な研究で、詳細な実証研究に乏しい。

昆布に関する先行研究を整理すると、まず古典的ではあるが、羽原又吉氏³⁰による研究が注目される。これは、書名に「支那輸出」と掲げているものの、輸出向けの昆布のみとりあげたものではなく、昆布の生態から歴史的展開をまとめた、まさに学際的な研究書である。ここでは学際的であるがゆえに、近世における輸出向けの昆布の記述は少量であり、内容についても二次史料が主で近世の一次史料はあまり用いられていない。続いて、稲垣美三雄氏³¹による情報量の多い「昆布百科」や、北海道の昆布漁業史をまとめた田澤伸雄氏³²によるものがあげられる。その中においても、輸出品としての昆布に関する記述は、ほとんど羽原氏の研究を踏襲しているのみならず、大方明治以降がとりあげられている。

近世における輸出品としての昆布のみをとりあげた先学は、俵物研究の先学でも紹介した白山氏³³と田島氏³⁴があげられる。しかし、両者とも松前・蝦夷地産の輸出品は、俵物を主軸にとらえているため、昆布はあくまでも付属的な位置づけがなされている。

さらに近年は、とりわけ一九世紀以降の薩摩藩による琉球王国を通じた中国との密貿易の中で扱われる昆布が注目され、幕末にかけてその比重が増し、従来の長崎貿易を圧迫していく過程が実証的に明らかにされつつある³⁵。

そのため、長崎へ廻漕される昆布の調達ルートに関しては、未だに羽原氏による説明

をそれほど発展させていないと見られる。そうして何よりも最も重大な輸出商品としての昆布に関する問題は、分厚い俵物研究との接続ができていないことである。

それを受けて本稿第三章では、一八世紀後半に焦点をしぼり、松前・蝦夷地における昆布の商品分類（各商品ごとの特徴まで）から価格や集荷量、さらには出荷仕法などの流通の実態解明を可能な限り詳細に行う。その中では、俵物と商品としての特質を相違も明らかにする。

第四章では、俵物の生産活動を追求した二章と同様な視点から、一つの昆布生産地であるトカチ場所に焦点を当て、その生産過程の解明と「場所」社会における位置づけを検討する。

さらに、昆布は現在においても、北海道が生産の中心で国内生産高の九十五%を占めており、本州産はほんのわずかである。そうした事情は近世でも変わりないと思われるかもしれない。これまで昆布の流通に関する研究は、松前・蝦夷地のみに特化されてきたといっても過言ではない。そこで第六章では、南部藩領で生産される長崎向け昆布を考察対象とし、生産から出荷に至る流通過程を解明する。そこでは、松前・蝦夷地や津軽藩で生産される長崎向け昆布との比較検討も行い、南部藩領で生産される昆布が輸出商品に占める歴史的な意義を明らかにする。

本稿随所で、輸出商品の商品としての特質を探るために比較検討を行うが、その総括として第七章では、俵物と昆布を価格や集荷量などの特徴から徹底比較する。加えて、輸出商品として一九世紀以降、大きく注目される「ミツイシ昆布」の名前の由来や、産地の定義などを検討する。

(3) ラッコ皮

蝦夷地産の輸出商品として、ひととき異彩を放っているのが、海獣ラッコの毛皮（ラッコ皮）である。ラッコはイタチ科の哺乳類で、生息域はアメリカ大陸のカリフォルニア地域から、千島列島（クリル諸島）までの北太平洋沿岸諸地域である³⁶。中でも、

近世の史料に登場するラッコ皮は、基本的に千島列島において捕獲されたものであるといわれる。

ラッコ皮の流通に言及した先行研究をまとめる。児島恭子氏³⁷は、ラッコ皮の流通について、中世から近代まで概説している。北構保男氏³⁸は、ラッコ捕獲の研究史と文献などを考古学的知見からまとめている。三浦泰之氏³⁹は、「弘前藩御国日記」から、贈答品としてのラッコ皮の史料を紹介している。川上淳氏⁴⁰は、「千島交易品」として、ラッコ皮を鉄鍋などと共にとりあげている。さらに近年、国立民族学博物館で流通商品としてのラッコも扱った展示会が開催され図録が発行された⁴¹。

そうしたなか、輸出商品としてのラッコ皮に焦点をしばったのは、高橋周氏⁴²である。高橋氏は、一八世紀から一九世紀初頭にかけて行われた日本のラッコ皮輸出について、当時世界各国から中国へラッコ皮が流入していたこととあわせて、「国際競争」という視点を加えた。つまり、日本から中国へ流入するラッコ皮も世界的な毛皮市場の中で見ると指摘したのである。それは、最近の日本近世の通史にも積極的に組み込まれている⁴³。

これら先行研究を踏まえ、第五章では、ラッコ皮の具体的な松前における集荷過程に着目し、そこでの商品としての特質を検討する。とりわけ（１）でまとめた、これまでの俵物研究を意識し、松前・蝦夷地産の輸出商品の中での位置づけを示したい。

三、使用する史料について

ここで、本稿で主に使用する史料を紹介する。新しい知見も盛り込みたいため、これまでの輸出商品に関する先学では、ほとんど分析されていない史料を中心に用いたい。

（１）長崎県の史料

本稿で、重点的に使用する「長崎元俵物請方雑書」⁴⁴は、明治初期に長崎区役所が

作成した写本が残存する長崎歴史文化博物館所蔵の史料である。これは、請方問屋が俵物・諸色の集荷をした時代の史料で、松前・津軽・南部という北国筋の輸出商品の集荷に関する調査報告書である。その作成過程は、請方問屋が輸出商品の集荷事情について北国筋の集荷問屋に調査を依頼し、それをまとめたものと見られる。年代は、史料中に「辰年」とのみ記載されており、一見不明に見えるものの、南部藩の俵物集荷問屋を請け負う南部宮古の和泉屋惣次郎（天明元年より請負開始）が見受けられること、南部野田の支配問屋が存在すること（天明五年廃止）より、その間の辰年である天明四（一七八四）年である⁴⁵。よって本稿では、天明四年の史料として用いる。

続けて本稿で用いる初村家（旧峰家）史料は、長崎県の大村市立史料館に所蔵されている。初村家は、代々長崎会所の請払役を勤めてきた長崎町人の家柄で、初村家と史料を所持していた峰家とは親類関係にあたる⁴⁶。史料群には、長崎会所関係のほか、広く長崎市中の行政に関するものが含まれている。その中で、寛政元（一七八九）年の「去ル巳年御直仕入被仰出候以来松前三ヶ所俵物昆布稼方之儀御取調子ニ相成候一件」⁴⁷と「去ル巳年御直仕入被仰出候以来津軽南部俵物昆布稼方之儀御取調子に相成候一件」⁴⁸は、天明五年の幕府による直仕入れ後の俵物や昆布の集荷状況が詳細に書き記されている。これら史料は、先述の「長崎元俵物請方雑書」と併用することにより、天明五年の幕府による直仕入の前後で、集荷方法にどのような変化があったのかを具体的に検討することが可能となる。初村家史料は、俵物に関する先学の中で若松正志氏⁴⁹が数量分析などに一部を用いているのみである。

（2）場所請負人関係史料

俵物や昆布の集荷先である長崎で作成された史料のみ用いては、詳細な生産地の事情は明らかにできない。そのため実際に、松前・蝦夷地の輸出商品を集荷した場所請負人の文書を補足的に用いる。

まず、第二章の煎海鼠と干鮑の生産に関する考察の部分では、住吉屋西川家の文書を

主に使用する。住吉屋西川家は、近江商人で一七世紀頃から松前に店を開き、一八世紀中頃から幕末まで一貫して、西蝦夷地のタカシマ・オシヨロ場所を請け負う。「場所」の生産物の中にナマコとアワビも含まれていたのである。現在、住吉屋西川家の史料は、小樽市総合博物館の他、滋賀大学経済学部附属史料館、滋賀県立大学図書情報センター等で所蔵されている。本稿では、オシヨロの旧西川家文庫蔵で長らく保存され、後に小樽市に寄贈されたものである小樽市総合博物館所蔵分⁵⁰を用いる。

次に、第三章の松前・蝦夷地に関する昆布に関する集荷の部分では、一八世紀後半の場所請負人の文書である武川家文書の「昆布買入方一件」⁵¹も併用する。当史料は、詳細な生産地から、流通の実態まで詳しく書かれており、寛政初期の昆布の流通を見る上で見逃せないものである。飛騨屋（武川）久兵衛家は、飛騨国増田郡湯之島村から出て、一八世紀後半、蝦夷地の場所請負人とし、材木の集荷業や漁業経営を手掛けた家柄である⁵²。その中に、俵物や昆布の集荷に関する史料が含まれている。現在、本史料は岐阜県歴史資料館に寄託されている。なお、武川家文書のうち俵物に関する史料は、松前・蝦夷地関係の先行研究で用いられている。

続いて、第四章の昆布の生産に関する考察では、トカチ場所の場所請負人である福島屋文書（杉浦嘉七家）を補足的に用いたい。『新広尾町史』⁵³によると、福島屋の主人である清兵衛は、近江商人で蝦夷地の支配を任されたのが、杉浦嘉七である。嘉七は、元々江戸で旗本の御用達であったが、文政年間箱館に移住し、程無くして福島屋の支配人となった。その後、福島屋の屋号を譲り受けたようで、箱館在住の場所請負人として活躍する。幕末には、蝦夷地産物の流通を掌握するべくして設立された箱館産物会所用達元締を兼ね、商品取扱方を引き受けた家柄でもある。当史料は、函館市中央図書館所蔵である。

(1) 北奥・蝦夷地とは、本稿において松前・蝦夷地、ならびに南部・津軽藩領域を指すものとする。

(2) 煎海鼠とは、煎海鼠はナマコの内臓をとり、煮て乾燥させたもの。

(3) 干鮑とは、アワビの身を貝から外してから、煮て乾燥させたもの。製法により白干鮑と黒干鮑があるが、輸出商品は白干鮑に限定される。

(4) 荒居英次『近世海産物貿易史の研究―中国向け輸出貿易と海産物』（吉川弘文館、一九七五年）五八九頁。

(5) 長崎俵物一手請方問屋は、長崎俵物商人八人（長門屋伝助・帯屋庄次郎・品川清兵衛（作太郎）・住吉屋新右衛門・近江屋庄兵衛・播磨屋九八郎・岸八兵衛・入来屋利右衛門）により構成され、幕府から全国集荷を独占的に請け負った。その後、明和年間（一七六四～一七七二）までには、一〇人体制となった。

(6) 長崎会所は、長崎奉行所の下部組織で、長崎の貿易・財政および運上に関する役所である。元禄期に開設され、天明五年に、長崎俵物一手請方問屋の経営難により、長崎俵物役所を設け、俵物・諸色の集荷を直接請け負うことになった。

(7) 俵物諸色替は、元禄十年に俵物・諸色が、幕府により唐人貿易の見返りとして輸出される方式である。

※このうち、北奥・蝦夷地で生産される品目は、俵物は煎海鼠・干鮑・鱧鰯（南部藩のみ）、諸色は昆布・ラッコ皮とアザラシ皮（松前・蝦夷地のみ）であり、幕末にはスルメも加わる。

(8) 林基「宝暦～天明期の社会情勢」（『岩波講座日本歴史 近世四』岩波書店、一九六三年）。

※明治維新への起点として、田沼政権下の宝暦・天明期に注目し理論的提起を行った。

(9) 林玲子『江戸問屋仲間の研究―幕藩体制下の都市商業資本―』（御茶の水書房、一九六七年）、中井信彦『転換期幕藩制の研究―宝暦・天明期の経済政策と商品流通―』

(塙書房、一九七一年)。

(¹⁰) 斎藤善之「総論 流通勢力の交代と市場構造の変容」(同編『新しい近世史(三) 市場と民間社会』(新人物往来社、一九九七年)、同「近世的物流構造の解体」(『日本史講座(七) 近世の解体』東京大学出版会、二〇〇五年)。

(¹¹) 榎森進『北海道近世史の研究―幕藩体制と蝦夷地―』(増補改訂、北海道出版企画センター、一九九七年)。

(¹²) 中井信彦「宝暦く天明期の歴史的位置」(『歴史学研究』二九九、一九六五年)。

(¹³) 松本四郎「宝暦・天明期に関する研究史と問題点の整理」(『歴史学研究』三〇四、一九六五年)。

(¹⁴) 幕府は、天明五年の直仕入に際して、全国に俵物の請負高を設定した。その中でも、松前・蝦夷地の請負高の全国に占める割合は、煎海鼠が約三〇%、干鮑は約四〇%も占めた。荒居英次『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年) 一七五頁。

(¹⁵) 代表的な研究としては、作道洋太郎「近世銅貿易の成立と住友両替店の創業」(『日本歴史』三〇七、一九七三年)、小葉田淳『日本銅鉱業史の研究』(思文閣出版、一九九三年)、近年、今井典子氏による「近世日本の銅―銅市場と銅統制」(『住友史料館報』三九、二〇〇八年)を始めとした一連の研究などがあげられる。

(¹⁶) 安永七(一七七八)く天明二(一七八二)年の五ヶ年の平均利潤(銀換算)は、煎海鼠約五万八、〇〇〇匁・干鮑約四万三、〇〇〇匁に対し、昆布は約五万七二、〇〇〇匁(上納金や運賃などの雑費を差し引いても三一万三二〇匁)にも上る。小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』(吉川弘文館、一九七三年) 四一頁表九と八六頁表六より算出。

※なお煎海鼠と干鮑の集荷にかかる雑費は、俵物として一括されており厳密な計算ができない。

(17) 鶴見良行著、中村尚司編集／解説『鶴見良行著作集九 ナマコ』（みすず書房、一九九九年）。

※鶴見氏は、ナマコについて学際的に考察され、アジアからオーストラリアまでのナマコ文化を研究した。

(18) 矢野憲一『ものと人間の文化史 六二 鮑』（法政大学出版局、一九八九年）。

※矢野氏は、アワビの歴史から文化・民俗など幅広く扱っており、得られた知見も多い。

(19) 沼田次郎「日清貿易に於ける一問題」『歴史地理』六八―五・六、一九三六年）。

(20) 石井孝「幕末開港後における貿易独占機構の崩壊―特に俵物を中心に」『社会経済史学』一一―一〇、一九四二年、後に同『幕末開港期経済史研究』有隣堂、一九八七年増訂再収）。

(21) 宮本又次『近世商業経営の研究』（著作集第三巻）（講談社、一九七七年）。

(22) 森嘉兵衛「三陸東海岸における長崎俵物生産の研究―奥羽漁村の研究―」『社会経済史学』九―六、一九三九年、後に『奥羽社会経済史の研究／平泉文化論』（森嘉兵衛著作集1）法政大学出版会、一九八七年再収）。

(23) 近松文三郎「松前煎海鼠」『太湖』一〇九―一一七、一九五二年）。

(24) 白山友正「徳川幕府の官営商業の一例―長崎俵物と蝦夷地交易との関係―」『社会経済史学』三一―四、一九三三年）、同「松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」『北海道経済史研究所研究叢書』二九、一九六二年）、同「続 松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」『北海道経済史研究所研究叢書』三七、一九六四年）、同「松前蝦夷地における長崎俵物の研究補遺」『漁業経済研究』一三一―四、一九六五年）。

(25) 鎌田永吉「奥羽諸藩における長崎俵物の統制」『文化』二二―四、一九五八年）。

(26) 荒居英次「隠岐の俵物生産と幕府派遣海士の入島」『山陰―地域の歴史的 성격』雄山閣出版、一九七九）、前掲注（四）・（一四）書。

(²⁷) 前掲注(一六) 小川書。

(²⁸) 若松正志「長崎俵物の地域別集荷高について」『東北大学附属図書館研究年報』二四、一九九一年)、同「仙台藩領における長崎俵物の生産・集荷」(渡辺信夫編『近世日本の生活文化と地域社会』河出書房新社、一九九五年所収)、同「長崎俵物をめぐる食文化の歴史的展開」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』創刊号、一九九六年)。

(²⁹) 児玉洋一「徳川幕府の煎海鼠増産奨励について」『経済史研究』二八―二、一九三七年)、江頭恒治「今出銅山と俵物巡検使」『経済史研究』二八―三、一九三七年)、津川正幸「隠岐島前における俵物生産」『史泉』七・八、一九五七年)、清水三郎「俵物の統制集荷と産地の対応―尾鷲地方と志摩の場合」『漁業経済研究』一一―三、一九六三年)、小林茂「長州藩における俵物問題」『歴史学研究』二九九、一九六五年)、松浦章「日清貿易による俵物の中国流入について」(『千里山文学論集』七、一九七二年)、同「江戸時代に長崎から中国へ輸出された乾物海産物」(『関西大学東西学術研究所紀要』四五、二〇一二年)、田中豊治「隠岐における長崎俵物の歴史地理学的研究」(『歴史地理学紀要』一四、一九七二年)、同「近世末期における長崎俵物の生産、流通の地域的特色」(『漁業経済研究』一九―三、一九七二年)、同「隠岐における長崎俵物流通機構の推移」(『漁業経済研究』二〇―三・四、一九七四年)、同「近世能登俵物(海鼠)の生産と流通」(『漁業経済研究』二五―一、一九七九年)、小林真人「松前蝦夷地産俵物の生産と集荷―俵物役所直仕入制成立前後まで」(『松前藩と松前』一七、一九八一年)、小野田健一「近世日中貿易史の一考察―俵物貿易を中心に」(『関西学院経済学研究』二三、一九九二年)、高橋美貴「鮑を通してみた三陸と江戸―近世後期における三陸産鮑の生産―流通―消費をめぐって―」(渡辺信夫編『近世日本の生活文化と地域社会』河出書房新社、一九九五年所収)、同「俵物増産と海士集団の出漁―佐渡国海士町海士を事例として」(『歴史』一一二、二〇〇九年)、同『近世・近代の水産資源と生業―保全と繁殖の時代―』(吉川弘文館、二〇一三年)、

畑井洋樹「問題提起九 俵物生産と盛岡藩の対応―安永期を中心に―」（『地方史研究』五三―四、二〇〇三年）、飯田美苗「下北郡・佐井村「金丸家文書」にみる俵物生産の推移」（『東奥文化』八〇、二〇〇九年）、橋村修「あま漁村の俵物諸色海産物の採取と集荷の権利―近世後期の肥後国天草郡二江を事例に」（『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅱ、六三、二〇一二年）、鈴木秋彦「鮑食禁忌伝承の変容―鉱物資源生産から俵物生産への転換のなかで」（『アジア遊学』一六六、二〇一三年）、田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』（清文堂出版、二〇一四年）などがある。

⁽³⁰⁾ 羽原又吉『支那輸出 日本昆布業資本主義史』（有斐閣、一九三五年）。

⁽³¹⁾ 稲垣美三雄『日本昆布大観』（正進堂、一九四七年）。

⁽³²⁾ 編著／発行 田澤伸雄『北海道昆布漁業史』（一九九〇年）。

⁽³³⁾ 前掲注（二四）白山諸論文。

⁽³⁴⁾ 前掲注（二九）田島書。

⁽³⁵⁾ 大石圭一『昆布の道』（第一書房、一九八七年）、深井甚三『近世日本海海運史の研究―北前船と抜荷―』（東京堂出版、二〇〇九年）、胡桃沢勘司『近世海運民俗史研究―逆流 海上の道―』（芙蓉書房出版、二〇一二年）。

⁽³⁶⁾ 吉川美代子『ラッコのいる海』（立風書房、一九九二年）二八―二九頁。

⁽³⁷⁾ 児島恭子「ラッコ皮と蝦夷錦の道」（『歴史の道・再発見 第一巻・平泉からロシア正教まで』フォーラム・A、一九九四年所収）、同「北方交易とラッコ」（『白い国の詩』五一六、一九九九年、後に榎森進編『アイヌの歴史と文化Ⅰ』（創童社、二〇〇三年再収）、同「日本史のなかのラッコ皮」（大塚和義編『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版、二〇〇三年）。

⁽³⁸⁾ 北構保男「海獣捕獲文化とラッコ・「ラッコ（獵虎）覚書」（『北海道考古学』一六・一七、一九八〇・八一年）。

⁽³⁹⁾ 三浦泰之「近世中期における蝦夷錦とラッコ皮の流通をめぐる一史料―一七五

○年代までの『弘前藩御国日記』の事例から―」（北海道開拓記念館編『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史―北方文化共同研究報告―』、二〇一〇年）。

⁽⁴⁰⁾ 川上淳「文化年間のラシヨワ島アイヌの交易と鉄鍋・ラッコ皮」『根室市博物館解説準備室紀要』一一、一九九七年、後に同『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』（北海道出版企画センター、二〇一一年増訂再収）。

⁽⁴¹⁾ 編集国立民族学博物館『ラッコとガラス玉―北太平洋の先住民交易』（二〇〇一年）。

⁽⁴²⁾ 高橋周「近世日本のラッコ皮輸出をめぐる国際競争」（川勝平太編『アジア太平洋経済圏史一五〇〇～二〇〇〇』藤原書店、二〇〇三年所収）。

⁽⁴³⁾ 横山伊徳『日本近世の歴史〈五〉開国前夜の世界』（吉川弘文館、二〇一三年）三三～三六頁。

⁽⁴⁴⁾ 「長崎元俵物請方雑書」天明四年（長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号六六〇―二二）。

※『青森市史』第四卷・産業編（上）、一九五八年、一九八～二四八頁、ならびに『青森県史』資料編・近世四、二〇〇三年、二四三～二四九頁に一部翻刻収録。

⁽⁴⁵⁾ 前掲注（一四）荒居書、二三五～二六一頁と、同（一六）小川書、一〇三頁参照。

⁽⁴⁶⁾ 初村家に関しては、前掲注（二八）若松一九九一論文の二～三頁を主に参照。

⁽⁴⁷⁾ 「去ル巳年御直仕入被仰出候候以来松前三ヶ所俵物昆布稼方之儀御取調子二相成候一件」寛政元（一七八九）年（大村市立史料館所蔵、初村家（旧峰家）史料、請求番号一一三―一二二）。

⁽⁴⁸⁾ 「去ル巳年御直仕入被仰出候以来津軽南部俵物昆布稼方之儀御取調子に相成候一件」寛政元（一七八九）年（大村市立史料館所蔵、初村家（旧峰家）史料、請求番号一一三―一二七）。

(⁴₉) 前掲注(二八) 若松諸論文で使用。

(⁵₀) 『西川家文書目録』(小樽市博物館所蔵目録第六集、一九八四年) 参照。

(⁵₁) 「昆布買入方一件」寛政四(一七九二)年、(岐阜県歴史資料館寄託史料、武川久兵衛家文書、請求番号「一乙―E―四」)。

※『松前町史』通説編、第一巻下、一九八八年、三八六頁で一部紹介されている。

(⁵₂) 『武川久兵衛家文書目録』(岐阜県所在史料目録、岐阜県総務部総務課史料館準備室編、第三四集、岐阜県歴史資料館、一九九四年) 参照。

(⁵₃) 『新広尾町史』第一巻、一九七八年、一八七―一九二頁。

第一章 松前・蝦夷地における煎海鼠・干鮑の集荷

はじめに

近年、流通経済史の分野においては、「流通市場論研究」が盛んになされている。その背景には、近世後期から明治初期（一八世紀後半から一九世紀後半まで）にかけての新興海運勢力に関する研究の進展が大きく影響すると思われる。具体的には、一九七〇年代以降の北前船に関する研究¹、近年は尾州廻船・奥筋廻船²の研究が挙げられる。さらに、様々な商品を取り扱う流通商人の存在形態や、各商品の生産から消費にいたる流通の実態についても注目され始めている³。本章では、そうした問題意識を踏まえ、煎海鼠と干鮑という長崎向け商品の最大の生産地であった松前・蝦夷地における集荷過程に焦点を当てる。まずは、その課題から洗い出したい。煎海鼠・干鮑とは、近世を通して（特に中期以降）長崎貿易における唐人への輸出商品としての性格（通常は、俵物と呼ばれる）が非常に強い。それに焦点を当てた先学は、まことに豊富である。検討地域を松前・蝦夷地に限定したものを列挙するにせよ、古くは沼田次郎氏⁴からはじまり、近松文三郎⁵・白山友正⁶・荒居英次⁷・小川国治⁸・小林真人⁹・若松正志¹⁰・田島佳也¹¹各氏と続いている。ところが史料制約などにより、以下に示したような課題が残されていると考えられる。

- ① 俵物集荷と、松前藩の関係性
- ② 俵物の集荷商人の性格
- ③ 松前・蝦夷地で生産されるナマコ・アワビの俵物以外の商品特性
- ④ 俵物生産過程の実態
- ⑤ 俵物の出荷方法

本章においては、上記した問題のうち、特に①②③の課題について検討したい。それにあたり、これまで先学ではほとんど扱われていない長崎県内に存在する一八世紀後半の史料を主に使用する。一八世紀後半（とりわけ天明～寛政期）に注目する理由は、俵物集荷の画期となる請方問屋が集荷を行っていた時代「延享元年（一七四四）～天明四年（一七八四）」と、長崎会所による直仕入の時代「天明五年（一七八五）以降」との転換期にあたるためである。

一、松前・蝦夷地と長崎貿易

（１）松前・蝦夷地と俵物生産

最初に、田島佳也氏による近年の俵物に関する論稿¹²を参照しながら、松前・蝦夷地における俵物集荷の概要（一八世紀を中心）を端的にまとめておきたい。

松前・蝦夷地産の俵物¹³は、一七世紀から長崎へと運ばれていたようである。正式に制度化されるのは、元禄一〇（一六九七）年のいわゆる「俵物諸色替」からである。そうした中、松前藩は元文四（一七三九）年に、幕命を受けたことにより、自ら俵物の長崎廻漕を試みている。さらに、西川善治を代表とする両浜組（近江商人団）が独自の廻漕に携さわり、寛保元（一七四一）年に煎海鼠四三二本を廻漕する。その直後、幕府は俵物集荷にあたり、請方問屋の組織化や、長崎・大坂・箱館・下関に俵物会所を設置するなど、配下の俵物下請方問屋の組織化を図る。さらに宝暦四（一七五四）年から、それまで近江商人により集荷されていた松前・蝦夷地の俵物は、請方問屋が配下の請方問屋を指定して直接請負うことになる。

唐人へ渡す俵物は、量的・質的にも大部分を、松前・蝦夷地産のものが占めていた。例えば、天明五（一七八五）年に長崎会所による俵物の直仕入が始まるにあたり、全

国に煎海鼠四〇万斤余、干鮑三〇万斤余という強制的な割当高を設定する。その内訳をみると、松前・蝦夷地は、煎海鼠一三万斤（割当高全体の三割）、干鮑一二万斤（割当高全体の四割）と設定されていた。これより、幕府による当該地への期待の大きさが看取される。

しかしながら、幕府による長崎への俵物廻漕の強制にもかかわらず、一九世紀初頭までには廻漕量は確実に減少する。その理由は、俵物の買入資金の欠乏や、低価格による買い上げ〔寛政期（二七八一〜一七八八）には、増産に成功すれば褒美銀が貰える仕組みへ移行〕による漁民の生産意欲の減退があげられる。加えて俵物は、名目上幕府の専売品¹⁴にもかかわらず、抜荷・密売買が横行する事態に陥る。それに対して幕府は、度々禁令を発し取り締まりにあたるものの、ほとんど効力はなかったようである。

以上のような俵物集荷に関する流れを踏まえた上で、その一大生産地である松前・蝦夷地における集荷の実態を検討する。

（２）松前藩と俵物生産

「はじめに」で触れた課題①について、松前藩が俵物生産・集荷にどのような関わりを持ったのか、あるいはそのしくみや程度について検討する。

- 一、御領主様江運上差出候ニ付而ハ、取締方等之御世話茂有之儀ニ候哉、都而商船出入之節者、御当所ニ而茂有之御改等有之、右者御領主様御家中与歟其所々地役与歟御改切手ニ而茂、御渡候哉之儀申上候様被（欠）仰渡候、
- 此儀御運上金者相納候得共、煎海鼠稼増方取締方之儀ニ付而、格別御世話者無御座候、猶又都而商船出入之節者、積荷物人別之御改有之儀ニ而、城下・箱館・江指三ヶ所江御番所有之、御領主様御家来御詰御改切手相渡り申候儀

これは、天明四年の請方問屋による集荷の実態をまとめた史料から抜き出したものである。全体的に、松前藩への運上について書き記されているが、これまで特に松前藩は集荷活動には関与していないことが読みとれる。また松前藩では、商船の出入りの手続きについて、松前城下・箱館・江差¹⁾という、いわゆる「松前三湊」の番所で行われるしくみであることも読みとれる。

ここから松前藩は、基本的には俵物の集荷活動には関与せず、請方商人から運上を受け取っていたことがわかる。つまり現地の集荷問屋は、実際の集荷業務全般を請け負っていたことが見受けられる。加えて、俵物の中でも煎海鼠の集荷に重点がおかれていたことも看取される。

次に松前藩への運上について、具体的に記した史料を掲出する。

一、元請負人共一手買之節、煎海鼠・鮑・昆布稼場運上として壹年小判四百両宛五カ年分式千両年季毎ニ御領主江先納いたし来、去ル巳年先納年季ニ御座候処、御直仕入ニ相成、右運上金会所差出候儀者、不相当ニ付稼方之者銘々より御領主江相納候様被仰渡候処、左候而者元直段ニ茂相開き等ニ五カ年分先納之儀、困窮之漁人共迎茂力ニ難及御領主之手当差支ニ相成候故、此段者何分宜御勘弁被成下度儀、相願無様筋ニ相聞江候ニ付、評議之上、去ル巳年より当酉年迄五カ年分式千両稼方之者江御渡方ニ相成、御領主江相納申候次第、右之形を以年季毎ニ式千両宛稼方者江相渡、御領主江相納候儀ニ御座候、

一、御領主御收納相成候役口錢元請負人ともより者、買入代金者老歩半宛相納来候処松前之儀者地方之年貢無之、都而漁獵運上等御領主江御收納ニ相成口錢者(欠)公儀御年貢之口米永同様之儀ニ付、三步ニ而相当ニ可有之、殊ニ以来俵物松前并江差方亀田江、小廻し方等御領主様引請ニ相成、其外出増諸色取締方之儀、

段々御領内御触茂有之、俵物懸り役人茂御定候置以来者、至而嚴重ニ御取計ひ御座候積りニ付、先以役口錢壹歩半相稼以後三步宛渡方之極相成申候、¹⁷

最初の一つ書きによると、松前藩へ上納する稼場の運上について、請方問屋による集荷時は小判四〇〇両（五ヶ年分）を先払いしていたが、長崎会所による直仕入れ後は、ナマコやアワビを収穫する漁師たちによって、それぞれ運上されるシステムへと変更されたとある。ところがこのシステムは、漁師たちの困窮により滞ったため、長崎会所から五ヶ年分の運上を漁師へ先に支払い、彼らが直接藩へ納入したとある。松前藩への稼場運上である小判四〇〇両の内訳は、俵物・昆布と二つに分けられ、それぞれ二〇〇両（計四〇〇両）であった¹⁸。

次の一つ書きの要点を端的にまとめたい。全体としては、長崎会所が松前藩へ納入する役口錢（買入代に対して支払われる手数料）について詳細にまとめられている。そもそも漁獵の運上によって年貢を賄われる特殊な形態の松前藩は、俵物の集荷に關しても力を注いでいたようである。例えば、役口錢について請方問屋による集荷時は、俵物の買い入れ代金の一步半（一・五％）であったものが、長崎会所による直仕入に際しては、二倍の三步（三・〇％）受け取ることに変更される。さらに後から詳しく述べるが、松前藩が松前・蝦夷地産の俵物・昆布が最も多く集荷される亀田（箱館）への集荷を主体的に引き受けるとある。

以上より、俵物集荷に対する松前藩の姿勢が、請方問屋が集荷した時代（天明四年まで）と、長崎会所による直仕入れ後（天明五年以降）では異なっていたことが判明する。つまり松前藩は、俵物の集荷に關して、元々運上を受け取るのみで実務全般は各俵物集荷問屋が担当していたのに対し、直仕入れ後は運上の確保のために集荷に關与する様子が見える。

（3）松前・蝦夷地における俵物集荷問屋の性格

ここでは、時期の異なる二つの史料を用いて、一八世紀後半の松前・蝦夷地における俵物の集荷業務にあたった問屋商人の性格と、集荷形態の変化について考察したい。

【天明四年】

一、右三ヶ所支配問屋之儀者、何れ茂是迄実意ニ取計致来り者ニ候哉、外商売方等ニ而茂相携居候者ニ候哉、又者俵物方一円之手先ニ相掛居候者ニ候哉、人別相応ニ身代茂有之者ニ候哉之儀、申上候様被仰渡候、

此儀三ヶ所支配問屋共之儀、何れ茂是迄俵物方之儀実意ニ相勤申候、且又身代茂随分慥成者共ニ御座候、則左ニ申上候、

松前城下住居

松前城下支配問屋

大黒屋茂右衛門

但、外ニ蝦夷地之内請場所有之、手船差廻し出産之品々交易仕手船も加入之分共ニ拾七艘所持仕身代手厚キ者ニ御座候、

同箱館住居

同 箱館支配問屋

長崎屋半兵衛

但、外商売不仕俵物昆布支配問屋相勤候色ニ御座候、身代相応之者ニ御座候、

同江指住居

同 江指支配問屋

長崎屋善次

但、外ニ菜種類木綿類之商売仕身代手厚者ニ御座候、

同江指住居

同所支配問屋

江口屋十右衛門

但、外ニ諸商船宿相勤身代手厚キ者ニ御座候、

一、右三ヶ所問屋之外下請手先等之者有之儀ニ候哉之儀申上候様被（欠）仰渡候、此儀支配問屋之外下請手先之者等無御座候、

一、右問屋年分俵物方ニ掛り致受用候高凡何程之事ニ有之候哉、右問屋口錢等極も可有之年分人別之受用凡当り申上候様被仰渡候、

此儀支配問屋共受用之儀者、買入高二応シ受用差遣来り申候、則左ニ申上候、

近年之所ニ而、老ケ年五貫目程 大黒屋茂右衛門

但、松前城下買入煎海鼠・干鮑・昆布買入代之式歩半

近年之所ニ而、老ケ年四貫目程 長崎屋半兵衛

但、松前・箱館買入煎海鼠代式歩半、昆布買入代之式歩

近年之所ニ而、老ケ年老貫八百目程 長崎屋善次

但、松前・江指買入煎海鼠・干鮑代之式歩半

金拾兩宛 江口屋十右衛門

但、松前・江指買入煎海鼠・干鮑代ニ不拘老ケ年書面之高差遣、¹⁹

【寛政元年】

一、問屋之儀、松前者大黒屋茂右衛門・江差者長崎屋善次・亀田者長崎屋半兵衛三人ニ而取扱ひ来候故、去ル巳年より三ヶ所とも惣問屋懸りニ被仰付、松前者拾老、江差者拾弍人、亀田者七人有之、松前ニ而者、蓬来屋忠兵衛・大津屋武左衛門・河内屋久兵衛此三人ニ主ニ取扱、江差・亀田者前段善次・半兵衛取扱申候、

一、買入場之儀、松前者少し計之場所問屋共より相済表札差出置、江差・亀田者右両人共宅ヲ買入場ニ相定置候儀ニ御座候、²⁰

これら二つの史料から、請方問屋が集荷した時代（天明四年まで）と、長崎会所の直仕入れ後（天明五年以降）の松前における問屋商人に大きな変化があったことがわかる。

史料の内容整理から行いたい。天明四年の史料によると現地の集荷問屋は、松前城

下に大黒屋茂右衛門、箱館に長崎屋半兵衛、江差には長崎屋善次と江口屋十右衛門の計四名が存在した。続けて、それぞれの集荷問屋の性格について詳述する。松前城下の大黒屋茂右衛門は、俵物集荷の仕事のみならず蝦夷地の場所請負商人でもあり、一七艘もの手船を所持し、持場との交易に従事していた。また俵物の集荷問屋を引き受けるにあたり、受用（請方商人から支払われる手数料）を五貫目程（松前城下にて煎海鼠・干鮑・昆布買入代の二歩半）を受領した。そもそも大黒屋とは、宝暦・明和期（一七五一〜一七七二）頃には、すでに俵物の集荷問屋を担当しており、松前藩家老の蠣崎三弥が事実上経営する店であった。通常俵物の買入にあたり、漁村や漁民との直接交渉が原則であるものの、大黒屋が関与した買入については、藩権力と利権が絡み、低価格かつ強制的に行われた²¹とされる。ちなみに天明六年頃、実際に請け負う具体的な「場所」は、西蝦夷地のオシロ場所（住吉屋善七と共に請負）とセタナイ場所である²²。

箱館の長崎屋半兵衛は、俵物集荷を専業とし、受用は四貫目程（箱館にて、煎海鼠買入代は二歩半・昆布買入代は二歩）である。江差の長崎屋善次は、俵物集荷以外に、菜種・木綿の販売を行っており、受用は一貫八〇〇目程（煎海鼠・干鮑の買入高の二歩半）である。同じく江差の江口屋十右衛門は、俵物集荷の他に船宿の経営も行っていた。俵物集荷に関しては、一カ年につき金一〇両ずつ煎海鼠と干鮑の買入代として受け取り、受用は不明だが、買入代から一部を受領するしくみであったと見られる。まとめると、集荷問屋によって扱う商品・受用に相違があり、問屋の性格も俵物集荷専業のものから、場所請負を兼ねるものまで様々なタイプが存在したことが判明する。

ここから寛政元年の史料について、天明四年の史料と比較検討をする。寛政元年の史料によると、問屋商人の動向については、「去ル巳年」、つまり天明五年の長崎会所の直仕入によって、大きく変容したようである。天明四年の時点では、俵物集荷にあたり「松前三湊」のそれぞれ決められた問屋で取りまとめられていた。ところが寛政元年になると、「去ル巳年より三ヶ所とも惣問屋懸り二被仰付」ということで、「去ル

巳年」より松前は一人、江差は二人、亀田（箱館）は七人体制へと変化したのである。中でも松前は、天明四年に俵物の集荷問屋であった大黒屋茂右衛門に変わり、蓬来屋忠兵衛・大津屋武左衛門・河内屋久兵衛の三人が、江差と亀田は、これまで通りで、長崎屋善次と長崎屋半兵衛が中心となって俵物の集荷を担当したようである。これらの集荷問屋は、新規に参入した諸問屋を統括するような存在であったことが推測される。

引き続き、一つ書きの二つ目には買入場の説明がされている。それによると松前では、問屋からの買入証文（恐らく上記した三人が集めたもの）で済まされ、江差と亀田は、長崎屋善次と長崎屋半兵衛両宅にて買入された様子が看取される。

以上をまとめると、天明五年の直仕入れ後、松前における俵物の集荷体制は、「松前三湊」惣問屋制とも言えるシステムへと変容したといえよう。ここから、俵物の集荷が一段と強化されたと見うけられる。

二、煎海鼠・干鮑の生産地と集荷地

（１）俵物の生産地

ここでは、一八世紀後半における俵物の生産地について、各浦々の開発状況を踏まえて考察したい。【表一】では、天明四（一七八四）年の松前・蝦夷地における俵物の産出浦名が判明する。煎海鼠に関しては、箱館近辺の浦々を除くと、ほとんど松前・蝦夷地全域で生産されていた。干鮑は、福嶋（現、福島町）からスッキ（現、せたな町）にかけての日本海側沿岸部で生産されている。【表一】で気になるのが、奥蝦夷地の浦名の記載がほとんどない点である。それは、当時それらの地域でナマコやアワビの産出が全くないものと捉えるのではなく、長崎向け商品の生産が行われていないと捉えた方が適切であろう。

【表一】天明四年松前・蝦夷地の煎海鼠・白干鮑産出浦名

浦名	煎海鼠	白干鮑	浦名	煎海鼠	白干鮑	浦名	煎海鼠	白干鮑	浦名	煎海鼠	白干鮑
松前地(城下より東)			松前地(城下より西)			上蝦夷地			下蝦夷地		
礼髭	○	○	石崎		○	奥尻嶋	○	○	戸井		
吉岡	○	○	塩吹		○	関内	○	○	いきしなひ		
宮ノ歌	○	○	木ノ子		○	クドウ	○	○	尻岸内		
白府	○	○	上ノ国	○	○	太田崎	○	○	鹿部		
福嶋	○	○	御勝手		○	フトロ	○		於札部	○	
小田西		○	奥内濱	○	○	瀬田内	○		砂崎	○	
尻内			泊	○	○	スッキ		○	茅部		
木子内			尾山	○		嶋子巻	○		野田追	○	
札苅			田澤	○	○	スツ津	○		夕良部		
泉澤			伏木戸	○	○	ヲタス津	○		阿部田	○	
三ッ石	○		湯ノ尻	○	○	岩内	○		臼	○	
釜屋	○		乙部	○	○	シヤコタン	○		江戸茂		
茂辺地	○		瀬茂内	○		ヒクニ	○		くな尻	○	
富川			相泊り	○	○	フルビラ	○				
三ッ屋			小茂内	○		下モ与市	○				
戸辺地			大茂内	○	○	上ミヨイチ	○				
有川			突符	○	○	タカシマ	○				
尻澤部			おかし内	○		マシケ	○				
大森			三ッ谷	○		トママイ	○				
湯ノ川			蚊柱	○	○	テシヲ	○				
根崎			大岩	○		手婦連	○				
志苔			相ノ間	○	○	ヤンケ尻	○				
大間			飛屋水	○	○	リイ尻	○				
銭亀澤			黒岩	○	○	リブン尻	○				
古川尻			見市	○	○	ソウヤ	○				
石崎			熊石	○	○						
小安									総計 (浦数)	60/94	31/94
釜屋											
宇賀											
塩首											

「長崎元俵物請方雑書」所収「松前煎海鼠干鮑昆布出方浦名帳」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館所蔵より作成、(請求番号660-21)

※○印があるのが、産出浦である。

※白干鮑とはアワビの一製法である。主に輸出海産物に用いられる。

【表二】白干鮑の出高平均(西蝦夷地・松前城下付、江差付、箱館付各村々)

西蝦夷地と松前城下付		江差付		箱館付	
村名	斤数	村名	斤数	村名	斤数
リイシリ	138	石崎村	140	戸井村	175
マシケ	376	塩吹村	600	蓬内村	15
テシヲ	164	木の子村	460	瀬田内村	130
モイレ	124	上国村	120	汐首村	373
ヨイチ	36	五勝手村	90	箱館地廻り	41
フルヒラ	256	江指村	1,850		
ヒクニ	87	泊り村	430		
フルウ	114	田沢村	210		
イハナイ	453	伏木戸村	220		
シャコタン	44	乙部村	1,300		
スツツ	81	茂内村	450		
フトロ	56	トツフ村	270		
セタナイ	4	蚊柱村	680		
小砂子村	2	相沼内村	800		
原口村	1	泊り川村	900		
江良町村	16	熊石村	1,100		
清部村	190	三ツ谷村	560		
茂草村	29	小買入	7,171		
札前村	27				
赤神村	2				
小田西村	6				
福嶋村	285				
宮歌村	5				
吉岡村	714				
炭焼沢	67				
荒屋村	56				
大沢村	4				
及部村	16				
城下	5,784				
総計	9,134	総計	17,351	総計	734

「享和元酉年取極御用地箱館松前城下江指干鮑直増割合書付元帳」(『江差町史』資料編・第一巻、p345～366)より作成

※西蝦夷地・松前城下付、江差付は、寛政二年(1790)～寛政十一年(1799)平均。

※箱館付は、天明六年(1786)～寛政十一年(1799)平均。寛政二年(1790)より不作多い為、天明六年(1786)より記載との事。

※斤以下の単位は、四捨五入した。

【表三】白干鮑一ヶ年の出高(西蝦夷地・松前城下付、江差付、箱館付)

年代	斤数(城下・西蝦夷地付)	斤数(江差付)	斤数(箱館付)
天明六年	記載なし	記載なし	1,727
天明七年	記載なし	記載なし	3,290
天明八年	記載なし	記載なし	375
寛政元年	記載なし	記載なし	875
寛政二年	7,787	25,875	250
寛政三年	7,772	19,375	250
寛政四年	9,689	19,250	72
寛政五年	7,257	20,054	出方なし
寛政六年	14,240	16,750	出方なし
寛政七年	8,270	24,000	125
寛政八年	15,734	25,250	375
寛政九年	12,251	25,000	出方なし
寛政十年	6,104	5,815	出方なし
寛政十一年	2,244	2,145	出方なし
寛政十二年	記載なし	記載なし	出方なし

「享和元酉年取極御用地箱館松前城下江指干鮑直増割合書付元帳」(『江差町史』資料編・第一巻、p345～366)より作成

※斤以下の単位は、四捨五入した。

続いて、煎海鼠の生産地に注目すると、松前・蝦夷地の日本海側のほとんどの浦々があげられており、かなり広範囲に及んでいたことがわかる。ここから煎海鼠の集荷に、特に力を入れていると見るのが可能であろう。この点は、浦の開発と連関すると見られる。例として干鮑に関する浦々の開発状況につき、寛政期（一七八九〜一八〇〇）頃の西蝦夷地と松前城下・江差・箱館付の各村々に関する干鮑の出高平均を示した【表二】・【表三】をあげる。ここから天明六年には、箱館近辺においても小量ではあるものの、干鮑が生産されていたことが判明する。【表一】と【表二】・【表三】を比較すると、干鮑の生産地域は、天明四年からわずか二年ほどで、箱館方面まで拡大したことがわかる。つまり干鮑の生産浦が開発されたといえるのである。

まとめると、一八世紀後半の松前・蝦夷地における俵物生産は、まず煎海鼠を生産するための浦々の開発が進み、次に干鮑を生産する浦々が開発されるという流れが想定できそうである。

（２）俵物の集荷地

ここでは、俵物の集荷システムの重層的な構造について検討したい。

一、松前買入場所者、城下・箱館・江指三ヶ所二有之由、右三ヶ所之内ハ何れも煎海鼠・鮑・昆布之取扱致候儀二候哉、又者場所々ニ而、取計之儀不同有之儀二候哉之儀申上候様被（欠）仰渡候、

此儀城下之儀者、重二煎海鼠・干鮑相集り昆布者纔之買入に御座候、箱館之儀者、重二昆布相集り煎海鼠も集申候干鮑者、一向買入無御座候、江指之儀者、煎海鼠・干鮑相集り昆布者買入無御座候、猶又右三ヶ所之外城下之下買入場所、城下方四里程東、吉岡村と申所并、右吉岡村方式里程東、福嶋村と申所、猶又江指方之下買入場所、江指方九里程西、熊石村と申所

に下買入所相立置、右下買所二者、時々支配下代并、雇下代差越買入方取計申候、²³

史料を概括すると、俵物の集荷拠点にあたる「松前三湊」の集荷商品の特徴をまとめている。まず、松前城下と江差では煎海鼠・干鮑の買入があり、箱館は煎海鼠のみで干鮑の買入れがなかったようである。この史料で見逃せないのが、上記の「松前三湊」の他に俵物集荷の拠点が存在したことである。それは松前城下の下買の拠点として、福嶋村・吉岡村（それぞれ現、福島町）が、江差の下買の拠点として、熊石村（現、八雲町）があげられている点である。本稿では、これらの三つの湊を「下請三湊」と呼称するが、その定義については後述する。

引き続き「下請三湊」について、煎海鼠の集荷実態から検討する。次に掲出する史料は、煎海鼠の集荷について書き記した部分から抜粋したものである。

蝦夷地出産之分者、仕入人共城下・箱館・江指三ヶ所ニ罷有候ニ付、右三ヶ所ニ而買入申候、松前地内之分者、右漁人共直相对ニ而買入申候儀ニ付、稼方之最寄城下・江指・箱館并、吉岡村・福嶋村・熊石村三ヶ所へ買入場相立買入申候、右吉岡村・福嶋村・熊石村三ヶ所江者、時々支配下代并雇下代差越、出方最中之砌二者、雇下代詰切らせ置買入方取計申候儀ニ御座候、²⁴

右史料によると、煎海鼠の蝦夷地の出産分は、仕入人（場所請負人）を通し「松前三湊」で買入、松前地の分は、「松前三湊」と福嶋村・吉岡村・熊石村（「下請三湊」）の計六ヶ所にて、直接漁師から買い入れる方式であったことがわかる。「下請三湊」には、「松前三湊」の間屋から支配下代や雇下代が派遣され、収穫期になると、そこに絶えず滞在して買入の手伝いをしていた様子も読みとれる。さらに、先述の【表二】・【表三】を見ると、干鮑の生産される西蝦夷地と松前付の村々では、西蝦夷地を除くと最も出高

のある村が、松前城下に次いで吉岡村、福島村という順番であることに気づかされる。また江差付村々では、江差について乙部村、熊石村と出高の多い村々がある。つまり、「下請三湊」の干鮑の出高から下請になる素地があると判断できる。

加えて、「下請三湊」の定義を考えるにあたり、天明期頃の松前地内の各村々の人口・戸数を比較したい²⁵。松前付の村々の中で福島村・吉岡村の戸数は、四〇軒程の村々が多くある中、それぞれ三〇軒・二五軒と決して多くはない。さらに江差付の村々の中では、熊石村の人口は、一〇〇人以上の村が多数存在する中、六二人と少ない方である。ここから勘案すると「下請三湊」とされた村々は、人口・戸数、もつという村の規模にあわせて設定されたものではないといえよう。

以上より、俵物集荷にあたつて松前地では、「松前三湊」のみならず、「下請三湊」とも定義できる福島村・吉岡村・熊石村という集荷拠点が存在したことが判明する。そこで改めて、「下請三湊」（福島・吉岡・熊石各村）の定義をまとめておきたい。これら三つの湊は、「松前三湊」と同じように買入場が設置され、集荷問屋のある「松前三湊」から、集荷の統括をする支配下代や雇下代が派遣されていた。それらの村々は、干鮑に関しては出高が多い地域であった。ところが、人口・戸数は周辺の村々の中では多いとは言えない。そこから、俵物の出高が多いことが、下請になる大きな理由であったと見られる。また、昆布を主に生産する箱館方面に、下請の湊が存在しなかったことも併せて考えると、「下請三湊」とは、俵物集荷に重点を置くため設定されたものと定義することが可能である。

三、煎海鼠・干鮑の集荷過程と商品の特性

（１）煎海鼠と干鮑集荷の諸費用

ここでは、煎海鼠と干鮑集荷の諸費用に関して考察する。具体的には、一八世紀後半の長崎会所により設定された俵物の仕入高や、松前・蝦夷地における出高や価格について、天明四年²⁶・天明六年²⁷・寛政元年²⁸という三つの年代の異なる史料から検討する。

まずは【表四】から、天明四年の煎海鼠・干鮑（大・中）にかかる諸費用が判明する。内訳としては、元代（買入代）、御口銭（松前藩へ支払う運上）、蔵敷（蔵での保管料）、受用（請方問屋へ支払う手数料）と四種類存在する。全体を比較すると、煎海鼠・干鮑（大・中）の元代は、煎海鼠が最も高価である。大鮑の蔵敷が最も高価な理由は、大きさの問題であろうか。中でも注目したい点は、御口銭（元代の一步半）より問屋受用（元代の二歩半）の方が高く設定されていることである。これは一で考察したように、天明四年の時点では松前の問屋商人の役割のみで、松前藩が集荷活動に関与していないことが影響すると見られる。

次に、天明六年の煎海鼠・干鮑（大鮑・中鮑の区別無し）の仕入れ明細となる【表五】を参考としてあげておきたい。これは、あくまで「目当高」であるため、価格についても見積もりである。さしあたり、代銀に限って【表四】と比較をすると、天明四年に比すれば、価格がほんの少し高めに設定されていることがわかる。加えて【表五】によると、詳細な蒔・縄といった荷造りの際に必要な材料も判明し、それらは越前敦賀から購入した様子も看取できる。

さらに、寛政元年の史料から一八世紀後半における煎海鼠の出高や仕入高の推移をまとめる²⁹。ナマコの出高については、一八世紀後半に最大で一五万斤程の出高もあったものの、平均すると、おおよそ安永元（一七七二）年～天明四年には八万二、〇〇〇斤程である。それに対し、請負高は天明六年には一二万斤から一三万斤と設定されていた。ここから請負高は、実際の出高より割合高い数値で設定されていたことがわかる。

【表四】天明四年松前煎海鼠・干鮑諸掛り費用等(1斤あたり)

	松前煎海鼠	松前大干鮑	松前中干鮑
元代丁錢	210文	150文	130文
御口錢	3文1歩5厘	2文2歩5厘	1文9歩5厘
蔵敷	1文2歩	2文2歩	1文2歩
支配問屋受用	5文2歩5厘	3文7歩5厘	3文2歩5厘
〆(丁錢)	219文6歩	157文2歩	136文4歩
〆(九六錢)	227文6歩	161文2歩	140文4歩
〆(銀)	2匁2歩8厘7毛8弗	1匁6歩3厘7毛2弗	1匁4歩2厘8弗

「長崎元俵物請方雜書」所収「松前煎海鼠干鮑昆布壳買直段積出御改諸掛り物定式并昆布壹斤当り凡積書」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館作成、(請求番号660-21)

【表五】天明六年長崎会所による俵物の買入明細(松前・蝦夷地分)

	煎海鼠	干鮑	備考
斤数(1ヶ年目当高)	130,000	120,000	
丸数	1,040	960	1丸あたり125斤入り
代(金)	5,797両3分	3,241両3分	諸掛り費用含む
代(銀)	347貫867文	194貫508文	諸掛り費用含む
代(永)1斤に付	48文5分9厘8毛3弗	27文1厘5毛	
代(銀)1斤に付	2匁6分7厘5毛9弗	1匁6分2厘9弗	
尺長筵(枚)	1,040	960	越前国敦賀より買廻し 値段年々不同
上筵(枚)	1,560	1,440	
大縄(尋)	13,000	12,000	
小縄(尋)	13,000	12,000	
筵・縄の使用量 (1丸に付)	尺長筵1枚半 大縄・中縄12尋半	尺長筵1枚、上筵1枚半 大縄12尋半、小縄12尋半	

「蝦夷地一件」所収「南部・津軽・松前 煎海鼠 鮑 昆布長崎会所直買入取調書」天明六年(1786)、(『新北海道史』第7巻史料1、p383～390)より作成

※斤数(1ヶ年)は目標であって、実際の長崎廻漕量とは隔離する。

(2) 煎海鼠・干鮑の商品としての特性

ここでは、「はじめに」で課題③としたナマコやアワビに関する長崎向け商品以外の側面に注目する。松前・蝦夷地産のナマコやアワビの特徴を、まだ不十分ではあるが、集荷の実態から検討したい。

煎海鼠者、問屋江壳渡其余之品者、近江・能登・加賀・越前・佐渡・大坂辺りより船を仕取廻、四月頃方六・七月頃迄罷下り買取、其場所々江積廻し申候由、³⁰

当史料によると、一八世紀後半これまで漠然と長崎貿易向けの専売品とされてきた煎海鼠³¹に関して、松前・蝦夷地において余剰が出た際には、他国から来た船に積んで持ち帰ることが許されていたことが明確に書き記されている。とりわけ、寛政元年という当史料の成立年代は、幕府による直仕入れ以降ということで、通説では集荷が大きく強化されていた時期と考えられている。しかし史料によると、余剰分の煎海鼠は、明らかに国内市場へ廻される分であり、従来考えられてきた抜荷で出廻る分のみならず、幕府に公認され国内市場へ出廻る分が存在した可能性があることを指摘できる。繰り返すようだが、この記述は、これまで抜荷と考えられてきた国内で出回る煎海鼠のうち、幕府に公認されたものも含まれる可能性を示唆できる貴重なものと捉え得る。このような事情が他国にも存在したのか、さらに史料を博搜する必要がある。

続いて、松前・蝦夷地産のアワビの商品としての特質を考えたい。

此儀干鮑稼方之儀者、手配ニ寄候而者稼方手安ニ出来仕候、将又松前地内鮑生立之儀者、浦々何連茂鮑生立有之候内、城下方東二而ハ吉岡村・福嶋村、城下より西二而者江指・乙部村・熊石村、右五ヶ所生立多き場所ニ御座候、右之通松前地内浦方何連茂鮑生立申候内、当時干鮑相仕立候浦方者、城下方壱里半程東礼鬚村方福嶋村

迄四里程之間并、城下方西拾三里程西、塩吹方太田崎と申所迄之間三拾七里程之間之出産并、右太田崎方九里程東、奥尻島と申嶋有之此島出産之分當時干鮑二相仕立申候、且亦生貝品合之儀者、相応之品二御座候得共、全躰余国之出産方者小さき方二御座候、将又熨斗仕立ハ一向無御座候、且亦仕入方之儀ハ、漁人共限二千鮑相仕立候を買取申候儀二御座候、³²

これより、天明初期頃の干鮑の具体的な生産の様子が判明し、長崎向けに限らない蝦夷地産のアワビの特質をも見ることが出来る。アワビの産出の多い地域は、松前城下より東は、先述した「下請三湊」に含まれる福嶋村・吉岡村、西は江差・乙部村と「下請三湊」の熊石村の計五ヶ所である。これは、前述した【表二】・【表三】の出高の多い村々と見事に一致する。中でも、干鮑を仕立てる浦は、松前城下から東は礼鬚村から福嶋村、西は塩吹村から太田崎・奥尻島であった。さらに、これらの地域で産出されるアワビは、本州産より小ぶりで、儀礼用として用いる熨斗には加工しないと書かれている。恐らく干鮑に仕立てないアワビは、串貝などにするのであろう。また干鮑は、漁師が直接仕立てるものであるとも書かれている。ここで、松前地における具体的な干鮑生産の様子が判明し、長崎向けにはならない蝦夷地産のアワビの特質も看取される。

続いて補足的に、俵物の荷造の際に使用される縄や筵といった商品に関する史料を紹介する。

一、俵物荷造ニ相成候縄・筵之儀、煎海鼠・鮑共百式拾五斤入壺丸二付、松前者尺長筵壺枚、上筵壺枚半、大中縄式拾五筋宛、江差・亀田者尺長筵壺枚、上筵式枚、中縄式拾五筋宛之勘上仕上申候、右縄・筵買廻し方之儀者、敦賀問屋角野七兵衛方より仕入差廻し申候、但松前者、蝦夷地より筵入二而差送り候故、古筵を以口こも等二相用候二付、上筵壺枚半二相仕立、江差・亀田者、壺斤式斤宛之小買入故、筵無之式枚宛之極二御座候、³³

それによると、俵物の荷造りに使用される縄や蒾の量などの特徴が判明する。要点をまとめると、煎海鼠・干鮑ともに一丸あたり一二五斤詰め一つの俵を作る。また、松前と江差・亀田（箱館）では、縄と蒾の使用量に相違がある。とりわけ興味深いのは、縄・蒾を調達するにあたり、越前敦賀の角野七兵衛なる人物から仕入れていたという指摘と、松前では蝦夷地から蒾に入れて荷物が到着するため、一度使用した古蒾を再利用するという箇所である。角野七兵衛とは、敦賀の有力な廻船問屋で、越前・若狭地方の俵物集荷問屋でもあった^{3,4}。こうした点から、荷造りの材料は、俵物問屋同士の関係性により調達されていた可能性が容易に想定できる。

おわりに

本章では、一八世紀後半の松前・蝦夷地における、長崎向けの商品である俵物（煎海鼠・干鮑）の集荷の実態解明に力点を置いた。

第一に、松前藩と俵物生産・集荷との関係性については、当初、松前藩は請方問屋から運上を受け取るのみで集荷活動には関与しなかった。ところが、天明五年（一七八五）の長崎会所による直仕入れ以降は、運上の増額にも見られるように、集荷活動へと主体的に関与するようになる。これは、松前藩が俵物集荷に関わる課役の確保という意義があると見られる。同時に長崎会所により、松前での俵物集荷を請け負う商人についても、「惣問屋制」になるなど集荷の強化が計られる。加えて、俵物の産出浦の開発も連動して行われた。

第二に、請方問屋の集荷に際し松前地における俵物の集荷地については、集荷にあたり「松前三湊」の他に、福島村・吉岡村・熊石村という「下請三湊」が存在した。それらは「松前三湊」の集荷問屋から、集荷の監督官として、支配下代や雇下代が派遣されていた。また人口規模はそれ程大きい村とは言えないものの、当時の松前地の各村々に

おける干鮑の出高を比較すると、「下請三湊」の村々のそれは多く、俵物集荷の円滑化のために存在する湊であったと位置づけられる。

第三に、松前・蝦夷地産のナマコ・アワビについて、それぞれの集荷の実態を考察し、長崎向け商品以外の商品としての特性に関する考察を試みた。ナマコに関しては、これまで幕府の専売品としての側面が強調されてきたが、幕府公認で松前・蝦夷地産のナマコは、一部本州方面へ流通していたことが判明した。干鮑は、大きさが本州以南のものより小型で、熨斗への加工はしないという特徴があった。さらに、縄や蒔という荷作りに欠かせない商品の仕入れは、調達先や利用実態にまで言及した。

最後に今後の課題を述べておきたい。本章では、「はじめに」で示した俵物に関する五つの課題のうち、④・⑤は課題として残された。

④俵物生産過程の実態は、具体的にどのような人々が俵物生産に関わったのか、とりわけ蝦夷地では、アイヌの人々が主体となり生産・加工が行われていたようである。この点は、幕末の事例が主体となるが、蝦夷地における一人の場所請負人により経営された「場所」に焦点を当てて次章で考察する。

⑤俵物の出荷方法については、俵物と同様に一八世紀後半の松前・蝦夷地で生産される長崎向けの海産物である諸色（昆布・ラッコ皮）についての集荷方法を考察し、出荷過程（出荷仕法や運搬に使用される船の特徴など）を検討する。（本稿第三章）

(1) 柚木学『近世海運史の研究』(法政大学出版局、一九七九年)、牧野隆信『北前船の研究』(法政大学出版局、一九八九年)、高瀬保『加賀藩の海運史』(成山堂、一九七七年)、中西聡『近世・近代の市場構造——「松前鯉」肥料の取引の研究——』(東京大学出版会、一九九八年) など参照。

(2) 斎藤善之『内海船と幕藩制市場の解体』(柏書房、一九九四年)、同「東廻り航路と奥筋廻船」(藤田覚編『日本の時代史一七 近代の胎動』吉川弘文館、二〇〇三年)。

(3) 斎藤善之「近世的物流構造の解体」(『日本史講座七 近世の解体』東京大学出版会、二〇〇五年) 参照。

(4) 沼田次郎「日清貿易に於ける一問題」(『歴史地理』六八―五・六、一九三六年)。

(5) 近松文三郎「松前煎海鼠」(『太湖』一〇九―一一七、一九五二年)。

(6) 白山友正「徳川幕府の官営商業の一例——長崎俵物と蝦夷地交易との関係——」(『社会経済史学』三一四、一九三三年)、同「松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』二九、一九六二年)、同「続 松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』三七、一九六四年)、同「松前蝦夷地における長崎俵物の研究補遺」(『漁業経済研究』一三四、一九六五年)。

(7) 荒居英次『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年)。

(8) 小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究——俵物の生産と集荷機構——』(吉川弘文館、一九七三年)。

(9) 小林真人「松前蝦夷地産俵物の生産と集荷——俵物役所直仕入制成立前後まで——」(『松前藩と松前』一七、一九八一年)。

(10) 若松正志「長崎俵物の地域別集荷高について」(『東北大学附属図書館研究年報』二四、一九九一年)。

(11) 田島佳也「輸出海産物がつなぐ十九世紀の北海道と中国福建」(神奈川大学人文学研究所編『日中文化論集——多様な角度からのアプローチ——』頸草書房、二〇〇二年)

所収)、後に『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂出版、二〇一四年再収)。

(12) 同右田島論文に依拠した部分が大きい。

(13) 補足として、松前・蝦夷地で生産される俵物は、煎海鼠と干鮑のみで鱧鰯の生産はないことが以下の史料から判明する。

一、鱧鰯者足迄出方無之由、松前之儀者、鱧漁無之場所ニ候哉之儀申上候様被(欠)仰渡候、

此儀一向鱧漁無御座候、

「長崎元俵物請方雜書」所収「松前取計方之儀御尋之趣御答書」天明四(一七八四)年、(長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号六六〇―一二)より抜粋。

(14) 本稿第七章参照。

(15) 前掲注(一二)史料。

(16) 「江差」の地名表記について、史料では「江指」と表現されることもあるが、本稿では「江差」で統一する。

(17) 前掲注(一二)史料。

(18) 『江差町史』第五卷・通説一、一九八二年、五九七頁。

(19) 前掲注(一二)史料。

(20) 「去ル巳年御直仕入被仰出候候以来松前三ヶ所俵物昆布稼方之儀御取調子ニ相成候一件」寛政元(一七八九)年(大村市立史料館所蔵、初村家(旧峰家)史料、請求番号一一三―一二)。

(21) 前掲注(一一)田島論文、『松前町史』通説編・第一卷下、一九八八年、三六七―三六九頁。

(22) 「蝦夷草紙 別録」所収「天明六年、第一、蝦夷地收納運上金帳」(『松前町史』史料編・第三卷、一九七九年)一九〇二六頁。

(23) 前掲注(一二)史料。

(²₄) 右同上。

(²₅) 前掲注(二三)史料所収「五、松前交易直段付帳」天明八(二七八八)年。

※江差付の村々は人口で記されているのに対し、松前付の村々は戸数で記されている。

(²₆) 表四参照。

(²₇) 表五参照。

(²₈) 前掲注(二〇)史料。

(²₉) 右同上。

(³₀) 右同上。

(³₁) 畑井洋樹「問題提起九、俵物生産と盛岡藩の対応——安永期を中心に——」(『地方史研究』五三―四、二〇〇三年)。

※この論稿によると、南部藩において藩主御用の海鼠・串貝の確保に際して、幕府から例外的に認められていたことがわかる。このような事例は、国内各地であったようである。

(³₂) 前掲注(二三)史料。

(³₃) 前掲注(二〇)史料。

(³₄) 『敦賀市史』通史編・上巻、一九八五年、七九四―七九七頁。

第二章 タカシマ・オシヨロにおける煎海鼠・干鮑の生産

はじめに

一八世紀の初頭頃より、蝦夷地で生産される煎海鼠・干鮑は、長崎貿易で使用される輸出商品として着目される。蝦夷地のナマコやアワビは生産量が非常に多く、品質も最良であったためである。

先行研究では、蝦夷地各地で採取されたナマコとアワビがそれぞれ煎海鼠・干鮑に加工され、長崎へ出荷される過程が、かなり詳細に明らかにされている¹⁾。ところが、それらは広大な松前・蝦夷地全体を対象としており、採取される個別の「場所」（ナマコとアワビの生産地は西蝦夷地に多い）における流通過程、中でも生産実態に着目したものは極めて少ない²⁾（本稿第一章「はじめに」の課題④）。そこで本章では、近江八幡（滋賀県）を本拠とする一人の場所請負人（住吉屋西川家）により経営された西蝦夷地のタカシマ・オシヨロ場所（現小樽市の西部）に焦点を絞り、煎海鼠と干鮑の生産・集荷の実態を検討する。

住吉屋西川家に関する研究は、比較的多く存在する。中でもタカシマ場所に焦点を絞り、場所社会を意識して経営を分析した長谷川伸三氏³⁾の研究が注目される。他に、経営帳簿の分析により場所請負資本の構造を検討した田端宏氏⁴⁾、西川家の営業形態や会計帳簿から蝦夷地経営の実態を検討した上村雅洋氏⁵⁾、近年では、これまでの研究水準を踏まえ、他の場所請負人との比較なども行った中西聡氏⁶⁾も両場所をとりあげている。

しかし、タカシマ・オシヨロ場所を扱う先行研究でとりあげられる商品は、ニシンが主体で、それ以外の商品の流通実態には、ほとんど言及されていない。この点も踏まえて、ナマコとアワビに焦点を当てる。加えて、本稿の主題を煎海鼠・干鮑という輸出商品に絞っているが、贈答用、あるいは抜荷を中心として本州方面へ流通するものが多いことも意識する必要がある⁷⁾。

一、煎海鼠・干鮑の商品としての登場

松前・蝦夷地産のナマコやアワビは、輸出商品に限らず、いつから流通商品となっていたのかは定かではない。寛文七（一六六七）年に越前敦賀へ廻漕されていた松前・蝦夷地の商品を記した史料では、「一、松前 昆布・干鮭・串貝・鹽引・いりこ・くしら・にしん・數子・おつとせい・生鶴・眞羽・鹽鳥之類・皮之類。」とあり、すでにナマコやアワビが商品として存在したことが示されている。これは、蝦夷地産のナマコやアワビが登場する最初期の文献史料と思われる。

タカシマ・オシヨロ場所における、ナマコとアワビの産物としての記録は、元文五（一七三九）年頃成立の「蝦夷商賈聞書」¹⁰が最も早いものであろう。産物名は、それぞれ煎海鼠・串貝と記載されている。ここで興味深いのは、「串貝ハカハシラ貝ト申而名物」と記述されている点である。「カハシラ」とは、現在の小樽市赤岩の山海岸付近の地名である。ここから串貝は、「カハシラ貝」と呼ばれ、シクズシ場所¹¹（タカシマ場所）の名物であったことが看取される。さらに、このような事例が他の「場所」でも確認できる。同史料によると、シクズシ場所と同じ後志地方のフルビラ場所においても「串貝古平貝ト申上候也」という記述が見られる。以上より、これらの地域の串貝は、すでに松前辺りで「名物」として定着していた可能性がある。

その後、天明四（一七八四）年頃の成立と見られる「松前随商録」¹²では、シクズシ・オシヨロ場所の出産物の中に「鮑串貝」・「イリコ」が見える。さらに、天明六年の「西蝦夷地場所 地名・産物・方程」¹³によると、シクズシの産物として、「煎海鼠」・「串貝」、オシヨロの産物として、「煎海鼠」・「串鮑」があげられている。蝦夷地のナマコに関する商品としては、煎海鼠が中心である¹⁴。アワビに関する商品としては、国内で潜在的な需要がある串貝から次第に輸出商品としての白干鮑が製造されるようになる。蝦夷地においては、一九世紀初頭までにほぼ白干鮑のみの生産にシフトし、名目

上、幕府の専売品となる¹⁵。

それでは、タカシマ・オシヨロ産の煎海鼠と干鮑がいつから長崎へ出荷されていたのか。煎海鼠に関しては、一八世紀中頃には長崎へ出荷されたと思われる。しかし実際に史料で追えるのは、天明四年のタカシマ産煎海鼠からである¹⁶。タカシマ・オシヨロ産のアワビも寛政期（一七八九～一八〇〇）頃には、干鮑に加工され長崎へ出荷されたと見られる。なお後で詳しく検討するが、煎海鼠や干鮑の生産は、収穫された各「場所」で行われる。

松前・蝦夷地産の輸出商品のほとんどは、天明五年以降、箱館にある俵物会所で一括して集約され、そこから御雇船に積載されて長崎へ送られていた。ところが箱館の開港に伴い、万延元（一八六〇）年より、それまで長崎と神奈川へ集約されていた俵物のうち、長崎俵物役所からの前貸金を受け取っていない商品に関しては、箱館にて直接諸外国へ売り渡すことが認められた¹⁷。ところが内実は、箱館で多くの俵物がイギリスやアメリカなどの外国船に積載され中国へ直接輸出されるようになる。本来、それまで箱館の俵物会所に集荷されていた蝦夷地や東北諸藩の俵物は、生産量が多く良質であった。そのことから長崎貿易に与えた影響は計り知れない。

二、煎海鼠・干鮑の生産活動

続いて、江戸時代後期から明治初年にかけての具体的なタカシマ・オシヨロ場所における、煎海鼠と干鮑の生産活動を見ていきたい。

まず、ナマコやアワビの漁期に関することからまとめたい。江戸時代末期、慶応二（一八六六）年のタカシマ運上屋（場所の拠点）で作成された「諸用日記」によると、「五月十一日（中略）土人、三・四人鮑突ニ沖へ出し候事」¹⁸とある。ここからタカシマ場所では、五月頃にアイヌの人々が鮑突（アワビ漁）にあたっていたことが看取される。他にも、タカシマ場所の「夏漁業」として、ナマコ・アワビ漁があると書き記された史

料もある¹⁹⁾。

他に、オシヨロ場所におけるナマコとアワビの収穫の時期を直接記した史料を掲出する。

一、煎海鼠之儀者、夏土用入迄の内、三十日程漁事仕候、

一、鮑之儀者、六・七月之頃主ニ漁業仕候、冬分ニ相成候而も、風合宜敷候得者、

女之漁業ニ御座候、²⁰⁾

ナマコ漁は、夏に一ヶ月程度行われ、アワビ漁は、夏中心だが天候によつては冬期にも行われたとある。裏を返せば、ニシン漁とサケ漁の盛んな春と秋を避けて行われていると見ることもできるかもしれない。

次に、アイヌの人々へ渡される商品を書き上げた史料によると、アワビの採取漁具とおぼしき「鮑ヤス」が見られる。例えば、嘉永七（一八五四）年の史料では、「鮑ヤス一柄ニ付、代 貳百五拾文」²¹⁾とある。この「鮑ヤス」一柄二五〇文という価格が当時どのくらいの価値があるのか。同史料に記載されている他の品物としては、清酒一升²²⁾二〇〇文・玄米一升²³⁾一〇〇文とある。これらを比較すると、当時の「鮑ヤス」の価値がある程度推測できる。

このほか、アイヌの人たち向けの商品を書き上げた明治二（一八六九）年の史料では、「一、鮑ヤス 大壺柄ニ付 米八升 一、鮑ヤス 中壺柄ニ付 米六升」²⁴⁾とある。嘉永七年より「鮑ヤス」の価格が数倍も上昇したと看取される。ところが、米一升²⁵⁾銭六〇文（前掲史料では米ではなく玄米と表記）とあることから、米値が大きく下落していたことがわかる。加えて同史料では、「一、鮑ヤス 拾柄 代金 壺両三步貳朱」とあることから、アイヌの人たち向けにヤスを一〇柄買い入れていたこともわかる。続けて、運上屋が松前店（住吉屋）からの仕入品目を書き上げた箇所に「一、貳拾から 鮑ヤス」²⁶⁾とあり、この漁具を松前（福山）から調達していたことも判明する。恐らく

本州のどこかで製作され、松前へ入荷したものであろう。

ナマコの漁法については、シクズシ場所で安永元（一七七二）年には「海鼠引御場所」となっていたことより、引（曳）網漁が行われていたと見られる²⁴。ナマコ漁に関しては、アワビ漁ほど史料が充実していないため、他の西蝦夷地の「場所」に関する記録などから考察を深めたい。

寛政四（一七九二）年に、西蝦夷地のソウヤ（宗谷）場所では、アイヌの人々が四〇〇人ほどナマコの曳網漁（舟約三〇〇艘）に従事し、一日平均一二万個のナマコを得て、煎海に加工し、煎海鼠五〇〇個＝玄米一俵（八升入り）の割合で交換されたという²⁵。実際、松前藩には「煎海鼠曳奉行」や「海鼠曳運上」があったことにより、曳網漁で採取されるナマコは、藩にとつても重要な財源であったと見られる。あるいは、西蝦夷地の各場所へ「海鼠引稼方」が二〇二〇人程度出稼している記録もある²⁶。さらに、タカシマ・オシヨロの近隣では、ヨイチ場所で「六月十三辛亥日（中略）一、鼠引不残沖へ出ル」²⁷とあり、シャコタン場所で、明治三年の元運上屋による仕入品の中に「一、鮑突鉈 百から」とともに「一、生海鼠引鉄 百五拾組」が見られる²⁸。「生海鼠引鉄」とは、ナマコの曳網漁で使用する漁具（あるいはその一部）であろうか。ここで、もう一つ漁具を紹介したい。それは、アワビと同じようにナマコを突いて採取するヤスのような漁具である。これは、「海鼠ヤス」などとも呼ばれるもので、曳網と共に蝦夷地において、ナマコを採取するのに用いられていた漁具である。以上より、タカシマ・オシヨロ場所では曳網か、ヤスを使用したナマコ漁が行われていたと類推できる。

さて、ここで煎海鼠や干鮑の生産は、アイヌの人々が主体なのかという疑問が残る。江戸後期から明治初期にかけてのタカシマ・オシヨロ場所では、ニシン漁の稼ぎ手などの和人が流れ込み、アイヌの人々と共に場所社会を形成していた。

その手がかりになる史料を以下に掲出する。

昨巳年

一、壹歩貳百九拾貳石四斗六升 鯡・白干鮑・煎海鼠・昆布漁業高
内

鯡 九千四百廿五石六斗貳升 元運上家番家土人浜中共漁業高
白干鮑 壹石貳升五合 土人共漁業高
煎海鼠 三斗壹升五合 元運上家雇共漁業高
昆布 八百六拾五石五斗 浜中共漁業高、²⁹

これは、明治二（一八六九）年のオシヨロ場所の漁業高であるが、ここから各漁に従事する集団が見てとれる。白干鮑に関しては、アイヌの人々によつてのみ製造され、煎海鼠は、元運上家雇（和人主体か）によつて製造されたと見てとれる。当史料は、各種漁業の権利関係を示している可能性もあり非常に興味深い。

このほか、ナマコとアワビの価格（交換比率）について検討したい。ここで、アイヌの人々の煎海鼠と干鮑の生産に伴う交換比率を見てみよう。嘉永七年には、「一、大鮑五拾ニ付、代清酒三盃、一、小鮑五拾ニ付、代清酒二盃半、一、生煎海鼠大小ニ不拘百ニ付、代清酒五合³⁰」とある。清酒の量の単位は「盃」とあるが、「蝦夷盃」一盃＝二合五勺入りと決められていたようである³¹。さらに、明治二年の「土人ヨリ産物買入直段書」では、「一、煎海鼠三百ニ付、代米八升 一、白干鮑大四百ニ付、代米八升 一、同小五百ニ付 代米八升」³²とある。

ここまでの様々な史料でナマコやアワビは、アイヌの人々によつて、それぞれ煎海鼠と干鮑に加工され、買い上げられていたことも見てとれる。ちなみに、先述の明治二年の「鮑ヤス」の価格（大が米八升）と比較すると、アイヌの人々は「鮑ヤス」（大）を一柄手に入れるのに、煎海鼠三〇〇個、白干鮑は四〇五〇〇個必要だったことがわかる。

三、煎海鼠・干鮑の流通過程

西蝦夷地のタカシマ・オシヨロ場所は、遅くとも一八世紀の中頃より明治初年にかけて、近江八幡を本拠地とする住吉屋西川家が経営を任されていた。各「場所」で生産された煎海鼠と干鮑は、基本的には運上屋に集荷されたと見られる。実際、西川家文書の中にも嘉永六（一八五三）年の蝦夷地の場所請負商人と松前の俵物集荷問屋などの連名で、俵物の増産や密売買の禁止などを徹底するとりきめが残されている³³。このことより各「場所」では、運上屋が主体となり俵物の集荷業務に従事していた様子が見てられる。

次に、住吉屋西川家による煎海鼠や干鮑を含む「場所」の産物の出荷方法を考察する。中西聡氏³⁴によると、文政五（一八二二）年には、手船（西川家所有の船）による松前への積み出しは全くなかったものの、一八三〇年代から次第に手船を増やし、安政六（一八五九）年には、場所産物のすべてを手船（計六艘）で積み出していたという。その中で中西氏は、一九世紀初頭頃に俵物の「場所」からの積み出しには、「番船」が使われたとしている。この「番船」については、後で考察する。その後、一八五〇年代頃に住吉屋西川家は、手船を主体として松前へ俵物を輸送していたと見られる。

煎海鼠や干鮑の集荷に関する集荷量や諸経費等を船ごとに、それぞれ【表一】・【表二】とした。記載されている船は、【表二】のオシヨロ場所に立ち寄る八幡丸を除き、すべて西川家所有の手船である。八幡丸は先述した「番船」であるが、俵物の専用運搬船なのか、あるいは諸国廻船の一部に積み込む契約上の区分なのか運行・運用形態は不明な点が多い。その中で注目されるのは、他の手船に比べると運搬量が非常に少ない点である。表にはないが、八幡丸以外の船は、ニシン肥など他の場所産物を俵物と共に積み出している。ここから他にも、積み込む荷物があると捉えるのが自然である。そこでまず考えられるのが、特定の「場所」を巡る俵物の専用運搬船の可能性である。つまり「番船」とは、蝦夷地の決められた「場所」を巡って俵物を積み込み、箱館などへ運搬する

【表一】安政六年の煎海鼠・干鮑の集荷量と諸経費

場所	船名	品名	目方(正味)	斤数	値段(1斤あたり)	代銭	運賃
オシヨロ	住徳丸 (壹番)	白干鮑	124貫300目	777斤	111文	86貫225文	3貫449文
	中乗丸 (貳番)	白干鮑	254貫目	1,588斤	111文	176貫212文	10貫135文
		煎海鼠	135貫400目	846斤	196文	165貫865文	
	安全丸 (貳番?)	白干鮑	185貫600目	1,160斤	111文	128貫760文	5貫15文
		煎海鼠	7貫目	44斤	196文	8貫575文	
合計		煎海鼠	135貫400目	890斤		174貫440文	18貫599文
		白干鮑	563貫900目	3,525斤		391貫197文	
タカシマ	住徳丸 (アツタ下り)	白干鮑	49貫100目	306斤	111文	33貫994文	1貫285文
	金袋丸 (壹番)	白干鮑	53貫600目	335斤	111文	37貫185文	2貫文
	至善丸 (貳番)	白干鮑	93貫600目	585斤	111文	64貫935文	3貫685文
		煎海鼠	47貫400目	296斤	196文	58貫65文	
	住徳丸 (貳番)	白干鮑	80貫200目	501斤	111文	53貫639文	3貫300文
		煎海鼠	45貫600目	285斤	196文	55貫860文	
合計		煎海鼠	93貫	581斤		113貫925文	10貫270文
		白干鮑	276貫500目	1,727斤		189貫753文	
総計		煎海鼠	228貫400目	1,471斤		288貫365文	28貫869文
		白干鮑	840貫400目	5,252斤		580貫950文	

「両場所勘定帳」安政六(1859)年(松前町史編集室『松前町史』史料編・第三巻、1979年)

※斤数は小数点以下を切り捨てた数値

【表二】万延元年の煎海鼠・干鮑の集荷量と諸経費

場所	船名	品名	目方(正味)	斤数	値段(1斤あたり)	代銭	運賃
オショロ	安全丸 (壹番)	白干鮑	79貫200目	495斤	130文	64貫350文	4貫610文
		白干鮑	97貫200目	608斤	130文	78貫975文	
	安全丸 (貳番)	白干鮑	227貫目	1,409斤	130文	184貫437文	8貫485文
		煎海鼠	99貫600目	623斤	260文	161貫850文	
	八幡丸 (番船)	白干鮑	12貫400目	78斤	130文	10貫75文	—
合計		煎海鼠	99貫600目	623斤		161貫850文	—
		白干鮑	415貫800目	2,590斤		337貫837文	
タカシマ	住徳丸 (貳番)	煎海鼠	19貫200目	120斤	260文	31貫200文	4貫350文
		白干鮑	147貫600目	922斤	130文	119貫925文	
	中乗丸 (貳番)	煎海鼠	80貫800目	505斤	260文	131貫300文	2貫295文
		白干鮑	7貫目	44斤	130文	5貫687文	
合計		煎海鼠	100貫目	625斤		162貫500文	6貫645文
		白干鮑	154貫600目	966斤		125貫612文	
総計		煎海鼠	199貫600目	1,248斤		324貫350文	
		白干鮑	570貫400目	3,556斤		463貫449文	

「両場所勘定帳」万延元(1860)年(松前町史編集室『松前町史』史料編・第三巻、1979年)

※斤数は小数点以下を切り捨てた数値

船ではないかと推定できるのである。住吉屋西川家は、自分で手船を所有し場所産物を積み出せるほど、資金力の強い場所請負人であるが、他の「場所」では手船を所有できない零細な場所請負人も存在するのである。つまり基本的に「番船」とは、そういった「場所」から俵物を積み出すために存在した専用船と捉えることはできないか。八幡丸の場合は、オシヨロ場所での積荷は白干鮑のみであるが、他の「場所」では俵物以外にも積み込む可能性がある。この点について、他の「場所」の俵物がどのように積み出されているのか、あるいは「番船」なる区分は他場所に存在するのか、さらなる事例の蓄積が必要である。

さて、表にある手船の動きは、年間に松前と「場所」を二往復する船（安政六年の住徳丸・万延元年の安全丸）や、タカシマ・オシヨロ両場所に立ち寄る船（同住徳丸）、さらには請負場所ではない「場所」に行く船（同住徳丸）もあり、かなり複雑な動きをしている。また表には記載していないが、これらの船はすべて福山（松前城下）を経由しており、ここで煎海鼠と干鮑は、箱館行きの船に積み替えられたと見られる。

さらに表から、煎海鼠と干鮑の一斤辺りの値段を比較すると、煎海鼠の方が約一・八（二・〇倍も高値であることがわかる。それは集荷量にも比例しており、干鮑の方が格段に多い。また海難リスクの分散のためか、ほとんどの場合には積荷を何艘にも分けて出荷していたようである。

次いで、「場所」における産物の中での俵物の数値的な位置づけを検討したい。幕末のタカシマ場所における俵物の産出量としては、「一、イリコ 壺石式斗 一、白干鮑 式石」³⁵とある。他の産物は、ニシンが八、九九四石とあるのみである。ここから、俵物が「場所」産物全体に占める割合は、わずか〇・〇三%と全くもって比較にならないことがわかる。オシヨロ場所では、二であげた明治二年の記録だが、煎海鼠三斗一升・干鮑一石二升で、他にニシンが九、四二五石六斗二升、昆布が八六五石である。ここでも俵物は、数値的に出せないほど微々たるものである。以上より改めて、これら場所の主産物はニシンであることが確認できる。

続けて、万延元（一八六〇）年における箱館からの煎海鼠と干鮑の輸出量と、タカシマ・オシヨロ場所の集荷量とを比較して、その位置づけを検討する。煎海鼠の輸出量は八万六、三七一斤、干鮑の輸出量は二万二、五六〇斤である³⁶。もし仮に、タカシマ・オシヨロ場所の各商品すべてを箱館に集荷し輸出されたとすると、煎海鼠はわずか二%程度なのに対し、干鮑は約一五%を占めたと結論づけられる³⁷。当年の長崎における各商品の輸出量がどのくらいあるのか判然としないこともあり、厳密な考察は困難である。とはいえ、これら商品の国内最大の生産地である蝦夷地や東北諸藩のものが集積する箱館の輸出量に占める割合である。そこから鑑みると、とりわけ干鮑に関しては、住吉屋西川家の経営するタカシマ・オシヨロ場所が全体に占める割合は、決して微々たるものとはいえないであろう。

おわりに

本稿では、一人の場所請負人の経営する「場所」における煎海鼠と干鮑（輸出商品）の生産・集荷について、可能な限り具体的に検討を加えた。ここでは、論点を整理して今後の課題に触れておきたい。

タカシマ・オシヨロ場所における煎海鼠と干鮑の生産については、とりわけ干鮑に関して、江戸時代後期から明治初期にアイヌの人々が主体となって生産活動に従事していたことが使用する漁具などの考察から詳細に見えてきた。

煎海鼠と干鮑の集荷については、場所請負人の住吉屋西川家による輸送の実態が確認できた。特にタカシマ・オシヨロからの輸送量と箱館からの輸送量を勘案すると、輸出品全体の中でも無視しえない生産量をタカシマ・オシヨロ場所は占めていた可能性があることが見えてきた。

最後に、今後の課題をまとめておきたい。煎海鼠や干鮑の生産活動は、アイヌの人々が主体で行われたことは明白であるものの、その中で和人による収穫分がどのくらいあ

るのか。あるいは、運上屋の手をすり抜ける荷物（抜荷）がどのくらい存在するのか。場所社会における流通経済の特質を探る上でも見逃せない課題である。

また、本稿で明らかになってきたタカシマ・オシヨロ場所における煎海鼠と干鮑の生産・集荷の実態が、他の「場所」にどのくらい相対化できるのか。とりわけナマコやアワビを大量に生産する西蝦夷地の他「場所」の事例と、比較検討する必要がある。具体的には、オシヨロの隣場所であるヨイチ場所では、アイヌの人々がフルウ場所やマシケ場所へ追鮑漁（出稼漁）をしていた³⁸。アワビ漁のための出稼ぎの事例は、タカシマ・オシヨロ場所では確認できなかったが、アイヌ人口の多いヨイチ場所の特質の一つである可能性も考えられる。そうしたことにより、輸出品の生産活動において、各「場所」の特質がどの程度あるのかを明らかにできる。

さらには、近年盛んに行われている「場所」社会の中における「自分商売」・「自分稼」を行うアイヌの人たちの生産活動に関する研究³⁹との対話も今後の重要な課題となる。この点に関しては、俵物生産のみならず、タカシマ・オシヨロ場所におけるアイヌの人たちの幅広い生産活動を検討する中で位置づけを考える必要がある。

（¹）松前・蝦夷地産の俵物に関する主要な研究は、白山友正「松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」『北海道経済史研究所研究叢書』二九、一九六二年）、同「続松前蝦夷

参考資料 タカシマ・オシヨロのアイヌ人口

		タカシマ		オシヨロ	
年次	西暦	家数	人数	家数	人数
天明6年	1786	21	131	70余	250
文化4年	1807	—	193	80	368
文政5年	1822	41	189	71	292
天保期頃	1830～40頃	26	121	41	190
嘉永6年	1853	19	77	37	165
明治3年	1870	—	—	27	105
明治4年	1871	7	25	—	—

天明6年は「西蝦夷地場所ノ地名・産物・方程」（函館市中央図書館所蔵、資料番号1810636611）、文化4年は田草川伝次郎『西蝦夷地日記 文化四丁卯』（石原求龍堂、1944年、翻刻本）、文政5年は「松前蝦夷戸口其他」（北海道大学北方資料室所蔵、旧記 0608）、天保期頃は「東西蝦夷地御場所運上金揚り高並夷人別控」（函館市中央図書館所蔵、福島屋文書第64、資料番号1810466738）、嘉永6年はタカシマが「御場所蝦夷人別調子書」写本（小樽市総合博物館所蔵、西川家25）、オシヨロが『忍路郡郷土誌』（忍路郡郷土誌編纂委員会、1957年）、明治3年は前掲『忍路郡郷土誌』、明治4年は前掲「御場所蝦夷人別調子書」

夷地に於ける長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』三七、一九六四年)、荒居英次『近世海産物貿易史の研究―中国向け輸出貿易と海産物』(吉川弘文館、一九七五年)、同『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年)、小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』(吉川弘文館、一九七三年)、若松正志「長崎俵物の地域別集荷高について」(『東北大学附属図書館研究年報』二四、一九九一年)などがあげられる。

(2) 田島佳也「場所請負制後期のアイヌの漁業とその特質―西蝦夷地余市場所の場合―」(田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館、一九九五年)、後に『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂出版、二〇一四年再収)。

※ヨイチアイヌによるフルウ場所やマシケ場所への追鮑漁(出稼漁)もとりあげている。

(3) 長谷川伸三「幕末期西蝦夷地における場所経営の特質―西川家高島場所の事例―」(地方史研究協議会編『蝦夷地・北海道―歴史と生活』雄山閣出版、一九八一年)、同「幕末期西蝦夷地高島場所における現地労働力の存在形態」(小樽商科大学『商學討究』三七、一・二・三、一九八七年)。

(4) 田端宏「場所請負制度崩壊期に於ける請負人資本の活動」(一) (二) (『北海道教育大学紀要』第一部B、社会科学編、二四、一〇二、一九七三〜七四年)、同「場所請負制度成立についての一考察」(北海道教育大学史学会『史流』二二、一九八〇年)。

(5) 上村雅洋「近江商人西川伝右衛門家の松前経営」(滋賀大学経済学部附属史料館『研究年報』一八、一九八五年)、後に『近江商人の経営史』(清文堂出版、二〇〇〇年再収)。

(6) 中西聡『海の富豪の資本主義 北前船と日本の産業化』(名古屋大学出版会、二〇〇九年)。

(7) 前掲注(一) 小川書、若松正志「長崎俵物をめぐる食文化の歴史的展開」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』創刊号、一九九六年)。

※これらの研究より、煎海鼠や干鮑が一九世紀初頭までには、名目上幕府の統制品となっているものの、抜荷によつて日本各地で消費されていたことが明らかにされている。

(8) 串貝とは、アワビを五個ほど串にさした商品。串鮑。鮑串貝。

(9) 「寛文七年雜記」寛文七(一六六七)年(『敦賀郡誌』一九一五年所収)四六九、四七〇頁。

(10) 「蝦夷商賈聞書」元文四(一七三九)年頃成立(『松前町史』史料編・第三卷、一九七九年)六頁。

(11) タカシマ場所は、一八世紀後半まで「シクズシ場所」と呼称。

(12) 「松前隨商録」天明四(一七八四)年頃成立(函館市中央図書館所蔵、写本、所蔵番号一八一〇四二八一四二)。

(13) 「西蝦夷地場所／地名・産物・方程」天明六(一七八六)年(函館市中央図書館所蔵、資料番号一八一〇六三六六一)。

(14) 蝦夷地産のナマコから製造される商品として、煎海鼠の他に「串煎海鼠」という商品も見られる。ただタカシマ・オシヨロ場所では、見られない商品である。

(15) 本稿第七章参照。

※抜荷や藩主の贈答用などでは利用されていた可能性がある。

(16) 本稿第一章参照。

(17) 前掲注(一) 小川書、五九頁。

(18) 越崎宗一『鯨場史話―郷土史ノート―』(北海道地方史研究会、一九六三年)所収「西蝦夷地高島運上家日記」慶応二(一八六六)年、翻刻史料、二三二頁。

(19) 「主用留」嘉永四(一八五二)年、小樽市総合博物館所蔵(西川家二三)。

(20) 「永代要用口」嘉永七(一八五四)年、小樽市総合博物館所蔵(西川家六)。

(21) 同上。

(22) 「開拓使岩村判官殿へ差出スタル控ノ写シ」明治三(一八七〇)年、小樽市総合博物館所蔵(西川家二九)所収「土人へ売渡物品価格」。

※当史料は明治二年の事柄を記述。

(23) 同上史料所収「松前店元ヨリ仕入品覚」。

(24) 長沼孝、越田賢一郎、榎森進、田端宏、池田貴夫、三浦泰之著『新版 北海道の歴史(上)』古代・中世・近世編(北海道新聞社、二〇一一年)二七七頁。

(25) 串原正峯「夷諺俗話」寛政四(一七九二)年(高倉新一郎編『日本庶民生活資料集成』第四卷、三一書房、一九六九年)四九一～四九二頁。

(26) 「松前・吉岡 沖之口取扱御收納取立方手続並問屋議定書 全」江戸時代後期(『松前町史』史料編・第三卷、一九七九年)一五三頁。

(27) 『安政六巳未年 ヨイチ御場所見廻り日記』(余市町史編纂室、一九七三年)一七三頁。

(28) 「積丹元仕入品調書」明治三(一八七〇)年(『積丹町史資料』第一編、一九七五年所収)四一頁。

(29) 前掲注(二二)史料所収「忍路建網冥加金並小物成」。

※便宜上、魚へんに「兆」⇨鯖、煎海鼠⇨煎海鼠と翻刻する。

(30) 前掲注(二〇)史料。

(31) 浅倉有子「蝦夷地における漆器の流通と使途―椀(盃)・盃台・「台椀」(『北海道・東北史研究』六、二〇一〇年)。

(32) 前掲注(二二)史料所収「土人ヨリ産物買入直段書」。

(33) 前掲注(一九)史料。

(34) 前掲注(七)中西書、六四～六六頁。

(³⁵) 木村時義「三場所諸調書」安政三〜文久三(一八五六〜一八六三)年(北海道大学北方資料室所蔵、木村三〇)。

(³⁶) 前掲注(一)小川書、三四九頁、表二より。

(³⁷) 万延元年における煎海鼠と干鮑の箱館からの輸出货量(斤)と、表中のタカシマ・オシヨロ場所の集荷量(斤)を比較。各商品の生産年と輸出入年は、必ずしも一致するとは限らないため、あくまで試算。

(³⁸) 前掲注(二)田島書。

(³⁹) 右同書、谷本晃久「アイヌの『自分稼』」『日本の時代史19・蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、二〇〇三年所収)など。

第三章 松前・蝦夷地における長崎向け昆布の集荷

はじめに

本章では、松前・蝦夷地で生産される長崎向け昆布（以下、松前昆布と表記）の集荷システムを検討する。具体的には、一八世紀後半、特に天明〳寛政期（一七八一〳一八〇〇）の松前昆布の集荷過程と、長崎への出荷方法を検討し、同じく輸出商品となる俵物との比較検討も交えて、昆布の商品としての特質を明らかにする。天明〳寛政期に着目する理由は、天明五（一七八五）年に、長崎貿易向け商品の集荷主体が、特権商人である請方問屋から、幕府の下部組織である長崎会所へと変容するという大きな画期があることによる。その変容過程を考察することにより、各輸出商品の特質を明らかにできる。

最初に、問題の所在と本稿の意義を確認したい。近世初期、幕府の直轄地長崎で行われた貿易の主な輸出商品は、銀や銅などの金属類である。しかしながら、国内各鉱山における相次ぐ資源の枯渇は、貿易自体の存続に関わるほどの大きな問題となる。それを受けて、元禄十（一六九七）年から「俵物諸色替」がはじまる。そこでは、金属類の代替品として、再生産可能な俵物や昆布などの商品が注目される。さらには、正徳五（一七一五）年のいわゆる「正徳新例」により、金属類の海外への流出を食い止めるべく、貿易額に大きな制限が加えられる。とはいえ、貴金属類の貿易額は定められたが、俵物や昆布などによる「代物貿易」に制限はかけられない。そのため、ますますこれら商品の需要が高まることになる。そうした中、長崎俵物商人により請方問屋が構成され、幕府から俵物・諸色の集荷を独占的に請け負うこととなり、天明五（一七八五）年まで、その体制は継続する。

一八世紀中頃の日本近世社会は、大きな変革の時を迎えようとしていた。宝暦・天明

期（一七五一～一七八八）は、幕藩制社会の崩壊に至る画期の一つとされ¹、「商品流通史」の側面からも、幕藩制市場構造の解体への起点と捉られている²。それには、田沼意次政権による財政立て直しのための経済政策が大きく影響する。長崎貿易の拡大策もその一つであり、具体化された政策が天明五年の長崎会所による直仕入制である。これは、請方問屋の経営難という理由もあるが、俵物・諸色の集荷が大きく強化され、とりわけ生産量の多い松前・蝦夷地が注目される³。

これまで輸出商品の集荷過程に特化した研究としては、とりわけ銅⁴と俵物⁵に関するものが挙げられる。俵物は、幕府の貿易・流通統制の視点から、詳細な生産・集荷の実態が明らかにされつつあり、天明五年の画期にも着目されてきた。しかし昆布などの諸色は、俵物に比すれば流通統制の程度が各段に低い。こともあり、輸出商品としての側面から、生産量や集荷に関わる諸経費、出荷方法といった詳細な集荷実態はほとんど不明である⁷。ところが昆布は、唐人貿易に使用される輸出海産物の中で量的に他の商品をはるかに凌駕するのみならず⁸、唐人に販売した際の利潤も俵物類よりはるかに多い点⁹は、見逃すことはできない。

以上の点を踏まえて、俵物と同様、輸出商品である松前昆布に着目し、その集荷・出荷の実態に焦点をあてる。その中で、集荷方法の変容の画期（天明五年の直仕入）に注目しつつ、昆布の商品としての特質を明らかにし、これまでの俵物研究の中での位置づけを考える。さらに、これまでの俵物研究では、等閑視されてきた松前から長崎への輸出品の出荷過程にも焦点を当てる（本稿第一章「はじめに」の課題⑤）。

昆布は、江戸時代には輸出品としてのみならず、本州方面では食品、あるいは儀礼用品として大いに利用されていた。そうした観点からも、その流通過程を明らかにすることには大きな意義がある。加えて、これまで、昆布の流通に関する先学ではほとんど用いられていない長崎県内の史料を検討対象としたい。

一、松前昆布の生産地と生産量

まずは拙稿¹⁰を参照しながら、天明く寛政期頃の松前・蝦夷地における輸出商品の集荷方法について概観し、昆布の生産・集荷の特徴を考察する。俵物や昆布の集荷に関して松前藩は、一八世紀中頃より天明四（一七八四）年までは、請方問屋から指定された「松前三湊」（松前城下・箱館・江差）にある各俵物集荷問屋に集荷活動を任せていた。ところが、天明五年の長崎会所による直仕入後に松前藩は、集荷業務に大きく関与せざるを得ない状況となる。併せて、各俵物集荷問屋の業務も「惣問屋制」となり、集荷システム全般にわたって大きな変化が見られた。実際に、俵物の生産浦の拡大、抜荷の監視強化、仕入高の割当などの集荷強化が図られる。俵物集荷問屋は、輸出商品の集荷をするために松前三湊に各々設置され実務にあたる。具体的には、天明四年頃の昆布の集荷は「松前三湊」のうち前者二湊で行われ、松前城下の大黒屋茂右衛門・箱館の長崎屋半兵衛が集荷を担当した。これら商人の性格について、大黒屋は蝦夷地の場所請負も兼ねる商人で、長崎屋は俵物・昆布の集荷を専業とする商人である。俵物に関しては、江差でも集荷が行われており、松前地に福嶋・吉岡・熊石村からなる「下請三湊」が設定された。「下請三湊」は、松前地において俵物の出高の多い村々が指定され、「松前三湊」にある各集荷問屋から集荷の監督官として、支配下代・雇下代が派遣されていた。ここで見逃せないのが「下請三湊」は、昆布の大産地である箱館方面には存在しなかったことである。その理由は、昆布集荷に関して生産量が安定していたため、俵物ほど集荷時に強制力が働かなかったことが影響すると見られる。この点は俵物と昆布の輸出商品としての特質を比較する上で、重要な論点であるため後述する。

つぎに、松前昆布の生産に関する実態を検討する。一八世紀前半の松前・蝦夷地における昆布の生産地はどのあたりなのか。元文四（一七三九）年頃成立で、蝦夷地各場所の知行主・産物・交易の様子など経済事情に詳しい「蝦夷商賈聞書」¹¹から検討すると、「場所」の産物として昆布が記載される地域は、トエ（現、函館市戸井）からエトモ（現、室蘭市）までの範囲である。

その後、天明四年の松前昆布の生産浦名¹²を示すと、松前地では、城下より東に位置する札鬚・吉岡・宮ノ歌・白府・福嶋・尻内・木子内・札苅・泉澤・三ッ石・釜屋・茂辺地・富川・三ッ屋・戸切地・有川・尻澤部・大森・湯ノ川・根崎・志苔・大間・銭亀澤・古川尻・石崎・小安・釜屋・宇賀・塩首の計二九浦である。下蝦夷地（東蝦夷地）は、戸井・いきしなひ・尻岸内・鹿部・於札部・砂崎・茅部・野田追・夕良部・阿部田・臼・江戸茂の計一二浦である。その後、寛政四（一七九二）年の生産浦¹³のうち松前地は、戸切地・水谷・飛川・茂辺地・札狩・泉澤・木古内・尻内・福嶋・白府・宮ノ歌・吉岡・札髭の計一三浦で、東蝦夷地は、戸井・尻岸内・尾札部・茅部・野多追・夕らつ婦・阿部田・うす・江供の計九浦（三石昆布は商品名として別記）である。

ここで着目したいのは、「三ッ石」という昆布生産地である。天明四年の史料では、産地浦名として三ッ石（下線部）が明記されているのに対して、寛政四年の史料では、商品名（三ッ石昆布）として登場する。三ッ石昆布の生産地は東蝦夷地であるが、前者は記載順から見ると、箱館に近い松前地の三ッ石（現北斗市）の可能性も考えられる。それに比して後者は、産地名ではなく商品名として記載されていると見られる。東蝦夷地の三ッ石では、管見の限り天明四年頃の史料で、「近年昆布沢山ニ相成申候（以下略）」¹⁴とある。ここから明白な結論は出せないものの、東蝦夷地の三ッ石辺りでは、安永末期〜天明初年（一七八〇頃）までに昆布の生産が開始されたといえる。まとめると、天明〜寛政期頃、松前・蝦夷地における昆布生産地は、松前城下から箱館近辺、さらには内浦湾沿岸が主体であったが、三ッ石など現在の日高地方方面へと伸びていたことがわかる。

天明四年¹⁵から寛政元（一七八九）年¹⁶頃の松前昆布の生産量を示すと、毎年二万五、〇〇〇石から五万石程である。そうしたなか長崎会所は、天明五年の直仕入れに際して、昆布仕入量を定式三、〇〇〇石とした¹⁷。ところが実態を見ると、例えば寛政四年の仕入量定式三、〇〇〇石の内訳は、志苔昆布二、五〇〇石と他の昆布五〇〇石であったものの、他に「臨時」と称して、一万〜一万一、〇〇〇石程も買い入れていた。

これを定式と併せると、一万四、〇〇〇石にも達する¹⁸。これより「定式」というのは、最低限の決められた仕入量であり、実態はその数倍もの量を買入れ入れていることが看取される。したがって、天明五年を画期として松前昆布の集荷は、「定式」買入の開始によって強化されたと見うけられる。しかしながら実態は、「定式」以外に膨大な「臨時」買入が行われていた。こうしたことより松前昆布は、それに堪えうる潤沢な生産量があったことがうかがえる。

本章の小括をすると、一八世紀中頃まで松前昆布の生産地は、主に松前地の吉岡から東蝦夷地のエトモ辺りが充当し、安永末期～天明初年より、三ツ石など東蝦夷地の奥地へ広がりつつあった。松前昆布は、天明五年の長崎会所による直仕入開始に際して、定式三、〇〇〇石というノルマが課せられ集荷が強化される。しかし実際は、「臨時」に定式の数倍にもあたる量が集荷されていた。以上より一八世紀後半に松前昆布の集荷は、潤沢な生産量に裏付けされて比較的安定していたといえよう。

二、松前昆布の商品分類

ここでは、請方問屋が俵物や昆布の集荷を担当した天明四（一七八四）年の松前昆布の集荷に関する諸費用などを考察する。【表一】によると、昆布の集荷にかかる諸費用は、松前藩へ支払う御口銭・蔵で保管する際にかかる蔵敷・集荷問屋への手数料（箱館・松前城下）と三種類からなる。全費用とは、請方問屋（毎年松前へ下代を派遣）が各所に支払うものである。

【表二】から各商品の仕入量（一、〇〇〇石あたり）は、細かく規定されていたことがわかる。商品の分類は、基本的に産地名でなされていた。中でも注目される商品は、詳細な商品分類がされている志苔昆布で、古くから商品化されていたことにより、当時すでに名声を博していたと考えられる。昆布の買入量は、各商品により大きな差がある。目方（重量）から考察すると、下志茂・志苔／志苔長折・中志茂・茅部昆布の順で多く、

【表一】天明四年松前昆布の集荷諸費用

	年数	金額	備考
御口銭1歩半			御領主に相納
蔵敷(昆布4把1駄に付)	1カ年	2文	
	2カ年	4文	
蔵敷(御菓子・元昆布4把1駄に付)	1カ年	4文	
	2カ年	6文	
蔵敷(長折昆布1束に付)	1カ年	2文	
	2カ年	4文	
買入代銭2歩			箱館買入之分同所支配問屋受用
買入代銭2歩半			城下買入之分同所支配問屋受用

「長崎元俵物請方雑書」所収「松前煎海鼠・干鮑・昆布売買直段積出御改諸掛り物定式并昆布壹斤当り凡積書」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館所蔵より作成、(請求番号660-21)

吉岡やエトモなど箱館から割合遠隔地の商品は、仕入量が少ない。これは、運搬費用がかさむことや、昆布の質(価格が比較的安価)の悪さなどが影響するのであろうか。さらに全体の仕入量のバランスを勘案すると、高値でも低値でもない価格的には「中品」を重点的に買入入れていたことがわかる。昆布は、中国人へ売り渡す際、俵物のように

等級がつけられないこともあり、安価な昆布を買い入れた方が利益率は大きいようである¹⁹。この点について、状況証拠しかないため確信は持てないが、請方問屋は、「上品」では長崎で唐人へ売る際の利益が縮小し、「下品」では唐人へ売り渡す際に評判が悪いことを懸念していると推測できる。加えて、各商品の買入量全体に占める割合は、志苔

【表二】天明四年松前昆布の集荷諸費用見積詳細(1,000石あたり)

惣名	量	目方	レート	価格
志苔早前昆布	2,660駄	1,596貫目	丁銭600文に付25駄替	63貫840文
志苔昆布	3,956駄	6,725貫200目	丁銭600文に付8駄2把替	279貫247文
志苔長折昆布	7,472束	6,725貫200目	1束に付55文替	410貫960文
志苔石附昆布	70駄	315貫目	丁銭600文に付3駄替	14貫文
志苔御役昆布	177駄	318貫600目	丁銭600文に付6駄替	17貫700文
志苔御菓子昆布	64駄	320貫目	丁銭600文に付2駄2把替	15貫360文
下志茂昆布	4,400駄	7,040貫目	丁銭600文に付5駄2把替	480貫文
中志茂昆布	3,125駄	5,000貫目	丁銭600文に付5駄替	375貫文
上志茂昆布	1,475駄	2,360貫目	丁銭600文に付4駄2把替	196貫666文
夕良部昆布	277駄	500貫目	丁銭600文に付5駄2把替	30貫218文
三ツ石昆布	555駄	1,000貫目	丁銭600文に付4駄替	83貫250文
臼昆布	166駄	300貫目	丁銭600文に付5駄替	19貫920文
江戸茂昆布	100駄	200貫目	丁銭600文に付6駄替	10貫文
内元昆布	411駄	700貫目	丁銭600文に付5駄替	49貫320文
内元長折昆布	300束	300貫目	1束に付63文替	18貫900文
吉岡元昆布	250駄	450貫目	丁銭600文に付5駄2把替	27貫271文
吉岡昆布	55駄	50貫目	丁銭600文に付11駄替	3貫文
茅部昆布	2,700駄	4,600貫目	丁銭600文に付6駄替	270貫文
野田追昆布	833駄	1,500貫目	丁銭600文に付5駄2把替	90貫878文
買入総計		40,000貫目		2,455貫530文
御口銭	御領主へ上納するもので買入代の1歩半			36貫833文
蔵敷				75貫706文
支配問屋受用	買入代の2歩			49貫110文
総計(丁銭)				2,617貫179文
ㄥ(96銭)				2,726貫227文
ㄥ(銀)				27貫262匁8歩8厘1毛2弗

「長崎元俵物請方雑書」所収「松前煎海鼠・干鮑・昆布元直段積出御改諸掛り物定式并昆布倉斤当凡積書」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館所蔵より作成、(請求番号660-21)

昆布のみで四割、続いて志茂昆布が三割と、この二種のみで七割にも達することは注目に値する。

引き続き【表二】より各商品の分類方法を考察する。松前・蝦夷地の各昆布産地の地域的な範囲と、内訳に等級の存在する産地があることがわかる。そうしたなか志苔早前昆布は価格もとりわけ安価なことより、恐らく質も相当に悪いものであるう。それを商品化する理由は、以下のように考えられる。仮に、「志苔」というブランド名で商品化が可能と考えると、本州以南の一般民衆に消費される商品と考えられる。一般民衆に消費されることにより、ブランド力も高まり相乗効果ともなりうる。

ここで本章をまとめておきたい。松前昆布は、商品価値が高いと見られる志苔昆布などを除き、基本的に産地名で商品分類されていた。それにあわせて商品の買入量も細かく決められていた。また請方問屋は、高値でも低値でもない「中品」を重点的に買入れていた。この点は、請方問屋による利益追求の姿勢と目される。

三、輸出商品の出荷

松前・蝦夷地で集荷された輸出商品は、どのような過程を経て長崎へ出荷されるのであろうか。ここでは、その出荷過程について、とりわけ輸出商品の運搬に使用する船の特徴から検討したい。まず、その特徴を端的に書き記された史料によると、「右積船大坂表二而、正二月頃より雇下し、此元五・六月迄二不残積仕舞、右船八・九百石より千四・五百石迄（以下略）」²⁰とある。ここから、松前へ向かう輸出品の運搬船は、大坂で雇用されていたことがわかる。船は、年始頃に大坂を出て松前へ向かい、輸出品を積み込み、五・六月までに長崎へ向けて出発という動きである。船の大きさは、八〇〇〜一、五〇〇石積程度であり、当時としては大型なものが使用されていたようである。続けて、輸出品の運搬費用を検討する。

一、昆布積取候御雇船運賃之儀、昆布千石二付、銀拾貳貫目之御極ニ而、年々大坂・長崎ニおいて相雇差下来候処、近年諸色高直ニ而、諸国廻米等之運賃一統引揚候ニ付、何分是迄之運賃ニ而者、難積請候船改是迄之願上、於大坂表諸々可承御城米運賃等取調子之上、御伺申上去ル子年より御手当之名目を以、壹貫五百目相加へ、都合拾三貫五百目ニ相究申候、²¹

船の運賃は、積荷の昆布一、〇〇〇石を基準とし、安永八（一七七九）年まで銀十二貫目であったものが、物価の上昇と共に廻米運賃も値上がりしたため、翌年から銀十三貫五〇〇目としたとある。この史料で最も注目したいのは、昆布と共に俵物も運搬されたと見られるのに対し、昆布の廻漕量のみで運賃が決定されていた点である。これより、松前・蝦夷地における輸出品の出荷時における昆布の「量的な存在感」が見てとれる。加えて史料では、運搬船は大坂のみならず、長崎で雇用される場合もあると記載されている。

続いて、輸出品を実際に運搬する御雇船の詳細な概要から、その特徴を洗い出そう【表三】～【表五】。はじめに【表三】と【表四】の史料成立年代は、船主名から検討すると、一八世紀後半（中でも天明期以前）であると見る²²。

まず【表三】によると、松前・蝦夷地で御雇船が入船する湊は、「松前三湊」のうちでも、ほぼ箱館に限定されていたことが判明する。他に、松前城下へ入船する事例も見られるが、非常に稀である。また、江差についても集荷問屋は存在するものの、表から御雇船が入船した事例は確認できない。ここから、江差と松前城下で集荷された荷物の大半は、箱館に運搬されてから長崎へ廻漕されるしくみであったことが看取される。さらに【表三】において注視されるのは、番数五の船が入船する湊に、「松前三湊」以外の湊である吉岡が見られる点である。吉岡は先述したように「下請三湊」の一つではあるが、輸出品の集荷拠点としての機能も同時に果たしていたことがわかる。御雇船

【表三】申年長崎俵物昆布運搬用御雇船概要

船の番数	經由地	石数 (石)	積載物 (丸)	積数 (斤)	代銀	船名	船主名	沖船頭	番立	大坂→松前出航→長崎
1	松前箱館	1050	昆布2,100	25万2,000	84貫168目程	住力丸	大坂備前屋五兵衛	基三郎	壱	2月2日→4月8日→5月8日
			松前煎海鼠90	1万1,250	45貫675目程					
2	松前箱館	1,150	昆布2,300	27万6,400	92貫100目程	鹿吉丸	大坂河内屋平吉	新五郎	〃	2月2日→3月28日→4月25日
			松前煎海鼠80	1万	40貫600目程					
3	松前箱館	1,150	昆布2,340	28万800	93貫700目程	大力丸	大坂河内屋平吉	善右衛門	〃	2月2日→3月28日→5月10日
			松前煎海鼠69	8,625	34貫目程					
			松前干鮑1	125	330目程					
4	松前箱館	850	昆布1,500	18万	60貫目程	伊勢丸	大坂紙屋清兵衛	与七	〃	2月12日→6月26日→8月6日
			松前煎海鼠7	875	3貫500目程					
5	松前城下 吉岡	1,350	昆布2,462	29万5,440	98貫280目程	宮市丸	大坂大津屋兵助	悦五郎	〃	2月12日→5月14日→7月21日
			松前煎海鼠64	8000	32貫500目程					
			松前干鮑7	875	2貫360目程					
6	松前城下 箱館	1,450	昆布2,916	34万9,920	116貫640目程	鹿吉新造	大坂大津屋兵助	太郎次	〃	2月12日→5月6日→7月6日
			松前煎海鼠140	1万7,500	70貫目程					
7	松前箱館	700	昆布1,886	22万6,320	75貫440目程	鹿吉丸	大坂河内屋平吉	新五郎	弐	記載なし→8月4日→10月13日
			松前煎海鼠14	1750	7貫目程					
長崎廻着高		昆布	15,504	186万480	620貫328目程	斤数 (1丸あたり)	120斤	代銀 (1丸あたり)	40目程	
		煎海鼠	464	5万8,000	233貫275目程		125斤		502目程	
		干鮑	8	1000	2貫690目程		125斤		336目程	

「申年松前・南部・津軽 𠂔番立・𠂔番立雇船船名前書付」初村家(旧峰家)史料、大村市立史料館所蔵より作成、(請求番号113—38)

【表四】亥年長崎俵物昆布運搬用御雇船概要

船の番数	経由地	石数 (石)	積数 (斤)	船名	船主名	沖船頭	番立	備考
1	松前箱館	900		明神丸	大坂紅屋長兵衛	清左衛門	壱	破船
2	松前箱館	1,100	28万5,787	住吉丸	筑前宮浦平吉	直乗	〃	
3	松前箱館	750	17万4,016	沙棠丸	大坂泉屋伝右衛門	徳之丞	〃	
4	松前箱館	900	21万2,024	八幡丸	大坂近江屋藤八	長蔵	〃	
5	松前箱館	900	21万2,740	春日丸	大坂讃岐屋勘助	徳太夫	〃	
6	松前箱館	1,150	27万1,459	太宰丸	大坂泉屋伝右衛門	惣三郎	〃	
7	松前箱館	750	19万8,946	小虎丸	大坂泉屋伝右衛門	平兵衛	〃	
8	松前箱館	800	記載なし	太神丸	大坂鈴鹿屋九郎兵衛	兵右衛門	弐	
9	松前箱館	800	21万7,492	八幡丸	大坂讃岐屋勘助	徳太夫	〃	

「俵物方書付」初村家(旧峰家)史料、大村市立史料館所蔵より作成、(請求番号113—33)
 ※諸色の廻着高のみ記載のため、俵物については不明。

【表五】天明四年長崎俵物昆布運搬用御雇船概要

船の番数	経由地	船名	船主名	番立	備考
1	松前	八幡丸	不明	壱	
2	松前	春日丸		〃	
3	松前	住吉丸		〃	
4	松前	虎吉丸		〃	
5	松前	今富丸		〃	
6	松前	八幡丸	不明	弐	
7	松前	通宝丸		〃	
8	松前	武悦丸		〃	地雇
9	松前	不明	加賀橋立田中伊兵衛船	〃	地雇

「長崎元俵物請方雑書」所収「松前取計方之儀御尋之趣御答書」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館所蔵より作成、(請求番号660—21)
 ※松前(経由地)とは、入船する具体的な湊は不明なため便宜的に使用。

の大きさは、一、〇〇〇石程度のものが主流である。それらは二つの船団（一・二番立）に分類され、すべて大坂船で占められた。積載物の重量（目方）は昆布のみで全体の約九七％を占めており、積荷全体に占める割合が極めて高いことがわかる。これは、松前・蝦夷地産の輸出商品の中でも昆布を主に集荷する湊である箱館に御雇船が集中した理由であろう。ところが、昆布と俵物の価格を比較（一丸あたり）すると、昆布は煎海鼠の約十分の一、干鮑の約七分の一と非常に安価である。大まかな御雇船の動きは、二月に大坂を出て松前に向かい、積荷を終えると三〇八月頃に長崎へ向け出発し、四〇十月までには長崎へ到着する。恐らくその後、積荷を降ろすと大坂に戻り船囲し、翌年の廻漕に備えたことであろう。加えて【表三】では、申年の長崎への昆布廻漕総量が約七、四四〇石²³であった。

【表四】の考察では、【表三】と重複する部分には言及しないが、船主の記載部分で大坂船の中に筑前船（番数二）が存在することは、先にみた長崎で雇用した船の事例と合致する。【表四】における長崎への昆布廻漕総量は、約六、四〇〇石²⁴であった。

【表五】は、天明四（一七八四）年の御雇船の概要である。情報量は乏しいものの、年代を特定できる貴重な事例である。【表四】とは重複する船名が多いことから、定期的に近いように思われる。ここでは、二番立の船の中にある「地雇」なる船が注目される。これは、松前で調達される船であり、恐らく当初雇用した船数で全商品の廻漕が困難な場合（昆布の廻漕量に規定される可能性が高い）に、別途調達されたものと見られる。さらに、その船主の中に加賀橋立の船が存在することにも着目したい。これは輸出品の長崎廻漕に、いわゆる「北前船」が使用されていた可能性がある貴重な事例と見られる。この点は、時期的問題や船主の来歴などの詳細な考察をする必要があるため、ここでは指摘するに留めておきたい。

三章をまとめると、松前・蝦夷地で集荷される輸出品は、昆布が多く集まる箱館を主にセンターとして集荷された。それは昆布の量的な問題が理由と考えられる。輸出品の廻漕は、大坂などで雇われる八〇〇〜一、五〇〇石程度の大型船約一〇艘によって

長崎へと運ばれた。昆布の運搬量で廻漕運賃が決められるなど、輸送における昆布の「量的な存在感」は注目に値する。

おわりに

以上、一八世紀後半とりわけ天明・寛政期における松前昆布の長崎への具体的な流通過程と、集荷方法の変容を具体的に検証した。

最後に、一八世紀後半の松前・蝦夷地産の輸出商品（昆布と俵物）との比較検討をしてまとめに換えたい。価格と集荷量の比較では、全く正反対の結果が得られる。昆布は俵物に比すれば、価格が一〇分の一程度と大変安価で、集荷量が比較にならないほど多量であった。昆布の集荷量が多いという特徴は、長崎への輸出商品廻漕の際、昆布の積載量で廻漕運賃が決定されていた点が象徴している。

天明五年、長崎会所による俵物や昆布の直仕入が開始される。そこで昆布の集荷量は、定式三、〇〇〇石と設定された。ところが内実は、「臨時」と称してその数倍もの量が集荷されていた。昆布は「臨時」と称して、唐人の都合に応じて集荷量の調節が可能であったことを示している。この点は、昆布の輸出商品としての特徴をよく表している。つまり昆布は、決められた集荷量を確保することが難しい俵物と比較すると、安定的に集荷量が確保できる輸出商品なのである。長崎貿易における昆布の商品としての特質は、この唐人の需要に対する安定した供給量にあるといえよう。

さらに昆布の買い入れは、価格的に「中品」を重点的に行われていた。それは、等級が厳格につけられた俵物のように、商品の質にそれほど気が払われなかったためである。大雑把に俵物と昆布の商品としての特質をまとめると、単価が高く商品的価値も高い俵物と、単価は安く商品的価値が低い昆布という構図で見えることもできるのかもしれない。ただ昆布は、少量では商品的価値は低いかもしれないが、多量になると大きな利益を生み出すことになる²⁵⁾。これまでの輸出海産物に関する先学では、等閑視されて

きた嫌いのある昆布であるが、「量的な存在感」により輸出海産物の中では、集荷主体からみれば俵物より魅力的な商品であったのではなかろうか。

(1) 林基「宝暦く天明期の社会情勢」(『岩波講座日本歴史 近世四』岩波書店、一九六三年)。

※明治維新への起点として、田沼政権下の宝暦・天明期に注目している。

(2) 林玲子『江戸問屋仲間の研究―幕藩体制下の都市商業資本―』(御茶の水書房、一九六七年)、中井信彦『転換期幕藩制の研究―宝暦・天明期の経済政策と商品流通―』(塙書房、一九七一年)。

(3) 幕府は天明五年の直仕入に際して全国に俵物や昆布の請負高を設定した。その中でも、松前・蝦夷地の請負高の全国に占める割合は、煎海鼠が約三〇%、干鮑が約四〇%を占める。荒居英次『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年) 一七五頁。

(4) 小葉田淳『日本銅鉱業史の研究』(思文閣出版、一九九三年)。近年、今井典子氏による一連の研究が挙げられる。

(5) 松前・蝦夷地に限定した俵物に関する研究は、白山友正「徳川幕府の官宮商業の一例―長崎俵物と蝦夷地交易との関係―」(『社会経済史学』三―四、一九三三年) 沼田次郎「日清貿易に於ける一問題」(『歴史地理』六八―五・六、一九三六年)、近松文三郎「松前煎海鼠」(『太湖』一〇九―一一七、一九五二年)、同「松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』二九、一九六二年)、同「続 松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』三七、一九六四年)、同「松前蝦夷地における長崎俵物の研究補遺」(『漁業経済研究』一三―四、一九六五年)、小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』(吉川弘文館、一九七三年)、小林真人「松前蝦夷地産俵物の生産と集荷―俵物役所直仕入制成立前後まで―」(『松前藩と松前』一七、一九八一年)、前掲注(三) 荒居書、若松正志「長崎俵物の地域別集荷高について」(『東北大学附属図書館研究年報』二四、一九九一年)、田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂出版、二

〇一四年）がある。

（⁶）本稿第七章参照。

※昆布は、貿易統制の強まる天明五年の直仕入以降も恒常的に国内市場へ大量に投下される商品である。

（⁷）近世の昆布の流通過程を大きく取りあげた研究は、羽原又吉『支那輸出 日本昆布業資本主義史』（有斐閣、一九三五年）、稲垣美三雄『日本昆布大観』（正進堂、一九四七年）、前掲注（五）白山二論文、大石圭一『昆布の道』（第一書房、一九八七年）、編著／発行田澤伸雄『北海道昆布漁業史』（一九九〇年）二九～三四頁、深井甚三『近世日本海海運史の研究―北前船と抜荷―』（東京堂出版、二〇〇九年）、前掲注（五）田島書がある。

※中でも羽原書は、輸出商品としての昆布を追ったものであるが、明治以降が主に扱われ、近世の昆布の流通実態は、頁数も少量かつ概説的な説明に終わっている。さらに、前掲注（五）田島書は、江戸期における輸出商品としての昆布集荷の実態にも踏み込んでいるものの、先学の総括的な位置づけであり、中でも長崎から輸出される商品より、薩摩から琉球を通して中国へ運ばれる昆布に注目している。

（⁸）明和八（一七七二）年の輸出货量（海産物）のうち、昆布は全体の約八四％を占める。俵物は三品あわせてもわずか約一五％である。前掲注（三）荒居書、二一頁より算出。

（⁹）安永七（一七七八）～天明二（一七八二）年の五ケ年の平均利潤（銀換算）は、煎海鼠約五万八、〇〇〇匁・干鮑約四万三、〇〇〇匁に対し、昆布は約五七万二、〇〇〇匁（上納金や運賃などの雑費を差し引いても三一万三二〇匁）にも上る。前掲注（五）小川書、四一頁表九と八六頁表六より算出。

※なお煎海鼠と干鮑の集荷にかかる雑費は、俵物として一括されており厳密な計算ができない。

(10) 本稿第一章参照。

(11) 「蝦夷商賈聞書」元文四（一七三九）年頃成立（『松前町史』史料編・第三卷、一九七九年）。

(12) 「長崎元俵物請方雜書」天明四（一七八四）年、所収「松前煎海鼠・干鮑・昆布出方浦名帳」（長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号六六〇―一二一）。

(13) 「昆布買入方一件」寛政四（一七九二）年、（岐阜県歴史資料館寄託史料、武川久兵衛家文書、請求番号「―乙―E―四」）。

※史料中の昆布生産浦は志苔近辺の地名が抜け落ちている。理由は、志苔浜が松前藩の運上浜であることが記載されている。

(14) 「松前随商録」天明四（一七八四）年頃成立（函館市中央図書館所蔵、所蔵番号一八一〇四二八―四二二）。

(15) 前掲注（二二）史料所収「松前取計方之儀御尋之趣御答書」。

(16) 「去ル巳年御直仕入被仰出候候以来松前三ヶ所俵物・昆布稼方之儀御取調子二相成候一件」寛政元（一七八九）年、（大村市立史料館所蔵、初村家（旧峰家）史料、請求番号一一三―一二二）。

(17) 遠山景直『日清貿易北海道重要海産志』（魅文社、一八八一年）三〇頁。

(18) 前掲注（二三）史料。

(19) 「長崎雜誌 俵物・諸色唐人買渡値段ほか 写本」（長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号・福田文庫十九―五一）。

※史料の正確な成立年代は不明だが、天明四年に煎海鼠・干鮑、寛政元年に諸色の一つで薬種として用いられた茯苓の売り渡し価格に変動があったことが記載されているため、一八世紀後半の価格が記載されていると見られる。

※俵物は、中国人へ売り渡す際に一番―一〇番まで等級が存在した。それに対し昆布は、煎海鼠や干鮑のように番立（等級区分）が見られないものの、標準価格の他に参

割八分下げの価格（貳分七毛壹弗）と三割下げの価格（貳分参厘参毛八弗）が記載されている。それは、前掲注（三）荒居書、三九一頁にある中国船主は、俵物・諸色の値組をする際、見本品をもとに見分を行ったことを反映していると思われる。

（²⁰）前掲注（一二三）史料。

（²¹）前掲注（一六）史料。

（²²）「泉屋伝右衛門の経歴」【表四】の船の番数三・六・七の船主）。

彼は江戸生れで、享保三（一七一八）年二月に一一歳で江戸中橋店に奉公した。同一二年春より浅草吹屋に移ったが、延享三（一七四六）年八月大坂へ呼ばれ休息となった。しかし浅草米店開業にともない、「算立存候者無之」とのこと、米店支配を兼ねた。翌四年八月には開設事務も一段落したため、父の故郷下野国佐野に帰っている。泉屋は金融関係の事務を主としていなかったから、伝右衛門は数少ない練達者として、札差創業を助けたのであり、帰国のち再び召出されて江戸中橋店・大坂本店に勤め、老分別家として本家・豊後町分家の家政にも預っている。編集・発行 住友修史室『泉屋叢考』（第一六集、一九七六年）三四頁。

※これより一八世紀後半、大坂に泉屋伝右衛門という人物が存在したことがわかる。泉屋は長崎向けの御用銅の流通にも大きく関わり、幕府と関係の深い商人であった。

※【表三】には、泉屋伝右衛門の記載が見られないものの、元史料記載の船主（南部經由船）の中に存在する。

※天明期以前とする理由は、【表三】・【表四】の元史料で松前昆布の廻漕量が六〜七、〇〇〇石程度であるのに対し、前掲注（一二三）史料によると寛政期の廻漕量は、約一万五、〇〇〇石にも上るといふ量的な差による。

（²³）計算方法は、昆布一、〇〇〇石を二五万斤とする。前掲注（一九）史料に記載。

（²⁴）右同上。

（²⁵）前掲注（九）参照。

第四章 近世トカチにおける昆布の生産過程

はじめに

昆布は、現在北海道が国内総生産量の九割以上を占めており、北方でのみ生産される海藻である。その事情は近世においてもほとんど変わらない。ただ、北海道（以下、松前・蝦夷地とする）の北・東部で生産される昆布が本州方面へと流通するのは、一八世紀後半以降のことである。昆布は、近世の和風文化において食物としてのみならず、儀礼用品として、又は輸出商品の花型となるなど、様々な場面に登場する魅力的な商品であったと見られる。よって、その商品としての流通構造を追うことは、近世社会の特質を知る大きな手がかりの一つになると考えられる。近世における昆布の流通に関する諸先学のうち、生産のしくみについては、松前・蝦夷地の全体像を描いたものが多く、個別地域では不明な点が非常に多い¹。

それを受けて本稿では、広大な松前・蝦夷地の中でもトカチ²にフィールドを設定して、昆布という商品に着目し、その生産過程と巨視的にトカチで生産される海産物の中で「トカチ昆布」³が占める位置を考えたい。なお、トカチを検討地域とした理由は、本論で詳述するが、松前・蝦夷地内において昆布の生産量が多い地域であることと、輸出商品としての主力生産地の一角を占めていたことも含め、近世トカチを代表する海産物であったと見られるためである。

考察にあたっては、函館市中央図書館所蔵のトカチ場所を請け負った福島屋（杉浦）嘉七家の文書を補足的に用いることとする。

一、トカチにおける昆布

蝦夷ヶ島における昆布の生産は、遅くとも室町時代にさかのぼることは「庭訓往来」

【表一】天保年間の昆布生産量

地域	生産量(石)
幌別	200
沙流・新冠・静内	1,500
三石	1,500
浦河	1,400
様似	600
幌泉	4,500
十勝	2,000
釧路	2,500
箱館在茅部一円	4,000

『北海道漁業志稿』(北水協会編、1930年)342頁より作成

にある各地の名産品の中に登場する「宇賀昆布」という名称を見ても明白である⁴。ただ、その生産地は、宇賀(箱館周辺)に限られ、江戸時代の中期頃に至っても、エトモ(現在の室蘭)辺りまでであったと見られる。例えば、蝦夷地の各場所の知行主や生産品などが記された「蝦夷商賈聞書」によると、昆布はトエ(戸井)からエトモ(室蘭)にかけて生産されていたことが看取される⁵。つまり、エトモより東部にあたるトカチに関しては、産物の種類(詳細は後述)の記述は見られるものの、昆布生産の様子は確

認できない。その後、管見の限りでは、天明六（一七八六）年にトカチにおける昆布生産がはっきりと確認できる⁶。加えてトカチ昆布は、商品の分類では「三ツ石昆布」とされたようである⁷。これは主に現在の日高地方で生産される昆布で、一九世紀前半には、中国向けの輸出品の花形となる⁸。その理由として以前は、輸出品の主力であった箱館周辺で生産される志苔昆布より中国人に大いに受け入れられたためである。

トカチ昆布の具体的な生産量が判明するのは、一九世紀前半、天保年間（一八三〇～一八四三）である。

【表一】によると、天保年間の松前・蝦夷地（表中では西蝦夷地と松前地西在の生産量の記載がないため、正確な全体像は示されていない）における昆布の生産量は、総量一万八、二〇〇石のうち一場所に分けると、幌泉（ホロイズミ）が四、五〇〇石と最も多く、次いで茅部周辺（箱館六ヶ場所か）、釧路（クスリ）、そして十勝（トカチ）と続く。なかでも一場所として見た場合、トカチは生産量全体の約一一％を占める大産地の一つであった。

今度は【表二】から、幕末、文久三（一八六三）年の昆布生産量（表中では西蝦夷地と松前地西在の生産量の記載がないため、正確な全体像は示されていない）を見てみよう。まず、ここで注目されるのが、国後（クナシリ）や択捉（エトロフ）といった南千島でも昆布の生産が始まっていることが明確に確認できる点である。たとえば根室（ネモロ）では、昆布の刈り取り技術を学ぶために、場所請負人が幌泉へ漁民を派遣して、技術を習得させて収穫を始めたという⁹。場所別にみると、昆布の生産量は幌泉が最も多く、次いで厚岸（アツケシ）・釧路が続き、トカチは次点である。その順位は【表一】と比較すると、箱館周辺の昆布生産量に関する記載がないものの、現在の日高・釧路方面に続き、生産量の多い地域にあたることが判明する。また一場所で見ると、やはり西蝦夷地と松前地西在以外の蝦夷地全体の中では生産の多い地域にあたっており、比率としては、約一一％で天保期とほぼ同じ結果である。

さらに【表一】と比較すると、各地域とも生産量の増加が著しい。三石など一部を除

【表二】文久3年の昆布生産量

場所	生産量(石)	場所	生産量(石)
山越内	48(長切)	三石	1,222
有珠	300	浦河	2,693
虻田	225	様似	2,073
絵鞆	281	幌泉	13,005
白老	75	十勝	4,266
勇払	3	釧路	5,564
沙流	502	厚岸	7,653
新冠	18	国後	295
静内	1,870	択捉	8

『北海道漁業志稿』(北水協会編、1930年)342頁より作成

※小数点以下は切り上げ

※根室が抜けているが理由は不明

けば、ほとんどの地域で生産量が倍増している(トカチは約二倍)。これは大々的に昆布の収穫が行われはじめた証拠で、当然本州方面への流通量も多くなっていることが予

想される。すなわち国内における昆布の消費量も急激に増加傾向にあることが容易に推測され、その中でトカチ昆布も大きな位置を占めていたと思われる。なお、西蝦夷地と松前西在における昆布生産は、少量ながら行われている。しかし昆布産地の主体は、松前地東在から東蝦夷地一帯が充当するため、大まかな数値として捉えることは十分可能であると考ええる。

小括すると、トカチ昆布の生産は一八世紀後半（天明初年頃）にはじまり、一九世紀に入ると、西蝦夷地・松前西在以外の松前・蝦夷地における昆布総生産量の一〇％程度を占めるに至る。また、幕末には南千島などでも昆布の生産が始まるため、主要生産地の中でトカチ昆布が占める割合が最も高いのは、一九世紀前半（文化・天保期頃）であったと見られる。なお、西蝦夷地と松前西在の生産量は、東蝦夷地と松前東在と比較すると、格段に少ないと見られ数値にそれほど大きな違いは出ないと見られる。

二、トカチの昆布生産

トカチでは、具体的にどのような流れで昆布の生産がなされていたのであろうか。トカチ昆布の詳細な生産の様子がわかる史料はそう多くないものの、その一端を明らかにしてみたい。最初は、「東蝦夷地各場所様子大概書」から一九世紀初頭の昆布生産の様子を検討する。

戸勝場所大概書

出荷物

布海苔 昆布 鰯 鱈 鮎 鮓 鯨皮 厚子

一 男は春は鱈 鮎を釣、布海苔を取、夏は昆布を取り、秋は鰯漁を致、冬の稼方なし、戸勝山え帰りにて越年致す。

一 保呂泉領しやうや場所は当場所より出稼の場所にして、布海苔 昆布を取揚産

物に出す。

一 もいけし 昆布取揚場所也。

一 おしらん別 おなを別 ひろふ、此三ヶ所昆布取揚場所也。¹⁰

トカチ昆布が商品として扱われるようになったのは、先述したように一八世紀後半の天明期以前とみられるが、それから二〇三〇年ほど経た生産の様子である。

まずは、トカチでの昆布生産地として、モイケシ・オシラベツ・オナオベツ・ヒロオ（すべて現、広尾町内）の四ヶ所があげられている。ここから、トカチ場所のうち昆布が生産された地域は、ヒロウ以南に限られていたことがわかる。これは、昆布が岩場を好むという性格によるもので、トカチの海岸のうちヒロオ以北は砂地であることが理由として考えられる。

この史料によると、トカチ場所のアイヌの人々は、「場所」を超えて隣のホロイズミ場所のショヤ（現、えりも町庶野）へ昆布を採取するため、出稼ぎしていたことも明記されている。同史料のホロイズミ場所の記述部分にもまた、「シヨウヤ浜の儀は美老の方にて専手を入れ、出稼の場所に相成有之候。」とあり、広尾方面より出稼ぎにきて、昆布を採取していたことが明記されている。これは、ホロイズミ場所との間の取り決めであったとみられ、ホロイズミ場所の一部で採取される昆布がトカチ場所で産出されたものとして計算されていた可能性が考えられる。

また、ホロイズミ場所のショヤを巡っては、以下の史料もある。

一、シヨウヤ浜之儀トカチ場所江、借受候上者漁事之儀者、ホロイツミ場所より差寄^{ママ}申上間敷、人馬継立之儀、前々之通トカチより者ホロイツミ会所迄ホロイツミより者トカチ会所迄御遣違聊御差支無之様可仕候、尤御直捌之節者、蝦夷人三拾人ツツ年々トカチよりホロイツミ江貸渡候義ニ御座候得共、以来ホロイツミ方ニ而入用之節者、賃銭を以借受可仕候趣懇談仕候、

但 ショウヤ浜寄面漁御座候節者、前々之振合

を以ホロイツミ蝦夷人持前ニ而取扱候積り、¹¹

右史料によると、ショウヤ浜（ショヤ）は、ホロイズミ場所からトカチ場所に貸借していることになっている。また幕府による東蝦夷地の直掬制の時期（一七九九～一八一）には、トカチのアイヌの人々をホロイズミ場所へ三〇人貸し渡したとある。ホロイズミ場所は、トカチのアイヌの人々が漁業の出稼ぎのみならず、入用のときは賃金により雇われていたことが看取される。さらに興味深いのは、但し書きの部分で誤字も見られるものの、ショヤの海上ではトカチのアイヌの人々が漁業を行い、浜辺に寄った産物は、ホロイズミのアイヌの人々が取得するという権利関係であったようである。これが、ショヤを巡るホロイズミとトカチの取り決めの実態と思われる。こうした事情が影響するのか不明だが、その後、嘉永年間には、トカチとホロイズミ両場所とも一場所請負商人である福島屋により経営されることとなる¹²。

次に、幕末のトカチにおける昆布生産の様子を「東蝦夷地場所請より申上」より検討する。この史料は、安政二（一八五五）年に東蝦夷地の場所請負商人たちが、箱館奉行所の求めにより場所の状況を回答したもので、トカチ場所については当時請負人であった福島屋がまとめたものである。

六月土用入ヨリ浜中老円昆布竿卸シ取揚仕八月中迄ニ浜仕舞、大ヨリ秋風裂敷相成
シ□合て無之候時節ニ相成候テ、十月中迄も拾ヒ昆布ト相唱沖ヨリ寄上リ候昆布拾
ヒ上申候、¹³

ここから、六～八月頃という夏に昆布を刈り取る様子と、一〇月頃まで浜辺に打ち上げられた昆布を拾う様子が読みとれる。また他の箇所より、昆布取小家がヲシラヘツ・

ヲナウ(ヲ)ベツ・ルヘシヘツに、それぞれ一・六・六軒あったことも看取される。この地域は、「東蝦夷地各場所様子大概書」に記された昆布産地とほぼ重なる。

続いて、幕末の史料からトカチにおける昆布生産の様子を探りたい。松浦武四郎の日記類には、隣領であるホロイズミ場所のアブラコマ(えりも町東洋)で「是所に番屋一軒、トカチ土人来りて昆布漁をするなり。」とあり、同場所のシヤウヤ(庶野)では「ホロイズミは土人払底に附、トカチ土人多く来りて漁獵をする也」¹⁴と書き記されている。ここで先述した文化期の記述も併せると、ホロイズミ場所へは恒常的にトカチ場所よりアイヌの人々が昆布などの海産物を採りに出稼ぎしていたことの裏付けがとれる。さらに先述した生産量と併せて考えると、ホロイズミでは昆布が沢山採取できるため、トカチから出稼ぎするアイヌの人々が多いと考えるのが自然であろう。さらに、文化期においてもホロイズミ場所へトカチのアイヌの人々が入用の際は、賃銭で雇われていたことも併せて考えると納得できる。

さて、嘉永六(一八五三)年の記録では、「ホロイズミ領シヨアフラコマ両所出稼共、凡浜中昆布三千石目位年柄に寄、両の浪高の節は前見込に取小分りに相成申候¹⁵」とある。これによるとホロイズミへの出稼ぎにより、三、〇〇〇石ほど昆布が採取されていたことがわかる。この数字を時期の近い【表二】のトカチにおける昆布生産量(四、二六六石)と比較すると、なんと七割ほども占めていたことがわかる。この数値は昆布の豊凶を無視した煩雑な比較ではあるものの、数値としてはトカチ昆布にしめるホロイズミ産の昆布の割合は、無視できない数値と言えそうである。

加えて参考として、明治二一(一八八八)年の十勝国での昆布の生産量を示した史料を取りあげておこう。

(広尾、十勝二郡)中略。品位は日高に過ぐ。広尾郡三千八百五十余石^マ、二十一年は四千八百十石余十勝郡は極めて少く二十一年僅かに十石を採取せり¹⁶。

十勝国における昆布の生産地は、近世と同様で南部の広尾周辺で、生産量は四〇五、〇〇〇石程度であったことがわかる。

以上より、具体的な近世トカチにおける昆布生産の様子的一端が明らかとなった。生産地は、十勝南部の広尾周辺であり、漁期は夏期が中心で、秋の寄昆布も集荷していた。また隣領のホロイズミ場所では、昆布が豊富にあるため、アイヌの人々がトカチから出稼ぎしていた。そのためトカチ昆布の中に、ホロイズミ産の昆布が含まれている点を指摘した。また、それはトカチ昆布の中でも数値的に無視できない量を占めていたと見られる。

三、トカチにおける海産物

さて近世トカチでは、どのような海産物が産出されたのであろうか。さらには、トカチで生産された海産物の中で昆布がどのような位置を占めていたのか検討する。広大な海岸線をもつトカチ地方ではあるが、近世の初期段階（一七世紀頃）には、砂金や鷹が主な産物であったと見られ、海産物は確認できない¹⁷。その後、一八世紀前半、「蝦夷商賈聞書」からトカチの産物が充実する様子が看取できる。全文を以下に掲げる。

- 一 トカチト申所蠣崎内蔵乗^{マヤ}亟^{マヤ}殿御預り、出物干鮭名物也、大川ニテ水上広シ、蝦夷大勢、ハシノ羽名物、塩^{マヤ}鰯^{マヤ}沢山、鹿皮・熊皮類沢山ニ出ル、荷積リ五百石位ナレトモ能物出ル所成故運上金高直、年々不同、¹⁸

ここでは、干鮭・ワシ羽・塩鰯・熊皮・鹿皮がトカチの産物としてあげられており、鮭も河川で主に捕獲すると見られるため、海産物とみなされる品目はまだ登場していないことがわかる。ここから一八世紀前半頃までトカチの海産物は、商品化されていないことが見てとれる。その後、事情が大きく変化し、トカチにおける海産物が最初に確認

できるのが、安永末期頃の鮫殻の生産であり¹⁹、天明六（一七八六）年には、昆布と布海苔も加わる²⁰。

一九世紀に入ると（文化期）、先述した「東蝦夷地各場所様子大概書」から、トカチの産物として昆布・布海苔・鰯・鱈・かすべ・カレイなどがあげられ、海産物の品目が充実している様子が確認できる²¹。同じく文化期の史料である「東行漫筆」においても、昆布・布海苔・鰯・鱈・鯨油といった様々な種類の海産物があげられている²²。

続いて、トカチ場所の産物を運搬する船の概要を記した史料²³から、その中で占める昆布の位置づけを検討する。文政一二（一八二九）年におけるトカチ産物の運搬船は、全部で一〇艘ある。その中で昆布を全く運搬していない船は、一艘のみである。産物の品目としては、昆布のほかに、鮭（筋子など含む）・アットウシ・鱈・鱈粕・布海苔・鹿皮・鯨・ブリを運搬している。昆布の商品分類については、大まかに囲昆布（前年収穫の昆布）と新昆布（収穫したばかりの昆布）があり、五、六月の船は囲昆布、それ以降は新昆布を積み込んでいる。トカチ場所における昆布の数値的な位置づけは、代金の総計から比較すると、総計（約一、八二九両）のうち、昆布（約一、三〇五両）と、七〇％以上を占めている。ちなみに次に多いのは、筋子などを含む鮭（約二六七両）で約一五％、粕を含む鱈が約八％と続く。ここから単価の違いを考えなくとも、昆布の比率が極めて高いことが端的に実証できる。

ここで、幕末におけるトカチにおける漁業を中心とした漁労のサイクルを【表三】にまとめておきたい。海産物は、イワシやブリなどの魚類、昆布や布海苔といった海藻類に分けられる。ちなみに、シシヤモの捕獲が史料から見えるが、十勝川の河口付近で捕っているようである。続いて昆布の漁期に注目したい。他の海産物は、早いものなら一週間長くてもひと月半程度で終わるが、昆布については浜辺で採取する期間も入れると半年近くに及ぶ。

ほかに、幕末から明治初年のトカチに関する史料を主に翻刻した『蝦夷の燈』では、昆布をはじめ、秋味鮭・筋子・鰯・鱈・布海苔・シシヤモ（シユシヤム）・キュウリウ

【表三】幕末期トカチの漁労カレンダー

月	上旬	中旬	下旬
1	鹿?		
2			
3	鱈	布海苔	
4			鰯
5	鰯?		
6	昆布		
7			
8	昆布	昆布・鮭	
9	昆布・鮭		
10	昆布		シシヤモ
11	鹿		
12			

「東蝦夷地場所請より申上」安政二（1855）年（北海道大学
付属図書館北方資料室所蔵、旧記0504～0505）より作成

オ（フラルイ）・コマイ粕・カスベ・魚油・鯨油・鮫油などが登場する^{2,4}。その中に、アイヌの人々への賃金が記載された史料^{2,5}が見られる。アイヌの人々へ春漁業中は四貫五〇〇文、夏昆布漁中は五貫文、秋味鮭漁中は二貫五〇〇文と時期を分けて給金が決められていた。単純に比較すると、最も賃金が高いのは、夏の昆布漁である。先述したように、昆布の漁期の長さに由来する可能性もあると見られるが、他の漁業と比すれば、

給金が高いということは注目に値する。

以上をまとめると、トカチにおける海産物の生産は、一八世紀後半の安永～天明期頃より始まり、幕末にかけて品目が充実する様子が史料からうかがえる。なかでも昆布は、トカチの産物に言及した史料、あるいはトカチを訪問した人々の日記などにおいて、ほぼ例外なく書き記されており、漁期も他の海産物と比較すると長期に及ぶ点や、給金が最も高い点のみならず、トカチ産物の積荷に占める割合から、近世トカチを代表する海産物であったと位置づけられる。

おわりに

トカチ昆布は、松前・蝦夷地の昆布総生産量に占める割合の高い地域にあたり、長崎からの輸出品の主力となった三石昆布の生産地の一角も占めていた。その生産地は、トカチ場所の中でも南部のヒロオ周辺に限られるものの、隣領のホロイズミ場所の昆布が潤沢なため、一九世紀初頭までにはトカチからアイヌの人たちが恒常的に昆布を採取しに出稼ぎしていた。つまり、トカチ昆布という商品の内実は、ホロイズミ産の昆布の一部も含めたもので、その割合は比較的高い可能性を指摘した。この点は、他「場所」でも行われたアイヌの人たちの出稼ぎ慣習²⁶との比較検討を行い位置づける必要があるだろう。

トカチの海産物が本格的に商品となり本州以南に流通するのは、一八世紀後半（とりわけ天明期頃）を大きな画期としている。それは、松前・蝦夷地全体の海産物が大きく商品として注目されはじめていることにも繋がるのではないかと考えられる。トカチにおいて昆布は、他の海産物と比較すると、漁期が長く様々な史料から生産が盛んな様子がうかがえる。よって、近世トカチを代表する海産物として位置づけられる。生産量の多さが一つの特質ともいえる昆布は、生産地における地域社会の中でも「量的な存在感」があると位置づけられる。

(1) 近世における昆布の流通過程を大きく取りあげた研究としては、羽原又吉『支那輸出日本昆布業資本主義史』（有斐閣、一九三五年）、稲垣美三雄『日本昆布大観』（正進堂、一九四七年）、白山友正「松前蝦夷地における長崎俵物の研究」（『北海道経済史研究所研究叢書』二九、一九六二年）、同「続松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」（『北海道経済史研究所研究叢書』三七、一九六四年）、大石圭一『昆布の道』（第一書房、一九八七年）、編著／発行田澤伸雄『北海道昆布漁業史』（一九九〇年）二九～三四頁、深井甚三『近世日本海運史の研究―北前船と抜荷―』（東京堂出版、二〇〇九年）、田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』（清文堂出版、二〇一四年）などがある。

(2) 特に断わりのない場合は、史料中に戸勝・十勝などと記述されていても「トカチ」と表記し、ビタタヌンケから直別までのトカチ場所の範囲内を指すこととする。

(3) 十勝産の昆布は、史料中の標記でもある「トカチ昆布」で統一する。

※「売上昆布納方帳」天保一四（一八四三）年（函館市中央図書館所蔵、福島屋文書、資料番号一八一〇六四六六二八）参照。

(4) 校注 石川松太郎『庭訓往来』一四（平凡社、一九七三年）一二〇頁。

(5) 「蝦夷商賈聞書」元文四（一七三九）年頃（『松前町史』史料編・第三卷、一九七九年）。

(6) 本稿第七章参照。

(7) 右同上。

(8) 『北海道漁業志稿』（北水協会編、一九三〇年）三五六～三五七頁。

(9) 『北海道漁業史』（北海道水産部漁業調整課、一九五七年）一五四頁。

(10) 「東蝦夷地各場所様子大概書」文化五（一八〇八）年（『新北海道史』第七卷・史料一、一九六九年）五六九頁。

※なお、本稿に関連しないとみられる部分は割愛した。

(11) 「シヨウヤ浜其他」文化一一（一八一四）年（函館市中央図書館所蔵、福島屋文書、資料番号一八一〇六四六六三六）より抜粋。

- (12) 『新広尾町史』第一巻、一九七八年、一八七～一九二頁。
- (13) 「東蝦夷地場所請より申上」安政二(一八五五)年(北海道大学付属図書館北方資料室所蔵、旧記〇五〇四～〇五〇五)。
- (14) 松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』下巻(北海道出版企画センター、一九八五年)二〇〇頁。
- (15) 和泉無人閑編『蝦夷の燈』(私家版、一九三〇年)一九頁。
- (16) 前掲注(八)書、三七九頁。
- (17) 鷹については、「津軽一統志」(『新北海道史』第七巻・史料一、一九六九年)一六六頁。砂金については、松前広長『福山秘府』安永九(一七八〇)年、活字翻刻本(編集・発行 市立函館図書館)一六頁。
- (18) 前掲注(五)史料。
- (19) 「松前随商録」天明四(一七八四)年頃成立(函館市中央図書館所蔵、資料番号一八一〇四二八四二)。
- (20) 最上徳内「蝦夷草紙 別録」天明六(一七八六)年、所収「三、蝦夷地交易直段付帳」(『松前町史』史料編・第三巻、一九七九年)三〇～三二頁。
- (21) 前掲注(二〇)史料。
- (22) 荒井保恵「東行漫筆」文化六(一八〇九)年(『北方史史料集成』第一巻、北海道出版企画センター、一九九一年)九六～一六頁。
- (23) 「文政十二己丑年 戸勝御場所出荷物売仕切」文政一二(一八二九)年(函館市中央図書館所蔵、福島屋文書、資料番号一八一〇四六六七四六)。
- (24) 前掲注(二五)書。
- (25) 右同上。
- (26) 例えば、田島佳也「場所請負制後期のアイヌの漁業とその特質―西蝦夷地余市場所の場合」(田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館、一九九五年)、後に

『近世北海道漁業と海産物流通』（清文堂出版、二〇一四年再収）。

※ヨイチアイヌによるフルウ場所やマシケ場所への追鮑漁（出稼漁）もとりあげている。

第五章 ラッコ皮の集荷

はじめに

本章では、一八世紀後半における蝦夷地で生産されるラッコ皮（海獣ラッコの毛皮）の流通商品としての特徴を整理し、とりわけ長崎向けとなる商品の集荷の実態を明らかにしたい。

先行研究¹によると、近世にラッコ皮は、主に千島列島からアリューシャン方面が主要な産地で、保温性・毛並みの美しさによって非常に高価な最高級の毛皮とされていたようである。そのため、上流階級の人々にのみ受容される商品であり、それに起因するのか、表向きは民間での流通が許されておらず、アイヌの人々から独占的に松前藩が集める建前であったという。また一方では、長崎から中国への輸出品という側面もある。

ここでは、さしあたりラッコ皮の松前における集荷過程に着目し、その調達方法から、どのように長崎へ廻漕されていたのか、さらには蝦夷地産物である他の獣皮類との比較を通して、史料は少ないものの、松前における流通商品としての特性を整理する。加えて、松前・蝦夷地において生産される輸出品の中におけるラッコ皮の位置づけも検討する。

なお、一八世紀後半を扱う理由は、長崎貿易における輸出品の集荷主体が、幕府から集荷を委託された商人団である長崎倭物一手請方問屋（以下、請方問屋と表記）から、幕府の下部組織である長崎会所へと変わるという画期であるためである。中でも、その画期がラッコ皮の集荷方法に与えた影響に注目しながら、他の輸出品との性格の違いを明らかにする。

一、ラッコ皮の商品としての特徴

最初に、一八世紀後半におけるラッコ皮の集荷を検討するにあたり、流通商品としての特徴など基本的な性格の整理から行いたい。ラッコは、天明五・六（一七八五・六）年の幕府の蝦夷地調査に加わった最上徳内は以下のように書き記している。

首より手は猫の如し。足は無く鰭ありてオツトセイに似たり。仰ぎて食物を喰ふなり。ウルツプ嶋、マカナルル嶋より出る。²

ここからラッコの特徴について、見た目は首から手にかけて猫のようで足はないが鰭があり、水に浮かんで仰向けで食事し、生息地は千島列島であるとされている。次に、ラッコ皮の流通商品としての特徴を詳らかに記した、平秩東作の「東遊記」を掲出する。

獵虎は海獣なり。皮は献上になる。至て高価のものなり。蝦夷地東の方にラツコ嶋として大きな嶋あり。蝦夷人は渡りて捕る。町売は制禁なれども、城下の商人へ手を廻して調る時は、何程もかはるるといふ。近年異国より赤人といふもの此嶋にわたり、ラツコを捕る故、少くなりたりといひふらす。実は左にあらず、彼場所請負の町人より此方へ買とり、大坂へ廻すゆへなり。か様の直段高きものを軽物と唱へ、領主へ買上るの外、他にて売買する事国禁なりといふ。然れども家中の士又は町人の手よりぬけ荷物ありて、城下商人の蔵にはあり。されども役人より咎る事もせず。領主入用の時は商人手前より買上るるともいへり。政寛に過たるともいふべきにや。³

右史料より、ラッコ皮の商品としての性格をまとめると、以下のようになる。

- ・非常に高価な商品で、幕府献上ともなる。
- ・生息地は、ラッコ島（ウルツプ島を指すことが多い）である。

- ・近年、場所請負人が大々的に集荷して大坂へ売るため、生産量が減少している。
- ・松前藩による専売品で、非常に高価な「軽物」であるが、実態は場所請負人が買い集めて、売買をとりしきる商品である。

この中でラッコ皮の流通システムを考える上で重要な指摘は、本来松前藩の専売品であるものの、場所請負人が実質集荷をとりしきっていたという点である。さらに、その実態を裏付ける史料をとりあげる。

右（真羽・青玉・錦の類）の外、狢虎皮・熊胆・膾肭の類も軽物と唱、右同様の取計に御座候処、過半は場所請の者共内々にて直に他国え売出、志摩守方（松前藩主）え差出候は少分の儀と相聞申候、⁴

ここから、やはり場所請負人が主体的にラッコ皮の流通に関与する様子が看取される。この頃のラッコ皮も含めた、いわゆる「軽物」の実態は、松前藩主の専売品とはいっても、基本的には場所請負人の取り扱い商品であつたともいえる。つまり、本来藩主の専売品としての「軽物」という商品の性格が変容していたとも捉えられる。これは、当時期の松前藩と場所請負人との関係性を考える上でも大変興味深い論点であろう。加えて、この時期の「軽物」の種類をあげた史料を参考として挙げておきたい。

一、軽物トいつる惣して蕃国の方より渡りたる錦・青玉の類、又惣て蝦夷の産物、熊皮・熊胆・ラツコ・アザラシ・ラツトセイ・鷺の羽の類、惣してかるものト

言、⁵

「軽物」の定義や意義について、ここで深く掘り下げることは行わないが、一八世紀後半には、大きく蕃国からくるもの（山丹交易品）と、蝦夷地の産物という二つの区分

【表一】天明六年の獣皮価格（一枚あたり）

ラッコ皮				
代わり物	上品	中品	下品	備考
米（俵）	60	45	30	8升入1升到付銭68文5分
糶（俵）	6	4	3	8升入1升到付銭56文5分
酒（樽）	2	2	1	5升入1升到付銭160文
たばこ（把）	2	4	3	1把に付48文
きせる（本）	2	2	2	1本に付75文
価格（銭）	37貫294文	27貫818文	18貫746文	
アザラシ皮				
代わり物	上品	中品	下品	備考
たばこ（把）	1	1		1把に付48文
まきり（丁）	1		2	1丁に付25文
価格（銭）	73文	48文	50文	
熊皮				
代わり物	上品	中品	下品	備考
たばこ（把）	2	1	1	1把に付48文
きせる（丁）	1	1		1本に付75文
まきり（丁）			1	1丁に付25文
価格（銭）	171文	123文	73文	
鹿皮				
代わり物	価格（銭）		場所	
米1升5合かたばこ2把	102文7分5厘		アッケシ・クナシリ・キイタツフ	
1俵につき6枚（8升入り俵）	91文6分6厘（一枚あたり）		トカチ場所のうちヒロウのみ	

「蝦夷草紙 別録」所収「三、蝦夷地交易直段付帳」（『松前町史』史料編・第3巻、1979年）より作成

※鹿皮以外は、アッケシ・クナシリ・キイタツフ場所における凡その見積平均値段。

※鹿皮については、上中下品の区別なし。

※「まきり」とは小刀を指す。

によってなされていたことが端的に読みとれる好史料である。このうち、ラッコに関しては、蝦夷地の産物に区分されている。

続いて、ラッコ皮と他の獣皮類（一枚当り）との価格を比較し、非常に高価であるという言説の根拠を具体的数値でみてみよう【表一】。これは、主に東蝦夷地のアッケシ・クナシリ・キイタツフの各場所における交易時の価格である。ラッコ皮は、アッケシ（厚岸）やクナシリ（国後）などメナシ地方（奥蝦夷地）のアイヌの人々が、千島列島へ出猟して、松前に流す商品である⁶。あくまでも、ラッコを狩猟したのはアイヌの人々であり、彼らは、和人と物々交換を行って商品を手に入っていた。そのため、各獣皮の価格は、具体的な代物で書き記されているものの、銭換算により比較は容易である。

ラッコ皮と同様海獣皮であるアザラシ皮との、価格差は約四〇六〇〇倍（ラッコ皮上品から中品と比較）で、陸獣の熊皮とは、約二二五〇倍（上品から下品）、さらに鹿皮とは、約四〇〇倍（上品）であった。ラッコ皮は、陸海獣問わず、どの獣皮とも価格面においては、全くもって比較にならないほど高価な商品であったことが一目瞭然である。以上、一八世紀後半における、ラッコ皮の松前・蝦夷地における流通商品としての特徴を整理した。

二、長崎貿易向けのラッコ皮

一で考察したようにラッコ皮は、場所請負人によって大坂に廻漕されるものも存在したようであり、主要な流通経路であった可能性が高い。しかし他方では、長崎へ廻漕され、輸出商品として利用されるという側面も存在する。

一、獺虎皮之儀者、追々買入之手配致見候哉、凡年分何程之出方ニ有之品々ニ候哉、直段合等之儀茂可申上、右之外蝦夷地出候皮類御代り物ニ茂、可相成品とも心得見可申、是迄見当り候品者無之候哉之儀被（欠）仰渡候、

此儀獵虎皮之儀者、表立売買不相成儀ニ而、買方手配之儀も表立取計候儀出来不仕候、就右是迄之分茂私共買方不仕、同所支配問屋共より相集差送申候を唐方江、相渡申候儀ニ御座候、右之通表立売買不相成品ニ付、年分集り高之積り合者難相成御座候、年ニ寄り而者、四拾枚宛相集り候儀茂有之、又一向無之儀も御座候由、且又直段之儀も、品合ニ寄至而不同有之、五両より拾五両位迄ニ買集候由ニ御座候、且又獵虎皮之外蝦夷地出產之皮あさらしと申候皮有之候、是者前方唐人江見候得共相好不申候、右之外蝦夷地出產之皮類御代り物ニ可相成品無御座候、⁷

右の史料は、天明四（一七八四）年に、当時輸出商品の集荷を幕府から独占的に請け負っていた請方問屋が、ラッコ皮を含めた輸出商品の集荷実態を調査した報告書から抜き出したものである。要点をまとめると、ラッコ皮は、表立って売買がされない商品（松前藩の専売品）であった。しかしながら、一で考察したように内実は、商人が主体的に集荷した商品である。またラッコ皮は、年によつて集荷量に相当の差がある。具体的には、全く集荷のない年から四〇枚程集荷される年までである。他に興味深いのは、蝦夷地産のアザラシ皮（毛皮）を中国人へ売り渡していた形跡が見られる点である。それは、中国人に不評であつたとも書き記されている。ここから、どのような商品が輸出商品として好まれるのか様々試していた形跡が見られる。加えて、この後ラッコ皮は、様々な蝦夷地産の商品である毛皮類の中で唯一の長崎向けの商品となつていたことも指摘しておきたい。

一、獵虎皮之儀、元請負人取計中者、下代茂兵衛与申もの松前ニおいて、役人中江相願買請来候由、去ル巳年御直仕入ニ相成候節、御普請役様より役人中江、御懸合ニ相成、上中之品合押平均金百両ニ付、拾五枚替之積ニ而、買入候極ニ御座候、⁸

右は先述の史料より五年後である、寛政元（一七八九）年のラッコ皮の集荷について書き上げられたものである。整理すると、ラッコ皮に関して、元請負人（請方問屋）が集荷をしていた時代は、長崎から松前に派遣された元請負人の下代の茂兵衛なる人物により、松前藩の役人へ働きかけ買い請けていた。しかし、天明五年の幕府による直仕入後は、長崎会所の役人から直接松前藩の役人へ働きかけ、商品の等級は一応加味するものの、金百両でラッコ皮一五枚という割合で買い入れることに変更された。

ここで、天明五年の直仕入に際して、ラッコ皮の集荷システムに大きな変化があったことが看取される。つまりラッコ皮は、定額で集荷されるシステムになったのである。またラッコ皮の集荷は、松前藩の役人を介して商品入手するシステムであった。

さらに指摘できるのは、松前・蝦夷地産の煎海鼠や干鮑、昆布といった他の輸出商品との集荷システムの大きな違いである。つまり、他の輸出商品の集荷は、現地で集荷を委託されていた松前・江差・箱館にある俵物集荷問屋が主体で行われた。それに対し、ラッコ皮は、松前藩の役人に働きかけ、集荷をするという集荷システムなのである。これは、ラッコ皮について、松前藩主の専売品であることが大きく作用するのであろう。さてラッコ皮は、一八世紀後半、長崎から中国へはどれほどの量が輸出されていたのであろうか¹⁾。結論から述べると、ラッコ皮（カワウソ皮も含む）の輸出枚数は、年により相当な差があったようである【表二】。

表によると、前出史料の裏付けが可能である。宝暦期には枚数は不明であるものの、確かにアザラシ皮が輸出されていた。その後、ラッコ皮（カワウソ皮も含む）が中国人へ売り渡されていた¹⁾。輸出枚数は、天明四年まで〇〇四〇枚程度であるが、天明五年を挟んで急増する。これより、ラッコ皮（カワウソ皮も含む）の輸出枚数は直仕入が開始されて、定額買入が開始されたことにより急増したことが明白である。また、それが集荷強化を如実に表すものと捉える。加えて、集荷枚数が増えたために、レートが設定されたとも見てとれる。さらにラッコ皮を売る際の利益率を明らかにしたい。しかし、長崎から中国人へ

【表二】ラッコ/カワウソ・アザラシ皮の輸出量

年代	品目名	輸出枚数
宝暦11(1761)	アザラシ皮	不明
宝暦13(1763)	ラッコ・カワウソ皮	12
明和1(1764)		44
明和2(1765)		10
安永4(1775)		5
天明5(1785)		110
天明7(1787)		70
天明8(1788)		82
寛政2(1790)		239
寛政3(1791)		685
寛政5(1793)		228
寛政6(1794)		38
寛政7(1795)		10
寛政8(1796)		1,420
寛政10(1798)		20
寛政11(1799)		240

永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧1637～1833』（創文社、1987年）より作成

※18世紀分のみ抽出。

の売り渡し価格は、「品合ニ応シ直段有之^{1,2}」として不明であった。ただ、寛政八年のようにカワウソ皮を含むにしても一、四〇〇枚という数字はいささか多すぎるようにも見受けられる。そのため、ここでは数字の正確性は問わないことにし、集荷数が大きく増えたことのみ指摘としておきたい。

おわりに

まず、改めて本章の論点を整理おきたい。一八世紀の商品としてのラッコ皮は、いわゆる「軽物」といわれる松前藩の専売品の一つではあるものの、実態は場所請負商人が集荷全般を取りしきっていたようである。その集荷方法は、ラッコ皮が「軽物」と呼ばれる松前藩の専売品（実態は、場所請負人が主体的に集荷したと見られる）で、非常に高価な商品であったことに大きく規定されていた。

輸出商品としてのラッコ皮の集荷は、遅くとも一八世紀前半には始まっていたようである。当初ラッコ皮の集荷は、年によって全くない年から四〇枚程までされる年と格差があった。ところが、天明五年の長崎会所による直仕入に際して、定額で買い入れるシステム（金一〇〇両Ⅱラッコ皮一五枚）になると輸出量が顕著に増える。これにより、ラッコ皮の集荷は大きく強化されたことが見てとれる。さらに、松前藩の役人を介する商品の入手ルートに、俵物・昆布とは異なる集荷システムの特徴をも見出した。ここから、長崎では輸出商品の特性に応じた集荷システムを構築していたことが見受けられる。加えて一八世紀後半（とりわけ明和・寛政期頃）には、史料上では、蝦夷地産の数ある動物の毛皮類の中で唯一の長崎向け商品となる。

近世におけるラッコ皮の集荷に関する史料は、非常に乏しく課題も多く残されている。とりわけ、どのようにラッコを狩猟し、毛皮を製造していたのかという生産過程については、ほとんど未解明なままである。この点は、ラッコ皮という流通商品を追う際の重大な今後の課題であろう。加えて、ラッコを含む「軽物」と呼ばれる、特殊な商品の定義や時

期的な集荷実態の変遷を追うことも必要な作業と言えそうである。特にラッコとの混同が見られると思われるカワウソ皮の流通実態を追うことはラッコ皮の流通を探る上でも大変有用であると考えられる。

(1) 北構保男「海獣捕獲文化とラッコ」・「ラッコ(独虎)覚書」(『北海道考古学』一六・一七、一九八〇・八一年)、児島恭子「ラッコ皮と蝦夷錦の道」(『歴史の道・再発見 第一巻・平泉からロシア正教まで』フォーラム・A、一九九四年)、同「北方交易とラッコ」(『白い国の詩』五一六、一九九九年)、後に榎森進編『アイヌの歴史と文化Ⅰ』(創童社、二〇〇三年再収)、高橋周「近世日本のラッコ皮輸出をめぐる国際競争」(川勝平太編『アジア太平洋経済圏史二五〇〇〜二〇〇〇』藤原書店、二〇〇三年所収)、三浦泰之「近世中期における蝦夷錦とラッコ皮の流通をめぐる一史料―一七五〇年代までの『弘前藩御国日記』の事例から―」(北海道開拓記念館編『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史―北方文化共同研究報告―』、二〇一〇年)、川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』(北海道出版企画センター、二〇一一年)などがあげられる。

(2) 最上徳内「蝦夷国風俗人情之沙汰」寛政二(一七九〇)年(高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第四巻 探検・紀行・地誌(北辺篇)、三一書房、一九六九年所収)四六三頁。

(3) 平秩東作「東遊記」天明三(一七八三)年(高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第四巻 探検・紀行・地誌(北辺篇)、三一書房、一九六九年所収)四三〇頁。

(4) 「蝦夷地一件」天明六(一七八六)年(『新北海道史』第七巻・史料一、一九六九年所収)三三七頁。

※史料中の括弧○は、筆者がつけたもので、真羽・青玉・蝦夷錦は、山丹交易(カラフト経由)で到来した商品との記載がある。

(5) 「松前随商録」天明四(一七八四)年頃成立(函館市中央図書館所蔵、写本、所蔵番号一八一〇四二八一四二)。

(6) 前掲注(一) 児島一九九四書。

(7) 「長崎元俵物請方雑書」所収「松前取計方之儀御尋之趣御答書」天明四(一七八四)

年（長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号六六〇―一二一）。

（⁸）「去ル巳年御直仕入被仰出候候以来松前三ヶ所俵物昆布稼方之儀御取調子ニ相成候一件」寛政元年（二七八九）（大村市立史料館所蔵、初村家（旧峰家）史料、請求番号一三―一二一）。

（⁹）本稿第一章参照。

（¹⁰）【表二】は、輸出されたラッコ皮の全体像を掲示していないと思われる。それは、一八世紀前半には、すでに中国へラッコ皮が輸出されていた形跡があるためである。※正徳元（一七一）年に、ラッコ皮四件（一件あたりの取引量は不明）の貿易が行われていたことを記載。（山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、一九六四年）一二三頁。

※寺島良安「和漢三才図会（二）」正徳二（一七一二）年『日本庶民生活史料集成』第二八巻、三一書房、一九八〇年）五四五頁では、正徳期頃ラッコ皮が唐人の手に渡っていたことが以下のように書き記されている。

獐虎は蝦夷が島の東北の海中に島有り、獐虎島と名づく。此の物多く之れに有り。（中略）其の美之れに比する者無し。価格も貴重なり。其の全体生きたる者を見る人無し。皮の形を以つて之れを察するのみ。其の皮長崎に送りて、中華の人争ひ求む

（¹¹）ラッコ皮は、カワウソ皮と混同があつたのではないかという指摘がある。（前掲注（二）児島一九九九論文）、川上淳「拙稿「文化年間のラショウ島アイヌ交易と鉄鍋・ラッコ皮」『根室市博物館開設準備室紀要だより』一一、一九九七年」の誤りについて」（『根室市博物館開設準備室紀要だより』一五、二〇〇〇年）。

※今後、一八世紀後半以降の蝦夷地におけるカワウソ皮の流通実態を明らかにし、再検討する必要がある。なお表二では、ラッコ皮とカワウソ皮の両方を併記した。

（¹²）「長崎雑誌 俵物諸色唐人買渡値段ほか 写本」（長崎歴史文化博物館所蔵、請

求番号福田文庫十九―五〇。

第六章 南部藩における長崎向け昆布の集荷

はじめに

本章の主たる目的は、長崎貿易における南部昆布の歴史的意義を、その具体的な集荷過程の検討を通じ明らかにすることである。

最初に、近世における流通商品としての昆布に関する研究¹を整理すると、大まかに二つの特徴が見いだせる。一つは国内へ流通する商品としての側面に着目した点であり、松前・蝦夷地で産出される昆布は、一八世紀中頃以前、日本海航路を利用し越前敦賀・若狭小浜から京都へ送られたことが知られている。一八世紀後半頃より大坂への直接輸送が主体となり、鯨・鮭と並び蝦夷三品と呼ばれる。それは食品としてのみならず、儀礼用品としても利用され、近世後期には和風文化になくはならない商品へと成長する。

もう一つは、輸出海産物という側面に注目した点である。昆布は、幕府直轄地長崎において行われた唐人貿易における輸出商品であるが、当初はそれまで主力であった金属類の国内鉱山からの枯渇による代替品として登場する。その後、「諸色」の一つとなり俵物と共に再生産可能な輸出品として重視される。後述するが、昆布は他の輸出海産物と比べ格段に産出高の多い商品であり、俵物と比べると生産地が限定され、幕府による強制集荷の程度が低いという特質がある。そのため中国に朝貢する琉球を支配する薩摩藩は、一八世紀後期までに昆布を購入し唐人へ販売することで利益を得て、幕末の雄藩になったといわれる。

このように昆布は、近世の国内市場や対外貿易に対し、多大な影響を与えた商品であり、流通経済の観点から、その特徴を明らかにすることは重要な意味を持つ。しかし、これまでの昆布流通に関する研究では、松前・蝦夷地の事例がほとんどであり、他の生産地を含めた流通の全体像を構築できるには至っていない。また輸出海産物の中では、幕府による貿易・流通統制の視点から俵物が注目され、長崎貿易の中における生産・集

荷仕法の解明に力点が置かれた²。その中で昆布は統制の程度が低く、生産地も限定的であることから、主体的に取りあげられてこなかった。ところが昆布は、唐人貿易に使用される輸出海産物の中で量的に他の商品をはるかに凌駕し³、売った際の利潤も俵物類よりはるかに多い⁴ことは全くもって看過できない。

これらを踏まえ本稿では、松前・蝦夷地と並び一大産地であった南部藩領に焦点をあて、長崎向け昆布の集荷過程をより具体的に描きたい。その中で、同じく長崎向け昆布を生産する松前・蝦夷地及び津軽との比較検討を行い、南部昆布の長崎貿易において占めた意義を検討する。

なお、一八世紀後半（特に天明～寛政期）を扱う理由は、長崎貿易において俵物諸色の集荷主体が、幕府に集荷を委託された商人団の請方問屋から、幕府の下部組織である長崎会所への変容が、昆布の集荷仕法に与えた影響を加味するためである。

一、南部昆布の生産

まず、一八世紀後半の南部藩における俵物・昆布の集荷体制について、先行研究⁵を参照しながらまとめる。請方問屋による集荷がされていた明和期（一七六四～一七七二）頃は、大きく二つに集荷拠点が分かれていたとみられる。久慈以南の俵物（昆布は見られない）は、吉里吉里村の前川善兵衛家が集荷して江戸などへ送り、久慈以北の俵物は、各地に集荷問屋が存在したものの、田名部の山理家を取りまとめて長崎へ出荷した。安永九（一七八〇）年に前川家が没落した後は、山理家が南部藩全体の俵物を取りまとめた。ところが天明元（一七八一）年に、南部藩の要請により、昆布は干鮑と共に長崎貿易の統制品から外される。この頃の請方問屋による集荷体制からの離脱の動きは、先学では南部藩と仙台藩に見られる地域的な事情で、南部藩は藩による利潤追求のために、請方問屋の資金繰りの弱体化に乗じて講じた策とされている。それからわずか四年後の天明五年には、長崎会所による直買入を迎える。そこで、再び山理家が会所の下請とし

て俵物と昆布を集荷し長崎へ出荷するようになる。

天明く寛政期頃に長崎向け南部昆布は、領内のどの地域で生産されたのか。天明四年の史料では「南部昆布之儀者、泊り浦より大間浦迄出来立候」⁶とあることから、南部領七戸通⁷の泊村から田名部通大間村（下北半島太平洋側）が生産地であったことが読みとれる。さらに、天明五年の直仕入後である寛政元（一七八九）年⁸においても生産量に変化が見られないことから、下北産の昆布が使用されたものと思われる。ところが昆布生産そのものは、領内南方にある三陸の久慈や釜石周辺でも行われた⁹。

では三陸の昆布は、長崎向けには使用されないのだろうか。安永期頃に三陸の俵物集荷を担当した前川善兵衛に関する先学では、昆布を集荷する様子はまったく見られない¹⁰。他にも同じく領内で生産された煎海鼠や干鮑（俵物）は、三陸の俵物集荷問屋である宮古俵物集荷問屋から田名部へ送られているのに対し、昆布は田名部の集荷問屋山本理左衛門家（以下、山理家）のみの集荷で賄われている¹¹。具体的には後述するが、長崎へ廻漕される昆布は、下北産昆布のみでほとんど調達可能であることが理由として考えられる。少なくとも田名部のみが南部領における長崎への俵物や昆布の出荷地とされた頃は、生産量も比較的多い下北のみで南部領における長崎向け昆布は賄われたと見られる。

次に、下北での昆布の生産実態を村々の様子から探る。

関根村

（中略）

土用中至八月中取昆布。漁民万戸也。日夜数千艘。是云外浜昆布。田名部町・大平村・田屋村・目名・岩屋・尻屋・正津川・大畑・下風呂之数村邑人。引移家于正津川関根浜。来而取出昆布七八千石。或一万石余。売渡于長州。人民以收諸税矣。¹²

この史料は、安永期（一七七二く一七八一）に南部藩士の大巻秀詮により編まれ、南

部領の地誌について詳細に記録されたものである。ここから、下北半島太平洋側の中程に位置する関根村における昆布の生産は、多少誇張表現ともとれるものの漁船数千艘で夏を中心に行われていた。収穫は、田名部など下北半島の広範囲から人々が移り住んで行われた。当時、外浜昆布¹³と呼ばれた昆布の生産高は、七、〇〇〇石から一万石程で長州（下関か）にて売られたとある。下関は、北国の俵物や昆布の集荷拠点¹⁴にあたる。

また、寛政五（一七九三）年冬には、国学者・旅行家の菅江真澄が次のように記している。

関根野を過れば、はまみちあるに、ゑびすめ刈るいとなみに、ささやかなりやを磯辺にひしひしとたてならびたるは、松前に見たる紫苔、梭津部におなじ。

けふは海あれにあらてかるてふわざこそあらね、波に根こじてうつあぐる海帯を浪かい分て拾い、馬うしに附てもてはこぶは、みちもさりあへず曳たり。¹⁵

真澄は、下北の関根村を越えたあたりで、主に秋冬浜辺に流れついた昆布を採る「寄昆布」を目撃する。それらが大量に牛馬で運搬される様子も読みとれ、中でも興味深いのは、津軽海峡を挟んだ対岸部分にあたる、前に訪れた松前の昆布生産地である志苔・尾札部の景色と重ねているくだりである。それぞれの地域を比較して、真澄が類似した文化を持った地域として認識したと捉えられる。いずれにせよ、昆布生産は下北の漁村における地域社会の中で、大きな生業として存在していたことがわかる。

続いて、全国的な昆布の生産高に占める南部昆布のシェアを量的に位置づけたい。下北産の南部昆布の生産高は、天明四（一七八四）年に「南部大漁年壱万石より小漁事貳千石程迄品々増減有之候」¹⁶、天明五年の直仕入後である寛政元年は「一、昆布之儀者大漁之年者壱万石、小漁之年者貳千石程も出来立候」¹⁷（天明四年〜寛政元年の平均生産高六、〇〇〇石）とある。また、前出した安永期の「邦内郷村誌」によると下北の生

産高は、七、〇〇〇石から一万石（平均生産高八、五〇〇石）とされる。それぞれを単純に比較して平均すると（安永期平均Ⅱ八、五〇〇石、天明四く寛政元年平均Ⅱ六、〇〇〇石）、一八世紀後半における長崎向けの南部昆布の生産高は、年間約七、〇〇〇石である。

一方、同じく長崎向け昆布を生産する松前・蝦夷地と津軽の生産高は、前者（以下、松前昆布）が、天明四年に「凡蝦夷地松前地内之分二而、大漁之年五万石程より小漁之年式万五千石程迄之出方ニ御座候」¹⁸とあり、後者（以下、津軽昆布）が、同年「大漁年津軽五千石程より小漁之年千五百石程迄」¹⁹であった。さらに寛政元年「津軽昆布之儀大漁之年者五千石程、小漁之年者千五百石程茂出来立」²⁰とある。年による生産高に差はあるものの、おおむね松前は二万五、〇〇〇石から五万石、津軽は一、五〇〇石から五、〇〇〇石で推移したようである。

以上から、昆布を生産する北奥の三藩（松前・南部・津軽）を比較する。どこも豊凶の差が相当量あるため単純な比較は出来ないものの、天明から寛政期頃の最も多い生産高を比べてみよう。松前・南部・津軽のそれぞれの生産高を石数で比較すると、五万・一万・五、〇〇〇（それぞれ石数）となり、比率に直すと一〇…二…一となる。よって南部昆布は、全国的な昆布の生産高の約一五%を占めていたことが確認できる。また津軽昆布も含めて計算すると、二〇%強となる。つまり、最低でも全国的な昆布生産量の四分の一程度は、本州産の昆布（以下、本州昆布）で占められた。「最低」としたのは、他の地域でも昆布の生産が確認できるためである。具体的な量こそ不明であるものの、先述した三陸地方の南部昆布と、仙台藩領でも昆布の生産が確認でき、本州昆布の総量が若干増える可能性がある²¹。

これまでの研究は先述したように、とかく松前・蝦夷地産の昆布に偏りがちであったが、本州昆布²²が量的に無視できない存在であることは疑いの余地がなからう。中でも南部領は、「本州昆布」の最有力生産地であったと見られる。

二、南部昆布の集荷

請方問屋による長崎向け南部昆布は、集荷するにあたり次のように商品分類されていた。

南部之儀者、上品を外浜長折、中品を外浜短折、下品を棒・早前と両品二名目相立、右之通品々名目有之候、右南部昆布之儀者泊り浦より大間浦迄出来立候内、入口浦より正津川迄之間生立候昆布宜候故、此所土用より中秋迄出来候を外浜長折、短折二相仕立申候、右外浜長折・短折・棒昆布者土用入より中秋迄苅取申候、早前者春中より土用前迄取揚候分を早前と名附申候、秋冬ニ掛ケ風波強候節、右泊り浦より大間迄之間ニ寄り昆布有之、此分者不残棒早前両品ニ相仕立申候、²³

南部昆布は刈り取り時期などから、外浜長折（上品）・外浜短折（中品）・棒と早前（下品）という四種類に分けられる。特に良質な昆布の生産は正津川村近辺で、夏期が最盛期とみられるものの、年中収穫することが可能である。

続けて【表一】から、田名部における長崎向け南部昆布の集荷に必要な仕入量や諸費用等を考察する。費用は全て請方問屋が支払うものである。まず南部昆布の集荷全体にかかる費用は二種類で、藩へ納める間尺御役と呼ばれる荷物積載税と、大平船問屋の大坂屋へ支払う大儀料（手数料）がある。大平は田名部の外港にあたり、長崎行きの船もここから出帆するため、積荷の保管や積載船との手続きの名目で、大坂屋には大儀料が別途支払われる。続けて、各商品（外浜長折・外浜短折・棒・早前昆布）にかかる費用と、それぞれの買値が判明する。大坂屋に支払われる川下賃（運送費）、山理家へ支払う蔵敷（荷物の保管費用）などがある。さらに内実は不明であるが、藩へ収める費用と思われる「新御役」、田名部市中へ納める「町之内」もある。加えて外浜長折・短折にのみ、仲買へ支払う買場掛り（手数料）が存在した。「上品」・「中品」であるこれらの

【表一】天明四年南部昆布の各商品の仕入量と諸費用(1,000石あたり)

	外浜長折昆布	外浜短折昆布	棒昆布	早前昆布	合計	備考
目方(貫)	12,000貫目	24,000貫目	2,000貫目	2,000貫目	40,000貫目	
把数(把)	※13,330把	※52,170把	2,000把	2,000把	69,500把	
	5把詰1束	5把詰1束				
買値	1束に付300文替	1束に付140文替	1束に付86文替	1束に付24文替		
代銭	799貫800文	1,086貫872文	54貫164文	50貫文	1,990貫840文	
間尺御役金	目方40,000貫、1,000石に付				銀1貫771匁4分2厘8毛8弗	南部藩へ支払
新御役	外浜長折・短折昆布＝1束に付5文宛、棒・早前昆布＝4把1駄に付4文宛				72貫392文	南部藩へ支払か
町之内	外浜長折・短折昆布＝1束に付2文半宛、棒・早前昆布＝4把1駄に付2文宛				32貫30文	田名部町雑用市中の受用
川下賃	外浜長折・短折昆布＝それぞれ1束に付4文・2文宛、棒・早前昆布＝4把1駄に付3文宛				35貫968文	田名部から大平沖本船まで
買場掛り	外浜長折・短折昆布＝それぞれ1束に付7文6歩・3文8歩宛、詰賃縄代駄下賃等は昆布買主に払う				62貫406文8歩	仲買へ支払
	大平船問屋大坂屋太郎兵衛への積入大儀料				銀93匁	
蔵敷	外浜長折＝1ヶ年4文、2ヶ年8文宛、外浜短折＝1ヶ年2文、2ヶ年4文宛 棒・早前＝4把1駄に付1ヶ年2文、2ヶ年4文宛				52貫390文	集荷問屋へ支払
口銭	外浜長折＝1束10文宛、外浜短折＝1束5文、棒・早前＝4把1駄に付5文宛				87貫322文	集荷問屋へ支払
蔵詰日雇賃	およその見積り				6貫文	
全総計	銭1貫文＝銀10匁				銀1貫864匁4分2厘8毛8弗	
					銭2,339貫360文8歩	

「長崎元俵物請方雑書」所収「津軽南部昆布元買直段を始め諸掛り物積り書」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館所蔵より作成、(請求番号660-21)

※外浜長折・短折昆布の把数が束数表示であったため、換算方式(史料中に記載)に従って筆者が計算した。

品目は、別途集荷過程で仲買が参入するとみられ、実態は不明なものの商品価値の高い品目であることがうかがえる。

さらに、それぞれの仕入高も確認しておきたい。各種昆布を合わせた仕入高一、〇〇〇石あたりの目方四万貫を比率に換算し直すと、外浜短折が全体の約半分を占め、外浜長折が約三〇%となる。棒昆布と早前昆布は、それぞれ各五%であり、全体に占める割合は非常に低い。つまり商品の仕入高には大差があることが読みとれる。また把数を比率に直して比較すると外浜短折が全体の約七五%、外浜長折が約二〇%、棒と早前はそれぞれ約三%と、目方同様に外浜短折がほとんどを占め、棒・早前の割合は微々たるものである。棒・早前の一束の量は不明であるが、買値を単純に比較すると、最も高値なのが外浜長折、その半値程の外浜短折、そのまた半値程の棒、とりわけ安価なのが早前である。代銭で比較すると、外浜短折が最も比率が高く約五五%であり、外浜長折が約四〇%、棒・早前がそれぞれ三%程度と非常に小額である。ここから一、〇〇〇石あたりの仕入れの内実は、外浜短折の仕入量が最も多く、買値全体に占める割合も最も高いということがわかる。

続いて諸費用の金額について見ると、間尺御役金と大儀料のみが銀で、それ以外はすべて銭で記されていることがわかる。このままでは単純な比較ができないため、代銭以外の諸費用を、それぞれ史料中に記載された銭一貫文Ⅱ銀一〇匁というレートで銭に換算し直すと、間尺御役金が約一七七貫文、大平船問屋大坂屋に払う大儀料が九貫文となる。他の諸費用と比較をすると、間尺御役金が最も高額で、その半額程で口銭があり新御役と続く。つまり南部藩に支払う費用である間尺御役金と新御役のみで、昆布の代銭以外の諸費用の五〇%近くを占め、昆布の集荷に関する藩の収入が多いことが推測できる。加えて代銭以外の諸費用の約二五%は、蔵敷と口銭が占めており、それらを受け取る集荷問屋山理家にとつての収益の大きさをうかがわせる。

ここで【表二】を用いて、天明五年以降の長崎会所による南部昆布の仕入高を考察したい。箱館・南部の二つの集荷拠点がおかれ、天明く寛政期の仕入高の目標値は、全体

【表二】長崎会所の昆布仕入高

年代	仕入高	産地
天明 5	4, 000 石	箱館 3, 000 石 南部 1, 000 石
天明 6	同上	同上
天明 7	同上	同上
天明 8	同上	同上
寛政 1	同上	同上
寛政 2	同上	同上
寛政 3	同上	同上
寛政 4	同上	同上
寛政 5	同上	同上
寛政 6	同上	同上
寛政 7	5, 000 石	箱館 3, 000 石 南部 2, 000 石
寛政 8	同上	同上
寛政 9	同上	同上
寛政 10	同上	同上
寛政 11	同上	同上

遠山景直著『日清貿易北海道重要海産志』（魅文社、1881 年）より天

明五年（1785）～寛政十一年（1799）分まで抽出作成。

で四、〇〇〇石から五、〇〇〇石（箱館三、〇〇〇石・南部一、二、〇〇〇石）と定められた²⁴。箱館三、〇〇〇石に対し、南部が多いとき二、〇〇〇石ということは、全体の二五％は南部が占めたのである。表にはないもの、その後、文化期（一八〇四～一八一八）に箱館・南部昆布は、それぞれ二、〇〇〇石（合計四、〇〇〇石）と、同等の仕入高が設定された。このように南部昆布は、一八世紀後半以降、長崎貿易に使用される昆布の中でも大きな比重を占めていくようになる。さらに、この長崎会所が割り当てた南部昆布の仕入高は、先述した下北産昆布の平均生産高七、〇〇〇石から見れば、その三〇％程度となる。つまり南部領における長崎向け昆布の仕入高は、天明～寛政期頃下北産のみでほとんど達成できたといえる。

また長崎会所の仕入高を示す史料によると、南部昆布の内実について興味深いことが判明する。

千四百九拾七貫貳百八匁

昆布 四百三拾八万千貳百八拾斤

此内 六百貳拾貫三百貳拾八匁 松前

七百三拾五貫百八拾目 南部

此内

百四拾壹貫七百目

津軽、²⁵

最初に史料の年代を比定する。大坂の船主名や松前昆布の廻漕量を勘案すると、天明期以前であると目される²⁶。史料の表題にある「申年」を考えれば、明和元（一七六四）年、安永五（一七七六）年のどちらかであろう。

この史料で注目されるのが、南部という生産地の区分中に、さらに「此内」とあり津軽が書き記されている点である。先述したように昆布の集荷拠点は、箱館・南部の二つが存在した。右の史料と照らし合わせると、南部という区分には津軽昆布が含まれたと考えられる。つまり、一で確認した生産量の少ない津軽昆布は、長崎において「南部」と一括りにされていた。右の史料で、津軽は南部からは一応独立した項目になっているものの、請方問屋は昆布産地の集荷単位として箱館（松前・蝦夷地）と南部（南部・津軽）と二つの区分を措定したのであろう。

津軽昆布は、次のような事例も見ることができる。

津軽昆布之儀者、三馬屋・今別出産ニ御座候、尤当年茹上之漁人相減、至而出方不足ニ付、直段高直ニ有之候故、下昆布之分三百石余同所ニ而買入、南部出産之分津軽買入之名目ニ而、支配問屋山本理左衛門より買方仕三千七百石程買入申候、（中

略)右津輕・南部二而、買入候高四千石程之分。²⁷

史料を要約すると、津輕昆布は津輕半島の先端部にあたる三厩・今別で生産されるが、漁師の減少で収穫が減り高値となった。よって請方問屋が津輕の買入れにあたり、安価な「下昆布」²⁸のみ三〇〇石程買入れ、他に津輕昆布の買入れという名目で南部昆布を山理家から買入れた。その量は三、七〇〇石程で、津輕産と合わせて四、〇〇〇石程を買入れたとある。請方問屋は、津輕昆布については、安価な下昆布のみ買入れ、他は南部昆布で穴埋めをしたことがわかる。つまり津輕仕入分とはいえ、南部昆布が九〇%以上を占めていたのである。津輕の仕入量が少ないのは、天明の飢饉による影響で漁師が減少したことにより、津輕昆布の生産自体が減少したとも見られるが、最大の理由は津輕昆布が高価であるという点であろう。昆布の産地として長崎が求めたと思われる津輕昆布を一定量は買う必要があるが、より安価な昆布を買うことが重視されたと考えられる。

このような事態は、長崎会所による直仕入れ後の寛政元年にも継続していた。

浦方稼人とも、凶年之節過分相減十分二稼候者少く候故、一体高直二有之、元請負人とも南部之分者、表通買方不仕、津輕買入之名目を以買入仕候、²⁹

右史料によると、前出の史料と類似する「表通買方不仕」という文言がある。津輕昆布は生産量が減少したため高値となり、「津輕買入之名目」で安価な南部昆布を買入れることで、津輕分の補填をしたのである。以上より請方問屋、並びに長崎会所が安価な南部昆布を購入した理由は、貿易の利益を追求することにあると考えられる。この点は、さらに四で考察を深めたい。

三、南部昆布の出荷

ここでは史料制約により、天明五年の直仕入以後の南部昆布を長崎まで廻漕する出荷過程について同時に運搬される俵物も含めて検討したい。

次の史料は、天明五年の俵物・昆布の集荷問屋に関する請証文の控えである。長崎会所役人に対し、田名部・宮古・野辺地問屋の連名で輸送方法などを記したものである。

一、御廻船之儀者年々四・五月頃まで二積立、田名部出帆相成候積り二御差向ケ、勿論空船御送り状者山本屋利左衛門江宛可被差遣候間、右御送り状ニ引合、水主人数船具御極印等相改、荷物積渡船頭より請取手形取之、尤利左衛門より俵物御役所宛ニ荷物送り状相認、船頭江相渡無遅滞出帆為致可申候、且右荷物私共方江差置候内者、万一違変等有之候共少茂御損失相掛不申、急度相弁可申候、田名部出帆之上、海上ニ而之違変者私共差構ひ不申御約定ニ御座候。

一、秋ニ至候而者、海上不穩候ニ付、右之通年々四・五月迄ニ御積取被成候積り故、秋冬出来立候荷物者私共方江買集、尤、宮古・野辺地買入之分者翌春御廻船入津、前々田名部表江差送り無遅滞積廻候様、可取斗旨被仰渡承知仕候（後略）。

30

史料の要点は以下の通りである。長崎廻船は四・五月頃までに出帆させ、長崎廻船の出帆地である田名部の山理家が窓口となり廻船手続きを行う。荷物の保障については、蔵で囲置く（保管）間は、南部問屋側が責任を持つが、出帆後の責任は負わない。前年の秋冬に集荷した荷物と宮古・野辺地の買入荷物は前もって田名部へ送り、長崎廻船の時期に間に合わせる。以上のように、長崎への廻漕にあたっての長崎会所と南部集荷問屋間での具体的な取り決めから、各拠点となった問屋が連携して集荷にあたる様子が読みとれる。

ここで南部藩における輸出海産物の強制集荷の程度と、地域的事情について考察する。

一で確認したように昆布は、干鮑と共に直仕入れ直前の四年間、請方問屋の集荷体制から離脱する。これは、昆布と干鮑の生産量が比較的安定していたことが理由の一つと考えられる。昆布の生産量の多さは、本稿随所で検証済みだが、南部藩で生産される干鮑に關しても直仕入以後の寛政一〇（一七九八）年に、仕入高の設定量が上乗せされている点がそれを象徴している³¹。

続けて、天明六年の長崎会所が俵物・昆布の買い入れについて書き記した調書を検討する。輸送時における商品としての昆布の特質がうかがえるため、煩を厭わず掲出する。

一 前書の外、昆布買入の儀は長崎ニおゐて唐船え渡方の都合次第、員数を極引請の問屋共方え掛合遣、右請負値段ニ引合せ臨時に為買通、尤是迄は其年の出来立の新昆布を積廻し候故欠減多、殊ニ昆布は六月土用中より刈取候付、左様いたし候ては廻船向季も相後候間、一同買入問屋共手前に為罌置、翌年掛改の上為積廻候積の由。

（中略）

一 煎海鼠・鮑・昆布共積廻方の儀、是迄は壱番立、貳番立と唱、貳番立二者其年出来立の新昆布を重に積廻候付、向季相後、秋の末より冬中の渡海ニ相成候故、海上ニて異変積失等有之候趣ニ付、向後は春より六月中迄ニ積立、其後買入候分問屋共方ニ為罌置、翌春積廻し候積りの由。

但 問屋共方ニ罌置候内、万一異変損失等在之候ニおいては問屋一統より相弁、海上の異変は、問屋共相構不申候積の由。

一 即金払の被仰渡ニ付、代る物出方の積合せを以、長崎より金子差遣、問屋共方え相渡置為買集候得は、会所役人共年々罷越相詰居候ニもおよび申間敷ニ付、右預金為引当問屋共より銘々所持の家屋敷、田畑等為書入、村役人宛所の証文為差出、尤領主役人えも掛合候處、領主役人も奥書印形致候由。

右は於長崎唐船え渡方ニ相成候煎海鼠・鮑・昆布等、是迄の買入請負人相止、伺の

上、諸国一同即銀払を以長崎会所直買入の積り申渡、南部・津輕・松前の方、右為取調、御普請役佐藤玄六郎外式人、長崎会所役人河野伴左衛門、吉野助十郎差遣、則取調申聞候趣如此。

天明六年六月³²

まず要点を整理する。昆布は中国側の需要に応じて、その年の仕入量が決められていたようである。廻船の番立は壺番立・式番立という二種類があり、天明六年まで式番立の廻船には、その年収穫した新昆布を積み込んだが、昆布の刈取時期が六月からでは、長崎への廻船が冬となり、海難に巻き込まれる確率が上がる。そのため春々六月中には長崎への船を出発させ、それ以後問屋が買入れた昆布は、保管させて翌年に廻送する。俵物・昆布の代金の支払いは、長崎会所役人から「問屋方」への即金払³³であり、問屋は自分が所持する家屋敷・田畑等を担保として提出し、併せて領主の奥書を伴う村役人の証文を出させる。請方問屋による買い入れをやめ、天明五年より長崎会所による直買入にする。内容は、天明五年の前掲史料と重複する部分もあるものの、昆布は唐船の需要に応じて入荷量が決定されるという記述は、大変興味深い。ここから昆布は俵物とは異なり、比較的潤沢に存在する商品であったことが看取される。

四、南部昆布の歴史的意義

俵物・昆布の運搬船の概要と実際の積荷量などの特徴から出荷方法について検討を加える。また松前・津輕昆布の生産高と長崎への廻漕高、あるいは価格の比較も行いたい。最初に、船の概要を記した史料（一艘分）をとりあげる。

南部津輕壺番立雇船

二月二日大坂川口出帆

南部大平行 大坂塩飽屋喜兵衛船 沖船頭小左衛門

一、昆布千三百五十石積 金幸丸

四月十四日南部出船同廿四日廻着

銀貳拾七貫五百目程 津輕煎海鼠 五拾八丸

此斤七千貳百五十拾斤

(中略) ※右に続き各積荷の価格と斤数を記載

百五拾九貫六百目程、³₄

ここで着目されるのが、「一、昆布千三百五十拾石積」という箇所で、通常は米の石高(重量)で表示する積載量を昆布のそれで表している点である。その理由は、昆布の積荷に占める割合が非常に高いためであろう。

【表三】は、天明期以前と思われる³⁵松前・津輕・南部という津輕海峡に面する三藩の俵物・昆布の運搬船に関する史料から、南部経由の船のみ抽出したものである。内容を項目ごとに順を追って考察する。船の経由地については、七・八・九番船の「南部地雇」という表現が注目される。これらの船は、俵物・昆布の運搬船が不足した際に現地で雇われたものであると推定される。一で確認したように昆布の生産量には毎年大きな変化があることから、それに対応した措置であると見られる。この点については後述する。

船の石数は、一、〇〇〇石程度の大船が大半を占めている。積載物は昆布が格段に多く、年合計二二万一、八〇〇斤(二万八、四三二丸)と、単純に石数に直して約八、八七六石³⁶にも達した。四番船は津輕にも立ち寄ったことから、運ばれた昆布(二、八〇〇丸)の一部は津輕昆布であると推測される。ところが津輕昆布を半分と見積もっても、年二百万斤は下らないため、八、〇〇〇石程度は南部昆布が長崎に送られたとみて相違ない。他に昆布の長崎廻漕高は、代銀をみると地域として南部と津輕に分類され、それぞれ八・二の割合で、南部昆布が大きく優越している。これを一で考察した南部昆

【表三】申年長崎俵物昆布運搬用御雇船概要（南部経由）

船の番数	経由地	石数(石)	積載物(丸)	積数(斤)	代銀	船名	船主名	沖船頭	番立	大坂川口→南部出航→長崎
1	南部	1,350	昆布2,700	324,000	108貫目程	金幸丸	大坂塩飽屋喜兵衛	小左衛門	壱	2月2日→4月14日→4月24日
			津軽煎海鼠58	7,250	27貫500目程					
			南部煎海鼠39	4,875	18貫500目程					
			南部干鮑16	2,000	5貫600目程					
2	南部	500	昆布1,000	120,000	40貫目程	吉幸丸	大坂鉄屋悦蔵	庄蔵	〃	2月2日→4月19日→7月13日
			南部煎海鼠10	1,250	4貫750目程					
			津軽煎海鼠17	2,125	8貫100目程					
3	南部	1,100	昆布2,090	250,800	83貫600目程	徳受丸	大坂大津屋兵助	武右衛門	〃	2月12日→6月5日→9月29日
			南部煎海鼠17	2,125	8貫目程					
			津軽煎海鼠25	3,125	11貫200目程					
			南部干鮑35	4,375	11貫200目程					
4	南部・津軽	1,350	昆布2,800	336,000	112貫目程	妙徳丸	大坂河内屋平吉	三重吉	〃	2月12日→7月2日越前敦賀沖にて破船
5	南部	800	昆布2,178	261,360	87貫目程	秋葉丸	大坂大和屋伝兵衛	松助	弐	4月15日→7月7日→9月24日
			南部煎海鼠7	875	3貫300目程					
			南部干鮑6	750	1貫900目程					
6	南部	800	昆布2,202	264,240	88貫80目程	明栄丸	大坂豊後屋長兵衛	平兵衛	〃	4月17日→7月29日→9月13日
7	(南部地雇)	1,200	昆布2,460	295,200	98貫400目程	金幸丸	大坂塩飽屋喜兵衛	小左衛門	〃	7月27日→8月14日
			津軽煎海鼠14	1,750	5貫200目程					
			南部煎海鼠7	875	2貫600目程					
			南部干鮑59	7,375	15貫800目程					
8	(南部地雇)	1,000	昆布2,050	246,000	82貫目程	住力丸	大坂備前屋五兵衛	甚三郎	〃	8月13日→9月29日
			南部煎海鼠9	1,125	3貫900目程					
			南部干鮑26	3,250	6貫800目程					
9	(南部地雇)	600	昆布952	114,200	36貫100目程	浅宝丸	加賀浅草屋十左衛門	記載なし	〃	9月29日下関廻着
長崎廻漕量		南部昆布	(合計)	(合計)	735貫180目程	斤数 (1丸あたり)	120斤			
		津軽昆布	18,432	2,211,800	※141貫700目程		120斤			
		津軽煎海鼠	114	14,250	52貫600目程		125斤			
		南部煎海鼠	89	11,125	41貫50目程		125斤			
		南部干鮑	142	17,750	41貫300目程		125斤			

「申年松前・南部・津軽 壱番立・弐番立雇船船名前書付」初村家(旧峰家)史料、大村市立史料館所蔵より作成、(請求番号113-38)

※津軽昆布の代銀の数値は、4番船以外の津軽経由の船との合計値(3艘分)。

※経由地の項目で、(南部地雇)とあるが、これらは他船のように事前に雇用された船ではなく、南部(現地)で雇用された船とみられる。

布の生産高と比較してみよう。安永・寛政期頃における生産高の平均は、七、〇〇〇石程度である。これと約八、〇〇〇石という廻漕高を比較すると、下北で生産された昆布の大半は、この御雇船で積み出された、即ち長崎向け輸出海産物に充てられたと見てられる。

ところで、一・二・三・七番船に津軽煎海鼠とあることに注目したい。出帆地が南部藩領であるのに、なぜ津軽産の煎海鼠が含まれているのかといえば、出帆した藩の問題ではなく、長崎へ廻漕する輸出海産物は、どの御雇船に積載してもよいという取り決めがあるためであろう。実際、この例とは逆に、南部宮古の俵物が隣藩である津軽青森まで運ばれ、青森出帆の御雇船で積み出す事例もある³⁷。煎海鼠についても、南部藩では積出湊である田名部へ運ぶことが一般的なのである。しかし宮古から田名部へ船で運ぶにあたり、陸奥湾内の風の向きなどにより田名部に着船できない際には津軽の青盛へ運搬し、そこから御雇船で積み出すのであろう。運ばれる商品には、このように津軽煎海鼠・宮古煎海鼠などと記載され、産地を知ることができる。詳細は不明であるが、各藩へ毎年仕入高を割り当てていたため、産地を長崎で把握できれば、どの御雇船でも積載が可能であった。これは昆布についても同様で、二で考察した津軽昆布の不足分を津軽昆布の名目で南部昆布を用いて補填し、同じ御雇船で廻漕することもあった。これらの事例から、御雇船の立ち寄る特定の積出湊は、時には他藩の長崎向け商品を集荷するという特異な役割も果たしたことが確認される。

続けて御雇船の船主について見てみると、その雇い先は、全船が北国筋の俵物の運搬において大きな地位を占めた大坂であることがわかる。番立は大まかに二月に出帆する姥番立と、四月以降に出帆する式番立とがある。船は長崎に一〇月までには着船しており、長州の下関へ運搬する場合もある。

【表三】から南部出帆の船が九艘であったことがわかるが、これは松前・津軽各七・二艘であることと比較すると最も多い。積載物は昆布（二二万斤）に対して、煎海鼠・干鮑は合計四万斤と、六〇分の一程度であり、全体（昆布・煎海鼠・干鮑）に占める割

合は二%以下である。これより積載物は昆布でほぼ占められ、それに比例する生産高についても、昆布に比べ俵物は低いといえる。

さて【表四】を用いて、請方問屋の集荷における南部・津軽・松前各昆布の長崎への廻漕量と価格を比較する。南部と津軽は、合わせた斤数しか判明しなかったため、合計のみを記載したが、先述したように内実として二百万斤程は南部昆布であり、松前昆布の一八六万五〇〇斤と比べて長崎への廻漕量が多いことは確実である。それは、各昆布の価格差が大きな理由である。また、南部・津軽・松前各昆布の価格を比べると、松前昆布の方が四割程も高値である。ここで請方問屋は、安価であることを重視して南部昆布を購入した可能性があることを指摘できる。それは、津軽昆布の価格が高いときに、南部昆布がその穴埋め用とされていたことや、後述するが、唐人へ売り渡す際には商品として産地が問われないことから裏付けられる。

次に、天明五年直仕入後の天明六（一七八六）年の南部昆布の仕入価格（【表五】）と長崎から中国への売渡価格を比較して、南部昆布の販売で得られる長崎会所の利潤を明らかにしたい。まず一八世紀後半、長崎から中国への昆布の売渡価格は、一斤あたりの昆布価格が標準価格三分一厘四毛（銀換算）であったことがわかる³⁸。この昆布価格に対して、天明六年の南部昆布の仕入価格は、一斤あたり一分九毛六弗（標準価格銀換算）であった。これらを単純に比較すると、価格差は約三倍となる。仕入価格には、南部から長崎までの船賃などの諸費用等は含まないので、純益ではないものの、利益が相当量あることは指摘できる。加えて、同史料によると昆布は、唐人へ売り渡す際に「昆布」とのみ記載され、産地等の商品分類がないことも判明する。

以上より具体的利益の実態が見えてきた。より安価な昆布を仕入れた方が請方問屋、並びに長崎会所にとっては、利益が大きくなり大變都合が良いのである。翻って、【表三】にある天明く寛政期頃の松前・南部・津軽昆布の生産高を比較すると、松前が二万五、〇〇〇石から五万石程、南部は二、〇〇〇石から一万石程、津軽は一、五〇〇石から五、〇〇〇石程であることに気づかされる。生産高に比例して仕入をするのであれば、

【表四】申年長崎への昆布廻漕量・価格と18世紀後半の昆布生産高

産地	昆布廻漕量(斤)	価格(1丸あたり)	生産高(石)
松前昆布	1,860,580	75日程	25,000～50,000
南部昆布	2,211,800	48日程	2,000～10,000
津軽昆布			1,500～5,000

※昆布廻漕量と価格は、「申年松前・南部・津軽 壱番立・弍番立雇船船名前書付」初村家(旧峰家)史料、大村市立史料館所蔵より作成、(請求番号113-38)

※生産高は、「長崎元俵物請方雑書」所収「津軽南部取計之儀御手頭を以御尋之趣御ヶ条限御答奉申上候書付」と「松前取計方之儀御尋之趣御答書」天明四年(1784)、長崎歴史文化博物館所蔵より作成、(請求番号660-21)

松前が圧倒的に多くて然るべきであるが、南部の方が多いのである。ここであるという南部昆布の内実は、下北の生産量のほとんどを廻漕して調達されるものであった。以上より、少なくとも天明から寛政期頃、南部昆布は仕入価格が安価であることから、松前昆布より多量に長崎へ廻漕された可能性があることが指摘できる。

【表五】天明六年長崎会所による南部昆布の仕入明細

	昆布	備考
石数(石)	1, 000 石	1, 000 石=250, 000 斤
斤数(1ヶ年)	250, 000 斤	
代(金)	425 両 1 分	諸掛り費用含む
代(銀)	25 貫 510 匁 2 分	諸掛り費用含む
代(永)1斤に付	1 文 8 分 2 厘 2 毛 8 弗	
代(銀)1斤に付	1 分 9 毛 6 弗	

「南部・津軽・松前 煎海鼠、鮑、昆布長崎会所直買入取調書」天明六年(1786)

(『新北海道史』第7巻・史料1、p383～390)より作成

※斤数(1ヶ年)は、目標であって実際の長崎廻漕量とは隔離する。

おわりに

最後に本稿の論点をまとめて、今後の展望を示したい。本稿は先学で、松前昆布が注目されてきた点、輸出海産物の中では俵物が注目されてきた点に問題意識を持ち、一八世紀後半、とりわけ天明く寛政期頃の南部藩で生産される長崎向け昆布の生産から出荷に至る実態に着目した。その際、同じく長崎向け昆布を生産する松前と津軽との比較検討も行った。その結果、請方問屋、並びに長崎会所は、貿易における利益を追求するため、安価な南部昆布を松前昆布より多量に購入した可能性があることが指摘できる。それは、南部昆布は津軽昆布が高価なとき津軽分として充填された点、昆布を唐人に売る際に産地区別をしないため、安価な南部昆布が重宝された可能性がある点などから裏付けられる。特に最後の理由について、現在でも函館周辺と対岸の下北半島で生産される昆布は、大半が同じ真昆布という品種であるため、見た目による相違はそれほどないものと思われる。菅江真澄が両地域での昆布の生産風景を共通するものとして捉えたことも、この点を踏まえると理解しやすい。

唐人向けの輸出海産物の中でみる昆布は、輸出量も突出して多い上に、利益の最もあがる商品である。それは、俵物と比すれば格段に多い生産量に裏付けされ、幕府にとつて唐人の需要も満たせる魅力的な商品であったといえる。天明五年の直仕入直前の四年間南部藩では、昆布が請方問屋による集荷体制からの離脱という動きも見られたが、それも生産量の多さを理由に考えると納得できる。

また、本稿で画期とされた天明五（一七八五）年の集荷主体の変容が南部昆布の集荷に与えた影響は、仕入高が設定されたほかは見えてとれない。仕入高といってもほとんど達成可能な量である。つまり昆布集荷においては、大きな変化は見られないのである。全体を端的にまとめると、天明く寛政期頃、長崎貿易の利益の多くを生み出す昆布の中でも南部昆布は、最大の生産地である松前昆布を凌ぐ重要な輸出品であった。生産量と長崎集荷分の比率から勘案すると、南部昆布は幕府による輸出海産物の集荷体制に

しつかり組み込まれ、松前昆布は長崎よりも国内市場への流通量が多い商品ともいえる。それこそが南部昆布の歴史的意義である。

今後の課題をまとめる。長崎では、松前昆布に比べ南部昆布を多く仕入れたという事象がどのように展開するのか、奥蝦夷地（北海道東部）での昆布生産量の拡大などと連関させて検討する必要がある。さらに南部昆布の生産に関わる課題が多く残された。生産地における価格は、藩による運上のみならず最終的に集荷される大坂市場との関わりも含めながら、その過程を「ブランド化」などのキーワードから詳細に検討する必要がある。南部昆布が安価な理由は、買入値段が集荷を「引請」した集荷問屋による「請負値段」に応じて、決定された点を視座に入れて考えるべきであろう。南部の集荷問屋の請負値段が、他に比べ安価な理由も今後の検討課題としたい。さらに、昆布漁が下北の生産地に与えた具体的な影響についてもほとんど明らかにできなかった。他に「本州昆布」について、長崎貿易に使用されない南部領のうち三陸地方、あるいは仙台領で生産される昆布の流通過程にも注目する必要がある。

以上を明らかにすることで、近世に国内外問わず流通して、多方面に大きな影響を与えた北方産品である昆布の特質をより一層明らかにできるに違いない。それが、近世社会の特質を昆布という一つの商品の流通からひも解くことに結びつくはずである。

(1) 近世における昆布の流通に関する研究は、羽原又吉『支那輸出 日本昆布業資本主義史』(有斐閣、一九三五年)、稲垣美三雄『日本昆布大観』(正進堂、一九四七年)、白山友正「松前蝦夷地における長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』二九、一九六二年)、同「続松前蝦夷地に於ける長崎俵物の研究」(『北海道経済史研究所研究叢書』三七、一九六四年)、大石圭一『昆布の道』(第一書房、一九八七年)、編著／発行田澤伸雄『北海道昆布漁業史』(一九九〇年)、深井甚三『近世日本海運史の研究―北前船と抜荷―』(東京堂出版、二〇〇九年)、田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂出版、二〇一四年)などがある。

(2) 俵物に関する主要な研究は、森嘉兵衛「三陸東海岸における長崎俵物生産の研究」(『社会経済史学』九一六、一九三九年、同『奥羽社会経済史の研究／平泉文化論』(森嘉兵衛著作集1) 法政大学出版会、一九八七年再収)、荒居英次『近世海産物貿易史の研究―中国向け輸出貿易と海産物』(吉川弘文館、一九七五年)、同『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年)(以下、荒居一九八八書と表記)、小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』(吉川弘文館、一九七三年)、若松正志「長崎俵物の地域別集荷高について」(『東北大学附属図書館研究年報』二四、一九九一年)、同「仙台藩領における長崎俵物の生産・集荷」(渡辺信夫編『近世日本の生活文化と地域社会』河出書房新社、一九九五年)(以下、若松一九九五論文と表記)、同「長崎俵物をめぐる食文化の歴史的展開」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』創刊号、一九九六年)がある。

(3) 例えば、明和八(一七七二)年の輸出量(海産物)のうち、昆布は全体の約八四％を占める。俵物は三品あわせてもわずか約一五％である。前掲注(二) 荒居一九八八書、二二頁より算出。

(4) 安永七(一七七八)～天明二(一七八二)年の五ヶ年の平均利潤(銀換算)は、煎海鼠約五万八、〇〇〇匁・干鮑約四万三、〇〇〇匁に対し、昆布は約五万二、〇

〇〇匁（上納金や運賃などの雑費を差し引いても三万三二〇匁）にも上る。前掲注

（二）小川書、四一頁表九と八六頁表六より算出。

※なお煎海鼠と干鮑の集荷にかかる雑費は、俵物として一括されており厳密な計算ができない。

（五）前掲注（二）荒居一九八八書、一三五～二六一頁、同小川書、四四～四五、二五六～二七〇頁、若松一九九五論文参照。南部昆布の生産量は、幕府が定めた仕入高を満たす量があったため、請方問屋、あるいは長崎会所による独占集荷がされなくとも、比較的手に入りやすいものと考ええる。

（六）「長崎元俵物請方雑書」所収「津軽南部取計之儀御手頭を以御尋之趣御ヶ条限御答申奉申上候書付」天明四年（長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号六六〇―一二一）。

（七）通とは南部領を各ブロックに分けた行政区画で、それぞれ代官所が設置された。

（八）「去ル巳年御直仕入被仰出候候以来津軽南部俵物昆布稼方之儀御取調子に相成候一件」寛政元（一七八九）年（大村市立史料館所蔵、初村家（旧峰家）史料、請求番号一三三―二七）。

（九）『田老町資料集町外編』近世五、一九九〇年、五六八頁「三閉伊魚類五十集物十分一役立覚」明和元（一七六四）年によると「一、昆布 壺石二付 銭 百貳拾文」とある。

※閉伊地方で産出される昆布の税を記載。

同、五九二頁「諸御代官所産物書上帳」文政四（一八二二）年によると「一、昆布 田老村 小本村」とある。

※宮古通の田老村と小本村での昆布の産出を記載。

『久慈市史』第五卷史料Ⅱ、一九八七年、七三五頁「此度江戸具足丁大和屋辰五郎儀、利兵衛・平八罷下、魚類・昆布相對時相場を以調申度段願出、願之通被仰付候、引合ニ相成候分無差支相払可申候」文政九（一八二六）年

※江戸商人が久慈で昆布を仕入れていることを記載。

(10) 前掲注(二) 森・荒居一九八八書・小川書。

(11) 前掲注(六) 史料。

(12) 大巻秀詮「邦内郷村志」安永期『南部叢書』第五卷、歴史図書社、一九七一年) 三九六～三九七頁。

(13) 外浜昆布という商品の名称について、外浜とは下北地域の呼称ではなく、対岸の津軽半島の陸奥湾沿いを指す呼称であり、由来については今後の検討課題である。

(14) 前掲注(二) 荒居一九八八書、六九～七三頁。

(15) 菅江真澄「牧の朝露」寛政五年『菅江真澄全集』第二卷、未来社、一九七七年) 三五二頁。

(16) 前掲注(六) 史料。

(17) 前掲注(八) 史料。

(18) 前掲注(六) 史料。

(19) 右同上。

(20) 前掲注(八) 史料。

(21) 『気仙沼市史』Ⅲ、近世編、一九九〇年、二五二・二五七・二六一～二六二・二八一頁。

(22) 本州昆布とは、筆者が史料から生産を確認した南部・津軽・仙台藩領生産の昆布全体を指すこととする。昆布は北方でのみ生産される海藻で、現在においても基本的に三陸沿岸が南限である。

(23) 前掲注(六) 史料。

(24) 遠山景直著『日清貿易北海道重要海産志』(魅文社、一八八一年)。これは天明五年より天保期(一八三〇～一八四四)までの長崎会所の昆布仕入高を書き上げたもので、仕入高(毎年)の目標値と、集荷拠点を二つ(箱館・南部)に分けて設定され

ている。

(²⁵) 「申年松前南部津軽 壺番立式番立雇船船名前書付」(大村市立史料館所蔵、初村家(旧峰家)史料、請求番号一一三―三八)。

(²⁶) 「昆布買入方一件」寛政四年(岐阜県歴史資料館寄託史料、武川久兵衛家文書、請求番号「―乙―E―4」と寛政初期「俵物方書上」(同、請求番号「―乙―E―8」によると、【表二】の元史料では松前昆布の廻漕量が八、〇〇〇石強であるのに対し、長崎会所による直仕入後の寛政期頃の廻漕量は、約一万五、〇〇〇石にも上った。他に元史料では、津軽行の船主の中に泉屋伝右衛門という人物がいる。伝右衛門は、編集・発行 住友修史室『泉屋叢考』(第十六集、一九七六年)三四頁によると、寛延四(二七五二)年より大坂で活躍していたことが明記されている。

(²⁷) 前掲注(六)史料。

(²⁸) 下昆布は、津軽昆布の商品分類の中で「下品」にあたり、最も安価なもの。

(²⁹) 前掲注(八)史料。

(³⁰) 「御証文之事」天明五年(『野辺地町史』資料編・第一集、一九九二年)一八二―一八三頁。

(³¹) 前掲注(二)荒居一九八八書、二三七頁。

※一八世紀後半の南部藩のナマコの生産量は多いのに対し、ナマコは少ないとする。煎海鼠が請方問屋による集荷体制から離脱できない理由は、生産量にあると推定される。

(³²) 「南部・津軽・松前、煎海鼠・鮑・昆布長崎会所直買入取調書」天明六年(『新北海道史』第七巻史料一、一九六九年)三八九―三九〇頁。

(³³) 同右史料は、南部のみならず、津軽と松前の事情もまとめて記している。参考として、松前では天明五年から八年まで俵物役所の「松前詰之者」が俵物買入資金を運び、集荷問屋に支払っていた。前掲注(二)小川書、一二五頁参照。その後、詳細

な過程は不明だが、集荷問屋から各村々の漁師たちへ前貸金として配布されたものと見られる。

(³⁴) 前掲注(二五) 史料。

(³⁵) 前掲注(二六) 参照。

(³⁶) 「長崎雑誌 俵物諸色唐人買渡値段ほか 写本」(長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号福田文庫十九―五〇)によると、昆布は二五万斤を一、〇〇〇石として計算されている。本史料は、長崎会所が決めた唐人への売渡価格が書き記されたものである。※正確な成立年代は不明であるが、茯苓(キノコ的一种で薬用)は寛政元年と翌年では売渡価格に変動があったことが確認できること、丁子(葉種)は、「天明四年の拾五番船へ相渡」などの記載から、天明から寛政期頃の売渡価格も示しているものと見られる。

(³⁷) 前掲注(六) 史料。

(³⁸) 前掲注(三六) 史料。

※昆布は、煎海鼠や干鮑のように番立(等級区分)が見られないものの、標準価格の他に参割八分下げの価格(式分七毛壺弗)と三割下げの価格(式分参厘参毛八弗)も記載されている。それは、前掲注(二) 荒居一九八八書、三九一頁にある、中国船主は、俵物・諸色の値組をする際、見本品をもとに見分をおこなったことを反映していると考えられる。

第七章 俵物・昆布比較考

―松前・蝦夷地と南部藩領を例に―

一、俵物・昆布と長崎貿易

本章では、前章まで随所で検討してきた俵物と昆布に関する商品としての特質の違いを、新たな史料や知見も加えて再検討したい。

最初に、俵物と昆布の大きな相違点についてまとめておきたい。俵物は全国各地で生産されるのに対して、昆布は北方地域でのみ生産される商品である。具体的には、煎海鼠や干鮑といった俵物は、長崎会所による集荷地域を見ると、全国にその範囲が及んでいる¹。一方、昆布は正保二（一六四五）年の松江重頼による諸国の名産品が記された『毛吹草』²によると、松前と出羽の産物であった。これまで出羽で昆布が採れた記録は見ないが、当史料によると南部田名部や津軽外ヶ浜で採れた産物も出羽産に含まれているため、陸奥と混同しているのであろう。また、長崎向け昆布の集荷地域を見ると、松前・南部・津軽という北方地域に位置する三藩のみが担当していた³。

次に、俵物・昆布の集荷と長崎貿易、さらに松前・蝦夷地、南部藩領との関係性について、主な先行研究⁴を参照しながら改めてまとめておきたい。近世初頭、長崎貿易における主な輸出商品は、金や銀などの金属類であった。しかし、国内の各鉱山の相次ぐ枯渇によって、その代替品が必要になる。そこで注目されたのが、俵物・昆布などの商品である。国内各地で生産される俵物・昆布は、一七世紀後半には長崎へ運ばれていたようである。それは、元禄一〇（一六九七）年に「俵物諸色替」として制度化された。松前藩は、元文四（一七三九）年に幕府の命を受けたことにより、自ら俵物・昆布の長崎廻漕を行った。さらに二年後、西川伝治を代表とする松前の独占的な商人集団である両浜組（近江商人）によって、煎海鼠四四〇本、串鮑八四四本、昆布六、〇〇〇駄などを廻漕した。寛保三（一七四三）年以降に幕府は、俵物と昆布の集荷にあたって、請方

問屋を結成し、長崎・大坂・箱館・下関へ会所の設置をするなど、各生産地に存在する俵物の下請負問屋の組織化を図った。その際に俵物・昆布は、大半を北国筋産のものが占めた。天明五（一七八五）年に俵物・昆布の仕入れが長崎会所による直仕入制へと移行した際、全国に煎海鼠四〇万斤・干鮑三〇万斤余を強制的な割当として設定されているが、松前・蝦夷地の割当は、煎海鼠一三万斤（割当高全体の三割）、干鮑一二万斤（割当高全体の四割）にも達した。幕府によるこの地域への期待の大きさがうかがえる。

しかし、幕府の強制的な集荷が行われてきたにもかかわらず、一九世紀初頭になると、俵物の長崎廻漕量は以前より減少する。その理由としては、長崎会所の買い入れ資金の欠乏や、低価格の買い上げによる漁師の生産意欲の減退が挙げられる。加えて、幕府の専売品にもかかわらず、密売買が横行したことも影響したようである。それに対して幕府は、手をこまねいていた訳ではなく、度々禁令により取り締まりを企図する。しかしながら、ほとんど成果をあげることではできなかったようである。

二、松前・蝦夷地の俵物と昆布

ここでは、松前・蝦夷地で長崎向けとして生産される俵物と昆布の商品の特性を考える。とりあげる史料は、天明五（一七八五）年の長崎会所による俵物と昆布の集荷量や運上金の額といった集荷計画を書き記したものである。

（天明五巳年）

煎海鼠 拾三万斤

干鮑 拾貳万斤

式品は悉皆長崎会所にて購入

昆布 一カ年七拾五万斤

三千俵を限り購入せり

運上金として松前藩に交附するは

煎海鼠・干鮑 貳百両

昆布 貳百両

合計 四百両、⁵

右史料から、集荷予定量は、煎海鼠一三万斤・干鮑一二万斤、昆布は七五万斤であり、昆布が俵物二品（煎海鼠・干鮑）より、六倍程多量に集荷することが予定されていたことがわかる。運上金は、俵物が二品目合わせて二〇〇両であるのに対して、昆布は一品目二〇〇両で、一品目ずつ比較すると、運上金は昆布の方が高く設定されているように見える。しかし、集荷予定量と比較すると、俵物二品を合わせても、昆布の集荷総量の六割程度であるため、実質は昆布を集荷する際に払う運上金の方が格段に安価であることがわかる。さらに俵物は、すべて長崎会所が買い上げる（幕府の専売品）ものの記述が見られるのに対して、昆布はその対象にはなく、御用船以外の商船に売り渡すことが可能な商品であったと理解されよう。

続いて、俵物集荷に際する幕府の専売品といわれる特徴について、とりわけこれまで不明である専売品となった時期に着目したい。次の史料は、寛政元（一七八九）年のもので、本稿第一章でも取りあげたものだが、比較対象として用いるため再掲出したい。

煎海鼠者、問屋江売渡其余之品者、近江・能登・加賀・越前・佐渡・大坂辺りより船を仕取上、四月頃⁶六・七月頃迄罷下り買取、其場所々江、積廻し申候由、⁶

これまで煎海鼠⁷は、幕府の専売品とされてきた。ところが松前・蝦夷地では、寛政期頃、余剰が出た際、民間の商船に積み込み持ち帰ることを許されていたと理解される。また、この史料の成立年代から、天明五年の幕府の直仕入れにより集荷が強化された後の事情であることがわかる。余剰分は、言うまでもなく国内市場へ出回る分であり、従

来指摘されてきた抜荷として出回る分のみならず、幕府に公認されて国内市場へ出回る分が存在したことが示唆される。これは、前掲史料と一見矛盾するように見える。しかし、煎海鼠の生産量は、松前・蝦夷地については、他の生産地と比すれば非常に多いため、長崎への需要が十分満たされる年があり、その際に御用船以外の商船に売り渡されたと考えるべきであろう。また、現状では推測の域を出ないものの、生産量の多い松前・蝦夷地でのみ許されていた事例の可能性もある。

一方、一九世紀初頭、東西蝦夷地が幕領となった後である文化四（一八〇七）年から文政四（一八二一）年までの間に成立し、松前・蝦夷地で産出される各商品について詳らかな「松前産物大概鑑」によると、煎海鼠は「長崎御用表（俵）物之外、売買ハ無御座候。」とあり、干鮑（白干鮑）は「長崎御用俵物ニ御買上ケニ相成候他、売無御座候。」とある。この史料からは、これら品目が幕府の専売品であつたことが想定される。俵物の集荷に関しては、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて、幕府の集荷に特化した商品、いわゆる名目上、幕府の専売品になったとみなされる。

三、南部藩領の俵物と昆布

長崎向け商品として、南部藩領で生産される俵物と昆布の特徴を整理する。まず、本稿で主に用いている天明五年の長崎会所による直仕入前の史料で、俵物や昆布の集荷事情について詳細に記載されている「長崎元俵物請方雑書」から検証する。

私共買請之外者、重二大坂掘立・加賀橋立辺之船々、其外所々商船入込相調、敦賀・下関・大坂江、積廻し売捌申候儀ニ御座候、尤不漁二而、私共昆布買方相揃不申節者、浜限買請候約定ニ仕候、其節者、外人ニ売渡不申様、相極候儀ニ御座候、⁹

昆布の集荷にあたって、長崎廻漕分以外の余剰は、大坂や加賀などの商船が買い取り

越前敦賀や長州下関などへ廻漕するしくみになっていた。それに対して、煎海鼠や干鮑の集荷事情に昆布と同内容の記述は見受けないため、幕府の専売品であると見られる。次に掲げる史料は、天明五年に南部藩領の俵物・昆布を集荷する各問屋が、長崎会所に連署で提出した請負証文の一部である。

天明五年

御請証文之事

(前略)

一、昆布之儀者、外江茂売出候品ニ而、年々値段高下御座候ニ付、年季を限値段併諸掛り入用共ニ御請仕、別紙御請証文差上申候、

(中略)

南部田名部問屋

山本屋利左衛門

天明五年巳六月 同 宮古問屋

和泉屋民右衛門

同 野辺地問屋

仙台屋彦兵衛

長崎御会所

河野伴左衛門殿

吉野助十郎殿¹⁰

前出の史料とほぼ同内容ではあるが、この史料においても昆布は、長崎会所による仕入以外に他国商船への売買が可能であるということが読みとれる。また、昆布に関して俵物とは異なる事情を書き記した証文を差し出すとされており、集荷事情に相違のある商品であることも看取される。このことは、南部藩領で生産される昆布が、長崎御用と

いう側面のみならず、国内市場への自由売買が可能であるという側面も持ち合わせていたことを示唆する。

南部藩領の俵物との相違について、「申年松前・南部・津軽 壱番立・弐番立雇船船名前書付」¹¹から価格と長崎への廻漕量を比較する。この史料は、申年（一八世紀後半）の松前・南部・津軽三藩の俵物と昆布の長崎への廻漕量や運搬船について記載されており、煎海鼠の価格は一〇斤で三七目程、干鮑は一〇斤で二三目程、昆布（南部と津軽の一部分）は一〇斤で四目程であった。昆布は、煎海鼠・干鮑とは、それぞれ約一〇倍・六倍の価格差があることから、俵物に比して格段に安価であることがわかる。また、当時の俵物と昆布の長崎への廻漕量を比較すると、昆布は、俵で換算すると約一万八、〇〇〇丸の廻漕量であるのに対して、俵物は、煎海鼠と干鮑をあわせても、わずか二三〇丸ほどであった。昆布の特質は、俵物に比べると価格が非常に安価で、廻漕量が大変多い点にあるといえる。この廻漕量は、当然生産量とも比例しているはずで、昆布は俵物と比すれば、生産量が格段に多い商品とも言えそうである。

四、「ミツイシ昆布」考

ここでは、一八世紀後半より生産が開始されたと見られる「ミツイシ昆布」¹²の名前の由来や、産地の定義などについて史料が乏しいものの考察をする。「ミツイシ昆布」に着目する理由は、輸出商品とされる昆布の中で、非常に重宝されるようになるためである¹³。ところが、それはいつ頃から集荷されるようになったのか、あるいは生産地域の範囲など、その実態には不明な点が多い。

「ミツイシ昆布」という名称は、日高地方のミツイシ（三石）で生産されることに由来すると見られる。その生産が確認される最も古い史料は、管見の限り安永末期～天明初期頃の松前・蝦夷地の様子を書き記した「松前随商録」¹⁴であろう。これによると、ミツイシの産物を書き記した箇所に「近年昆布沢山ニ相成申候（以下略）」という表現

が見られる。ちなみに、隣であるウラカワ（浦河）の項目においても、「昆布（中略）近年沢山」という記述が見られる。ここから、現在の日高地方においては、天明初年頃より本格的な商品化が始まったといえる。「三ツ石昆布」という名称がはっきりと確認できるのは、天明四年の史料である¹⁵。その二年後、天明六年の「蝦夷草紙 別録」¹⁶によると、トカチ（十勝）場所のうち、ヒロオ（広尾）における交易値段は、昆布が三〇駄（馬三〇頭による積載量）で八升入米一俵、また一駄につき銭換算で一八文二分六厘と記載されている。ミツイシやウラカワなど日高地方での昆布採取が始まって、さほど下らないと思われる頃には、さらに東側の十勝地方でも昆布生産が開始されていたことが判明する。

次に、前出した「松前産物大概鑑」の昆布が詳述されている部分から「ミツイシ昆布」の商品の特質を探りたい。

昆布類之部

（中略）

一、三ツ石昆布

（中略）

是ハ東蝦夷地ミツイシ・シツナイ・ウラカワ・シヤマニ・ホロイズミ・アツケシ、都而三ツ石昆布ト申銘目ニ御座候。右出高ニ寄り、直段少々違も御座候。昆布細く、壺把め方四々五百匁位、壺丸ニ御座候。¹⁷

一九世紀初頭の文化期に「ミツイシ昆布」は、日高地方（シツナイからホロイズミ）から、釧路地方のアツケシ（厚岸）辺りまでの地域で生産されていたことが記されている。また、この史料の文脈より、箱館近辺で生産される志苔昆布との比較によって、「ミツイシ昆布」の特徴が理解されていたと見られ、それより細いという特徴もそうした認識から生じたことが推測できる。

総括

本章では、一八世紀後半から一九世紀初頭の松前・蝦夷地と南部藩領を考察対象として、長崎貿易の輸出品とされた俵物と昆布について集荷量や価格などを比較し、時期と地域によって俵物・昆布の商品としての集荷方法に相違があったことを明らかにした。俵物の集荷に関して、幕府の専売品となつて御用船以外の商船への売り渡しができないということは、一八世紀後半の南部藩領では恐らく当てはまる。それに対して、生産量の多い松前・蝦夷地では、俵物のうち煎海鼠は一八世紀後半（寛政期頃）まで、長崎廻漕分以外の余剰分を売り渡すことがあった。一九世紀に入ると、名目上、「幕府の専売品」となつたと見られる。

昆布は、松前・蝦夷地、南部藩両地域とも常時御用船以外の商船への売り渡しがなされてきた（例外的に不漁時は長崎廻漕優先）。これは、昆布の生産量が非常に多いことが理由であろう。加えて昆布の価格は、俵物と比較して非常に安価であった。

以上をまとめると、俵物は根本的に生産量が少量であることにより、輸出に必要な量を確保することを目的とし幕府の専売品となつたのに対して、昆布は生産量が安定しており、長崎向け商品の集荷に特化する必要もなかったことから、御用船以外の商船への売り渡しが可能であったと見ることができる。つまり結果的に幕府は、各輸出商品の生産量に応じた買入れのシステムを構築していたと言える。

続いて、一九世紀初頭頃より、長崎向け昆布の商品の中で最も重宝された「ミツイシ昆布」の特徴（生産の様子）について考察した。その生産は、史料によると安永末期頃まで遡ることができた。また生産地は、一八世紀末期に急激にアッケシ辺りまで広がっていたようである。加えて、他の昆布と比して「細い」という特徴があった。今後は「ミツイシ昆布」が輸出昆布の中に占める位置づけを価格などの比較から行う必要がある。

(1) 若松正志「長崎俵物の地域別集荷高について」(『東北大学附属図書館研究年報』二四、一九九一年)。

(2) 松江重頼著／竹内若校訂『毛吹草』正保二(一六四五)年(岩波文庫、一九四三年) 一七三～四・六頁。

(3) 「長崎元俵物請方雜書」天明四(一七八四)年(長崎歴史文化博物館所蔵、請求番号六六〇―二二)。

(4) 荒居英次『近世海産物貿易史の研究―中国向け輸出貿易と海産物』(吉川弘文館、一九七五年)、同『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年)、小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』(吉川弘文館、一九七三年)、田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂出版、二〇一四年)。

(5) 『江差町史』第五卷・通説一、一九八二年、五九七頁。

(6) 「去ル巳年御直仕入被仰出候候以来津軽南部俵物昆布稼方之儀御取調子に相成候一件」寛政元(一七八九)年(大村市立史料館所蔵、初村家(旧峰家)史料、請求番号一一三―二七)。

(7) 畑井洋樹「問題提起九、俵物生産と盛岡藩の対応―安永期を中心に―」(『地方史研究』五三―四、二〇〇三年)。

※この論稿によると、南部藩における藩主御用の海鼠・串貝の確保については、幕府から例外的に認められていたことがわかる。このような事例は、国内各地であったものと見られる。

(8) 村山伝兵衛「松前産物大概鑑」(『日本農書全集』五八 漁業一、一九九五年)二五～八六頁。

(9) 前掲注(三)史料所収「津軽・南部取計之儀御手頭を以御尋之趣御ヶ条限御答申奉申上候書付」。

(10) 「御証文之事」天明六(一七八六)年(『野辺地町史』資料編・第一集、一九九

一年) 一八二〇一八三頁。

(¹¹) 「申年松前南部津輕 壺番立式番立雇船船名前書付」(大村市立史料館所蔵、初村家(旧峰家) 史料、請求番号一一三―三八)。

※史料中に書き記された船主名より、一八世紀後半のものであることは間違いないと思われる。

(¹²) 三石昆布(日高昆布)は、現在における昆布の生物学的な分類名の中で、近世に著名な昆布の分類の名称であった志苔昆布・江差昆布といった名称が消滅したのに対して残存していることは大変興味深い。その理由としては、中国向けに重宝されていたことも可能性として挙げられる。

(¹³) 羽原又吉『支那輸出 日本昆布業資本主義史』(有斐閣、一九三五年) 四一頁。

※幕末にも長崎から輸出される定式昆布二、〇〇〇石は、すべて三ツ石昆布である。

深井甚三『近世日本海海運史の研究―北前船と抜荷―』(東京堂出版、二〇〇九年)

二二二―四頁。

※薩摩から琉球を通して運ばれる昆布も、ほとんどが三石昆布である。

(¹⁴) 「松前随商録」天明四(一七八四)年頃成立(函館市中央図書館所蔵、写本、所蔵番号一八一〇四二八一四二)。

(¹⁵) 前掲注(三) 史料所収「松前煎海鼠干鮑昆布元直段積出御改諸掛り物定式并昆布壺斤当り凡積書」。

(¹⁶) 「蝦夷草紙 別録」所収「三、蝦夷地交易直段付帳」(『松前町史』史料編、第三卷、一九七九年) 三〇頁。

(¹⁷) 前掲注(二四) 史料。

終章

本稿では、主に一八世紀後半の北奥・蝦夷地で生産される輸出海産物としての昆布を主軸に、煎海鼠・干鮑（俵物）と、ラッコ皮の生産から集荷・出荷過程を明らかにし、その中で各輸出商品の特質を考察した。中でも、天明五（一七八五）年の集荷主体の変容が与えた影響に着目し、それぞれの商品としての特質を比較検討した。昆布を主軸にとらえるのは、この時期の長崎貿易に占める輸出海産物の中で最も重要な位置づけができると目されるためである。

一、本稿の要点

まず、改めて章ごとに要点をまとめよう。

第一章では、一八世紀後半の松前・蝦夷地で生産される輸出商品としての煎海鼠と干鮑の集荷過程について、これまでの先学で使用されていない史料を中心に検討した。俵物生産と松前藩・現地の俵物集荷商人との関係性について、天明五年を画期として大きく強化された点に注目した。その中で輸出商品としては、まず煎海鼠の集荷に重点が置かれたことを明らかにした。これは集荷状況にもよるものの、やはり生産量に規定されていたと見られる。

第二章では、幕末の事例が主体となるが、これまでの先学ではほとんど検討されることのなかった俵物の個別の「場所」における生産過程に焦点を当てた。そこでは、一人の場所請負人（住吉屋西川家）により経営された、西蝦夷地タカシマ・オシヨロ場所をとりあげた。その理由は、史料の残存状況もさることながら、遅くとも一八世紀中頃から幕末まで一貫して同「場所」の経営を行い、俵物の集荷を継続してきた蓄積があることによる。ここでは、俵物の中でもとりわけ干鮑の生産は、アイヌの人々が主体であったことが使用する漁具などの考察などから明らかになった。また「場所」

における他の産物を運搬する船とは別に、時期にもよるが俵物の専用運搬船が存在することも判明した。ここでは、「場所」社会における俵物の生産・集荷の実態を明らかにすることができた。

第三章では、一八世紀後半に焦点をしぼり、松前・蝦夷地で生産される輸出商品としての昆布の集荷・出荷過程を詳細に検討した。中でも、天明五年の集荷主体の変容過程に着目しつつ俵物との比較検討も行い、生産量の多さや価格の安さなど、輸出商品の中における昆布の特質を明らかにした。また、松前・蝦夷地で集荷された輸出品の長崎廻漕運賃は、昆布の積載量で決められるなど「量的な存在感」があったことも指摘した。

第四章では、昆布生産地の実態解明に取り組んだ。考察地は、近世後期に昆布の一夫大生産地となった東蝦夷地のトカチ場所を選定した。その中で、漁期の長さや昆布漁で支払われる賃金などの観点から、昆布生産が「場所」の地域社会に占めた位置づけを検討した。そこから昆布は、近世トカチを代表する海産物であったことを明らかにした。さらにトカチ産の昆布とされた商品の中には、出稼ぎにより獲得されるホロイヅミ（隣場所）での採取分も含まれるという指摘を行い、「トカチ昆布」の内実を考察した。

第五章では、俵物や昆布とは全く性質が異なる輸出品と目されるラッコ皮の集荷方法を検討した。ここでは、これまでの俵物研究に位置づけることを意識した結果、松前での集荷方法、とりわけ天明五年の集荷方法の転機に着目すると、他の輸出品とは、全く異なる集荷システムが構築されていたことが明らかになってきた。それは、ラッコ皮は、他の商品と比すれば相対的に少ない生産量と、非常に高価で「軽物」といわれる松前藩による専売品であったことに大きく規定されていたのである。

第六章では、これまでほとんど看過されてきた本州産の昆布のうち、南部藩領で生産される昆布（南部昆布）の集荷・出荷方法を検討した。その中で、同じく輸出品となる松前・蝦夷地と津軽産の昆布と比較検討し、南部昆布の長崎貿易に占める位置

づけを明らかにした。具体的には、南部昆布の価格が松前昆布や津軽昆布より安価なため、多量に長崎に廻漕される時期があり、利益を重視する長崎側の意図を垣間見た。それは、そのまま長崎貿易における輸出海産物の中で占める、さらに昆布の中での位置づけへと転化できる。

第七章では、これまでの総括という意味も込めて、北奥・蝦夷地における俵物と昆布の商品としての特質を比較検討した。前章までで使用していない史料も盛り込み、輸出海産物という枠の中から各商品の価格や生産量などを詳細に検討した。すると、それぞれの商品にあった集荷システムが構築されていたことが明らかとなった。

二、各輸出海産物の特質

これまでの輸出海産物における先行研究では、個別商品の持つ特質にほとんど注目されてこなかった。つまり流通・貿易統制の観点から俵物（煎海鼠・干鮑・鱧鰭）に光が当てられ、その生産から集荷に至る過程の中に、いかに幕府の強制力が働いたかという点に関心が向けられてきたのである。ところが北奥・蝦夷地を対象として、具体的にその集荷過程を検討すると、それぞれの商品ごとに集荷システムが細やかに構築されていたことが明らかとなった。幕府は強制力のみならず、それぞれの商品の集荷に合った集荷方法を選択していたのである。

煎海鼠は、輸出海産物の中でも最初に幕府の集荷が強化された商品であり、例えば松前藩に対しても、早くから煎海鼠の密売買を厳しく取り締まるよう通達していた。産地も早くから蝦夷地の奥地まで広がり、長崎向けの煎海鼠を生産していた。ただ、それに矛盾するように松前・蝦夷地産の煎海鼠は、生産量が多いとき国内へも流通することが認められる。一九世紀の初頭頃には、名目上幕府の専売品となる。

干鮑は、松前・蝦夷地において煎海鼠に次いで集荷が強化された商品であり、天明五年の長崎会所による直仕入を画期として生産浦の開発が盛んになされ、一九世紀初

頭頃には、名目上幕府の専売品となる。

昆布は、幕府により輸出商品として集荷される分のほか、国内へ大きく流通する商品であった。それは生産量が安定しているためで集荷の強制力は、ほとんど働かない商品であった。北奥・蝦夷地特有の商品でもあり、輸出海産物の中で「量的な存在感」により、利益が最も上がる商品であった。生産地でも「量的な存在感」で地域社会を代表する商品であった。

ラッコ皮は、「軽物」と呼ばれる松前藩の専売品であったため、集荷は基本的に松前藩の役人を通して行われていた。非常に高価であり集荷量も少ない商品であった。とりわけ、松前藩の役人を通して商品を集荷するところに他の商品との大きな違いが見られる。

以上のように、松前・蝦夷地産の輸出商品ごとに生産から出荷過程を詳しく見ると、それぞれ商品固有の特質があり、それによって請方問屋や長崎会所は、個別の集荷システムを構築していたことがわかる。

三、輸出海産物に示す昆布の意義

本稿で最も力点を置いて考察した輸出海産物の昆布について、これまでの俵物研究の中における位置づけを考えたい。

現在、北海道で生産される海産物の魚種別生産額を見ると、ホタテ貝と鮭に次いでコンブの割合が高い¹。翻って近世には、蝦夷の三品をあげると鰯と鮭、そして昆布である²。さらには、近世の松前・蝦夷地で生産された輸出海産物の主力三品は、昆布・ナマコ・アワビである。このように昆布は、近世から現在まで一貫して北海道における主要な海産物として君臨し続けている商品である。そうした点から考えても、根本的に昆布の歴史的な流通実態を追うことには十分な意義があると考ええる。

近世の輸出海産物における昆布の位置づけは、本論中で繰り返し述べているように、

貿易による利益から見ると、集荷量が膨大かつ利益も最も多量に出る商品である³⁾。それは当然、生産量の多さに由来すると見られる。昆布と、同じく主要な輸出海産物である俵物を近世の輸出海産物の商品としての特質から端的に表現すると、「少量で儲かる商品」と「多量で儲かる商品」という商品分類が可能と思われる。昆布は、いわゆる「量的な存在感」により、長崎貿易に中に占める意義は非常に大きいと結論づけられる。中でも一八世紀後半頃の昆布は、価格が安価であるため、松前・蝦夷地産より南部産の方が長崎では重要視されていたようである。これまで輸出海産物としては、貿易・流通統制の観点から俵物が主に扱われていたものの、むしろ昆布の方が集荷側にとつては魅力的な商品ではなかったのではないか。それは、価格や生産量から実証的に見るといえることでもある。昆布は、恐らく流通統制の程度が低いことと、生産地が北方の一地域に偏っていたことが、これまでの輸出海産物の研究で主体的に取り上げられてこなかった大きな理由であろう。ところが昆布は、生産量が安定していたため統制の程度が低いうえ、北方地域の一部でしか生産できないにも関わらず、俵物より貿易利益を生み出すという全くもって等閑視できない商品特性があることがわかる。

例えばこの点は、序章でも紹介したように、一八世紀後半の近世社会を俵物研究では「個別領主権との対立をみながらも、全幕藩的な規模での諸政策の展開」⁴⁾として、「銅・俵物に対する官設会所への強制買入等、いずれも大名経済の規制という共通の側面をもっている」⁵⁾などと位置づけられているが、昆布はそういった商品には基本的には属さない。つまりこれまでの輸出海産物の研究史では、幕府による強制的な側面が大きく強調されてきたが、昆布を加えると違う一面を示すこともできるのである。

次に昆布集荷の実態を追うことで、北奥・蝦夷地という地域そのものが長崎貿易に占める位置が改めて大きいといえる。一八世紀後半の全国的な輸出海産物の集荷量の中で、具体的な数値により俵物と昆布の位置づけを比較すると、煎海鼠が三割・干鮑が四割(割当高)。なのに対し、昆布は本稿で示したように四割以上が松前・蝦夷地産、

さらには南部と津軽産もいれると一〇〇%が北奥・蝦夷地産で占められる。以上より、輸出海産物にしめる北奥・蝦夷地の位置が極めて高いと言える。中でも昆布は貿易利潤の大きさも勘案すると、長崎貿易に占める意義は極めて大きいのである。

まとめると一八世紀後半は、宝暦・天明期からの幕藩制の動揺という事態の中、長崎貿易改革が行われ、俵物集荷に関しては、専売品指向が強まるのに対し、昆布は「潤沢な生産量」により専売品にしくとも十分に集荷できる商品で、幕府にとっては極めて好都合な商品であったとも位置づけられる。

国内（蝦夷地含む）では、北方の一部でしか産出されない昆布は、長崎貿易の存続を維持するための商品として大きな役割を果たしたといえる。蝦夷地産物の中で、鮭は肥料や食料⁷、鮭は主に食料として⁸、本州以南で一般民衆になくってはならない商品となったのと同様に、昆布は長崎貿易を維持しなくてはならない幕府にとって、最も重要な商品であった。

攔筆するにあたり、本稿をさらに発展させうる課題にも触れておきたい。

本稿でとりあげた各商品は、輸出向けとしての側面のみならず、本論中でも考察したように、とりわけ昆布は国内市場へも一定量流通するものである。つまり、各商品の特質全体を明らかにするためには、国内需要の側面にも注目して、流通システムを詳細に検討する必要がある。昆布に関しては、越前敦賀や大坂の市場へ大量に流入していたことが知られている。例えば武川家文書にある「俵物方一件」によると、寛政初年には、松前・蝦夷地における昆布総生産高が三万石あり、内訳として、長崎定式が三、〇〇〇石、長崎臨時買上が一万石、残りの一万七、〇〇〇石は大坂へ廻漕するとある。ここから松前・蝦夷地産の昆布は、長崎へ廻漕される分より、大坂市場、つまり国内市場へ出廻る方がはるかに多いことがわかる。こうした史料から、大坂など国内市場へ廻される昆布の流通過程を追うことにより、国内市場における昆布の位置づけを検討する必要がある。それと本稿でまとめた輸出商品としての昆布の位置づけを併せることで、「近世昆布流通史」が完成するのである。

続いて、昆布を長崎貿易における輸出商品としての大枠で見た場合、他に重要な商品であった銅との関係性でとらえ直してみる作業が必要である。対唐船輸出全体の中で占める昆布の割合を集荷量や利益率などから考察することにより、長崎貿易の輸出商品全体の中での位置づけに置き換えることができる。具体的には、近年松浦章氏¹⁰の出した天保四（一八三三）年の数値によると、唐船五隻の積載量（斤）の割合は、昆布七三%を筆頭に、銅一八%、干鮑四%・煎海鼠三%であった。ここでは詳しい考察は控えるが、史料に基づいて時代ごとに各輸出商品の比率を出すと、改めて昆布の長崎貿易に占める位置づけが明確になるであろう。時期による変動も確認されているが、最重要商品であると評価することができる。

以上、北方の一部でしか生産されない昆布は、今後の長崎貿易史、あるいは商品流通史においても大変魅力的な研究材料であるといえる。

(1) 『グラフでみる北海道の漁業』(編集・発行、農林水産省北海道農政事務所統計部、二〇一〇年) 三頁。

(2) 田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂、二〇一四年) 四五七頁。

※慶応期(一八六五～一八六八)頃の蝦夷地産物の出産高を見ると、鯿に次いで、鮭、昆布の出産高が続き、これら三品は、他の生産物の出産高を突出して上回る。

(3) 安永七(一七七八)～天明二(一七八二)年の五ヶ年の平均利潤(銀換算)は、煎海鼠約五万八、〇〇〇匁・干鮑約四万三、〇〇〇匁に対し、昆布は約五万二、〇〇〇匁(上納金や運賃などの雑費を差し引いても三万三、一〇〇匁)にも上る。小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』(吉川弘文館、一九七三年) 四一頁表九・八六頁表六より算出。

※なお煎海鼠と干鮑の集荷にかかる雑費は、俵物として一括されており厳密な計算ができない。

(4) 中井信彦「宝暦～天明期の歴史的位置」(『歴史学研究』二九九、一九六五年)。

(5) 松本四郎「宝暦・天明期に関する研究史と問題点の整理」(『歴史学研究』三〇四、一九六五年)。

(6) 荒居英次『近世海産物経済史の研究』(名著出版、一九八八年) 一七五頁。

(7) 田島佳也「蝦夷地海産物のゆくえ」(吉田晶編『歴史の道・再発見 第一巻・平泉からロシア正教まで』(フォーラム・A、一九九四年)、後に『近世北海道漁業と海産物流通』(清文堂、二〇一四年再収)。

(8) 右同上。

(9) 「俵物方書上」寛政初年(岐阜県歴史資料館寄託史料、武川家文書、請求番号「乙―E―8」)。

(10) 松浦章「江戸時代に長崎から中国へ輸出された乾物海産物」(『関西大学東西学術研究所紀要』四五、二〇一二年) 六八頁図七。

初出一覧

序章 書き下ろし

第一章「松前・蝦夷地における長崎俵物の集荷―一八世紀後半を中心に―」〔『北海道・東北史研究』七、二〇一一年〕を大幅に加除修正

第二章「蝦夷地における煎海鼠・干鮑の集荷―タカシマ・オシヨロ場所を事例に―」〔『小樽市総合博物館紀要』二八、二〇一五年三月発行予定〕を一部加除修正

第三章「松前・蝦夷地における唐人貿易向け昆布の集荷―一八世紀後半を中心に―」（和泉清司編『近世近代の政治・経済・文化』創英社／三省堂書店、二〇一五年三月刊行予定）を一部加除修正

第四章「近世トカチにおける昆布の生産」〔『大津・十勝川研究』一一、二〇一三年〕を大幅に加除修正

第五章 書き下ろし

第六章 書き下ろし

第七章「俵物・昆布考―松前・蝦夷地と南部藩領を事例に―」〔『帯広百年記念館紀要』三〇、二〇一二年〕を大幅に加除修正

終章 書き下ろし

主要参考文献

- 『青森市史』第四卷・産業編（上）、一九五八年。
- 荒居英次『近世の漁村』（吉川弘文館、一九七〇年）、一九九六年に再刊。
- 荒居英次『近世海産物貿易史の研究―中国向け輸出貿易と海産物』（吉川弘文館、一九七五年）。
- 荒居英次『近世海産物経済史の研究』（名著出版、一九八八年）。
- 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、一九八八年）。
- 石井孝『幕末貿易史の研究』（日本歴史学大系四、一九四四年）。
- 稲垣美三雄『日本昆布大観』（正進堂、一九四七年）。
- 『岩波講座日本歴史 近世四』（岩波書店、一九六三年）。
- 岩本由輝『近世漁村共同体の変遷過程―商品経済の進展と村落共同体』（御茶の水書房、一九七七年）。
- 上原兼善『鎖国と藩貿易』（八重山書房、一九八一年）。
- 上村雅洋『近江商人の経営史』（清文堂出版、二〇〇〇年）。
- 『江差町史』第五卷・通説一、一九八二年。
- 榎森進『北海道近世史の研究―幕藩体制と蝦夷地』（北海道出版企画センター、一九八二年）、一九九七年に増補改訂。
- 榎森進編『アイヌの歴史と文化Ⅰ』（創童社、二〇〇三年）。
- 大石圭一『昆布の道』（第一書房、一九八七年）。
- 太田勝也『鎖国時代長崎貿易史の研究』（思文閣出版、一九九二年）。
- 太田勝也『長崎貿易』（同成社、二〇〇〇年）。
- 『忍路郡郷土誌』（忍路郡郷土誌編纂委員会、一九五七年）。
- 大塚和義編『北太平洋の先住民交易と工芸』（思文閣出版、二〇〇三年）。
- 小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構』（吉川弘文館、一九七三年）。

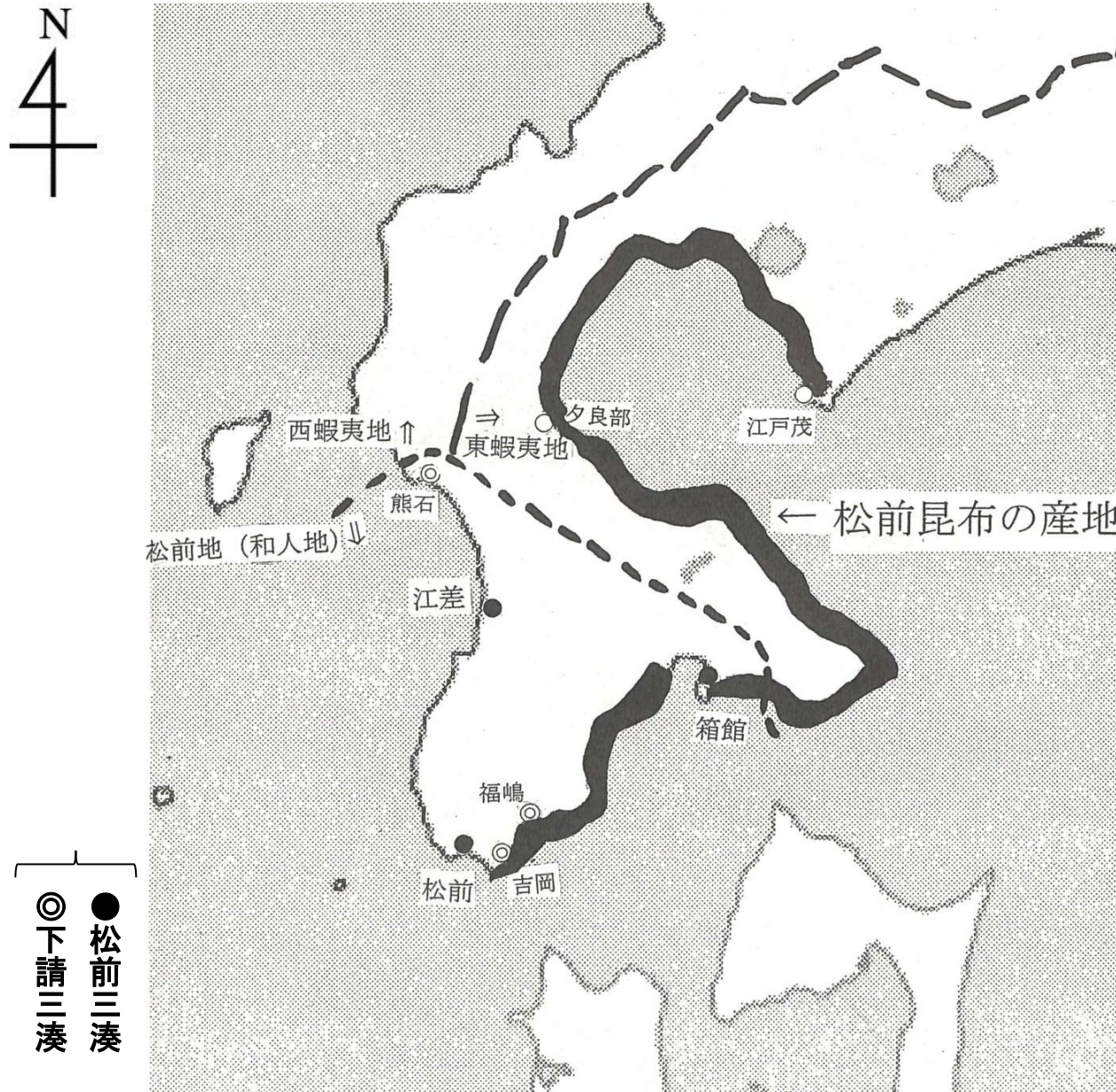
- 加藤榮一・北島万次・深谷克己編『幕藩制国家と異域・異国』校倉書房、一九八九年。
- 川勝平太編『アジア太平洋経済圏史一五〇〇～二〇〇〇』藤原書店、二〇〇三年。
- 川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』(北海道出版企画センター、二〇一一年)。
- 菊池勇夫・真栄平房昭編『列島史の北と南』(吉川弘文館、二〇〇六年)。
- 木村直樹『幕藩制国家と東アジア世界』(吉川弘文館、二〇〇九年)。
- 胡桃沢勘司『近世海運民俗史研究―逆流 海上の道―』(芙蓉書房出版、二〇一二年)。
- 越崎宗一『鯨場史話―郷土史ノート―』(北海道地方史研究会、一九六三年)。
- 後藤雅知・吉田伸之『史学会シンポジウム叢書 水産の社会史』(山川出版社、二〇〇二年)。
- 小葉田淳『日本銅鋳業史の研究』(思文閣出版、一九九三年)。
- 小山幸伸『幕末維新期長崎の市場構造』(御茶の水書房、二〇〇六年)。
- 斎藤善之『内海船と幕藩制市場の解体』(柏書房、一九九四年)。
- 斎藤善之編『新しい近世史〈三〉市場と民間社会』(新人物往来社、一九九七年)。
- 斎藤善之編『身分的周縁と近世社会〈二〉海と川に生きる』(吉川弘文館、二〇〇七年)。
- 斎藤善之・高橋美貴編『近世南三陸の海村社会と海商』(清文堂出版、二〇一〇年)。
- 桜井英次・中西聡編『新体系日本史一二 流通経済史』(山川出版社、二〇〇二年)。
- 笹澤魯羊『下北半嶋史』(下北郷土会、一九七八年)。
- 白山友正『増訂松前蝦夷地場所請負制度の研究』(慶文堂書店、一九七一年)。
- 『新広尾町史』第一巻、一九七八年。
- 鈴木康子『長崎奉行の研究』(思文閣出版、二〇〇七年)。
- 添田仁「一八世紀後期の長崎における抜荷観―唐貿易を中心に」『海港都市研究』三二二〇〇八年)。
- 高瀬保『加賀藩の海運史』(成山堂、一九九七年)。
- 高橋美貴『近世漁業社会史の研究―近代前期漁業政策の展開と成り立ち』(清文堂出版、一九九五年)。
- 竹内利美『下北の村落社会』(未来社、一九六八年)。

- 田澤伸雄『北海道昆布漁業史』（一九九〇年）。
- 田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』（清文堂出版、二〇一四年）。
- 田中健夫編『前近代の日本と東アジア』（吉川弘文館、一九九五年）。
- 地方史研究協議会編『蝦夷地・北海道―歴史と生活』（雄山閣出版、一九八一年）。
- 『敦賀市史』通史編・上巻、一九八五年。
- 鶴見良行著、中村尚司編集／解説『鶴見良行著作集（九）ナマコ』（みすず書房、一九九九年）。
- 中井信彦『転換期幕藩制の研究』（塙書房、一九七一年）。
- 『長崎県史』〈対外交渉編〉（吉川弘文館、一九八六年）。
- 中田易直『近世対外関係史の研究』（吉川弘文館、一九八四年）。
- 中西聡『近世・近代の市場構造―「松前鯡」肥料の取引の研究―』（東京大学出版会、一九九八年）。
- 中西聡『海の富豪の資本主義 北前船と日本の産業化』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）。
- 長沼孝、越田賢一郎、榎森進、田端宏、池田貴夫、三浦泰之著『新版北海道の歴史（上）古代・中世・近世編』（北海道新聞社、二〇一一年）。
- 中村質『近世長崎貿易史の研究』（吉川弘文館、一九八八年）。
- 鳴海健太郎『青森県の文化シリーズ（二〇）下北の海運と文化』（北方新社、一九七七年）。
- 二野瓶徳夫『近代土地制度史研究叢書 第四巻 漁業構造の史的展開』（御茶の水書房、一九六二年）。
- 任鴻章『東アジアのなかの日本歴史四 近世日本と日中貿易』（六興出版、一九八八年）。
- 羽原又吉『支那輸出 日本昆布業資本主義史』（有斐閣、一九三五年）。
- 林玲子『江戸問屋仲間の研究―幕藩体制下の都市商業資本―』（御茶の水書房、一九六七年）。
- 速水融・宮本又郎『日本経済史 第一巻 経済社会の成立 一七―一八世紀』（岩波書店、一九八八年）。
- 深井甚三『近世日本海海運史の研究―北前船と抜荷―』（東京堂出版、二〇〇九年）。
- 藤田寛『松平定信―政治改革に挑んだ老中』（中公新書、一九九三年）。

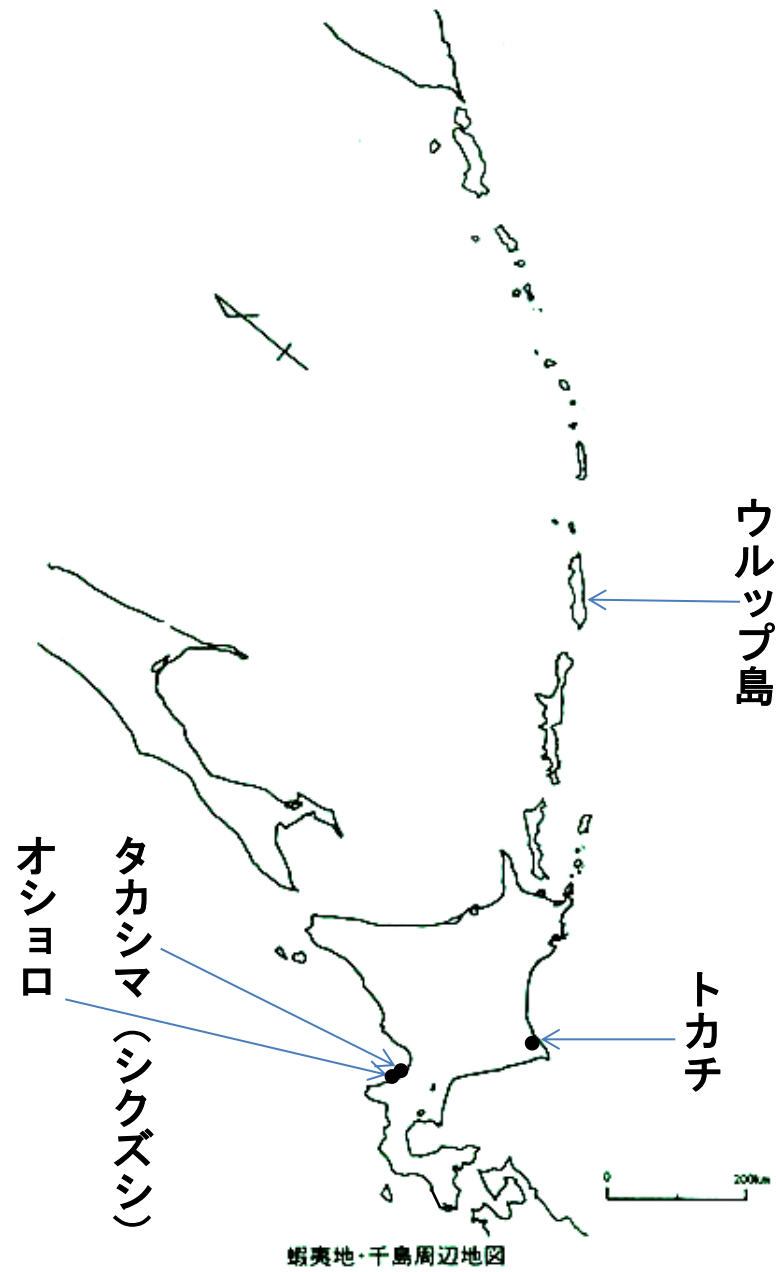
- 藤田寛編『日本の時代史（一七）近代の胎動』（吉川弘文館、二〇〇三年）。
- 細井計『近世の漁村と海産物流通』（河出書房新社、一九九四年）。
- 『北海道漁業史』（北海道水産部漁業調整課、一九五七年）。
- 『北海道漁業志稿』（北水協会編、一九三〇年）。
- 北海道・東北史研究会編『場所請負制とアイヌ―近世蝦夷地史の構築をめざして―』（北海道出版企画センター、一九九八年）。
- 本間貞夫『貿易都市長崎の研究』（九州大学出版会、二〇〇九年）。
- 牧野隆信『北前船の研究』（法政大学出版局、一九八九年）。
- 松浦章『清代海外貿易史の研究』（朋友書店、二〇〇二年）。
- 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』（思文閣出版、二〇〇七年）。
- 『松前町史』通説編・第一巻下、一九八八年。
- 宮下章『ものと人間の文化史（二一）海藻』（法政大学出版会、一九七四年）。
- 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』（岩波書店、二〇〇八年）。
- 森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易―一六〜一九世紀シベリア・北太平洋の商人世界』（彩流社、二〇〇八年）。
- 山口和雄『日本漁業史』（生活社、一九四七年）、東京大学出版会より一九五七年に再刊。
- 山口啓二『鎖国と開国』（岩波書店、一九九三年）、岩波現代文庫より二〇〇六年に再刊。
- 山脇悌二郎『近世日中貿易史の研究』（吉川弘文館、一九六〇年）。
- 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館、一九六四年）、一九九五年に再刊。
- 柚木学『近世海運史の研究』（法政大学出版局、一九七九年）。
- 横山伊徳『日本近世の歴史（五）開国前夜の世界』（吉川弘文館、二〇一三年）。
- 吉田晶編『歴史の道・再発見 第一巻・平泉からロシア正教まで』（フォーラム・A、一九九四年）。
- 歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座（七）近世の解体』（東京大学出版会、二〇〇五年）。
- 渡辺信夫編『近世日本の生活文化と地域社会』（河出書房新社、一九九五年）。

参考資料（地図編）

一、松前・蝦夷地関係地図①（天明～寛政中期頃）※第一・三章参照資料



二、松前・蝦夷地関係地図②（千島含む）



川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』（北海道出版企画センター、二〇一一年）一一頁所収地図に加除修正。

三、南部藩関係地図 ※第六章参照資料

